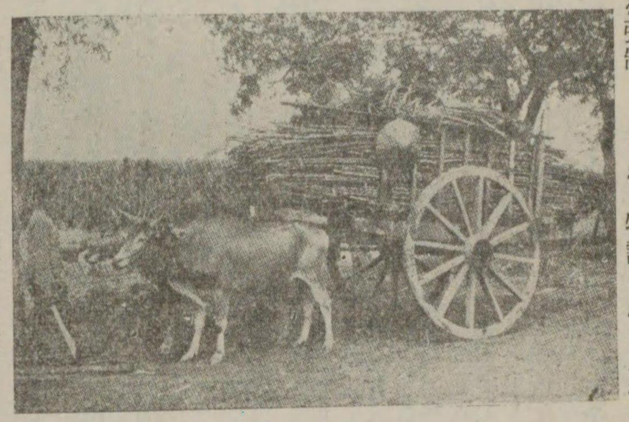
栽培を強制し、これを特許された工場に公定價格で引渡し、工場は一定の價格で政府に收めることゝした。が、これは餘り國庫を富ます譯にゆかなかつた。政府直營工場も非常の損失を招いた。その後に爪哇糖業界に一大危機が到來した。それは一八八二年初めてチエリボン州に發生したセレ病が東部地方にまで傳播し數年に亘つて猖獗を極め、爪哇糖業も全く絶望に陷らんとする情態となつたことである。次に、甜菜糖は獨、佛その他の諸國で盛んに奬勵したから急激の發展を遂げ、一八八三年には世界的生産過剰を來たし、暴落また暴落破綻百出、財界は全く混亂の情態に陷つたことである。これが第二の問題であつた。

この難局に處して爪哇の糖業者は、學者の奮起となり遂に死中活を求むるの奮闘は爪哇糖業界に一新生面を

甘蔗に場工で車牛を運ぶ



銀行の活躍となり、當業者の努力となり、

開くことゝなつた。資金の薄弱なものは農業銀行に買收せられ糖業統一の機運を促進した。次に當業者は製糖工程の改良を圖り、他の企及すべからざるまでに生産費の節減を圖つた。各地に試驗所が出來、糖業聯合會が起り、優良なる新苗種も發見された。そして爪哇糖業を安全ならしめる基礎を築く迄に至つた。この驚嘆に價する成功は科學と資本と努力の賜だと謂はれて居る。

米西戰爭の結果米國が玖瑪糖の保護を始めたので、爪哇糖は英領印度に向つてその販路を見出した。今のところは玖瑪との競爭である。日本も爪哇の砂糖には御得意中の御得意であつて、産額の四割以上が邦商の買付で、年々八千万程あつたものであるが、臺灣製糖の發達の爲めに殆ど爪哇より輸入の必要がなくなつた。その爲め、山下汽船などは閉鎖した位である。爪哇としてもその影響は大きい。

邦人砂糖農園

邦人砂糖農園としては蘭領東印度農工株式會社の千六百英反、大日本製糖の五千英反、南國産業の二千四百英反などあつたが、今は賣られて大きいものは大日本製糖だけである。この外に豐田君の三十五英反、辻君の三百七十英反などがあるのみである。

苗から砂糖にまで

優良種を作る法

苗は同一地點に栽培して居るうちにだん〳〵退化してしまう。そこで優良種と優良種との花粉交配を人工的に行ひ、こゝに更に優良なる雜種を得ることである。そこで苗木は特に高地に設けてある。セレ病の感染を防ぐのと經濟的に品種によりて成熟時期が異なるので、苗木を有つて居て專業にやつて居るものから、必要だけ購入する方が便利である。

苗木

甘蔗には苗を挿して繁殖させるのと實生との二ツある。實生は試驗所で新たな品種を作るときにつかはれるのみである。一般は挿木である。苗木を用ふるに二ツある。一は新植法で、一は株出し法である。新植法は毎年新に苗木を挿し、その關節の處から發芽せしむる法で、株出し法は刈取るとき前年の古株を殘し置き、その切株から發芽せしむる方法である。

植付

一バウにつき一万本位を植ゑる。連年同一の地に同一の作物を植ゑることをしない。大抵は三年輪作を行ふ。三年輪作とは一年甘蔗を植ゑたる地所には、二年目には大豆、玉蜀黍、落花生の類、三年目に米、四年目に亦甘蔗を植ゑるのである。植付の時期は五月から八月迄の乾燥季である。植付の後輕く灌水を通じ入れ、次に肥料を施す。肥料は窒素肥料を主とするが、地方によつては燐酸肥料を併せ用ゐる。肥料の目的は生長を迅速ならしめるがむしろ主眼である。速效肥料の硫安が用ゐられる。補充として智利硝石や、油粕肥料が用ゐられる。

收獲

成熟には十一ケ月から十四ケ月かゝる。莖の糖分が最高に達した頃を見計らひ、收穫に着手する。收穫は翌年の四月から九月迄の乾燥季に行はれる。一時にやるのではなくて、一區劃毎に標本を分析し、最も適當な時期に行ふのである。

製糖工程

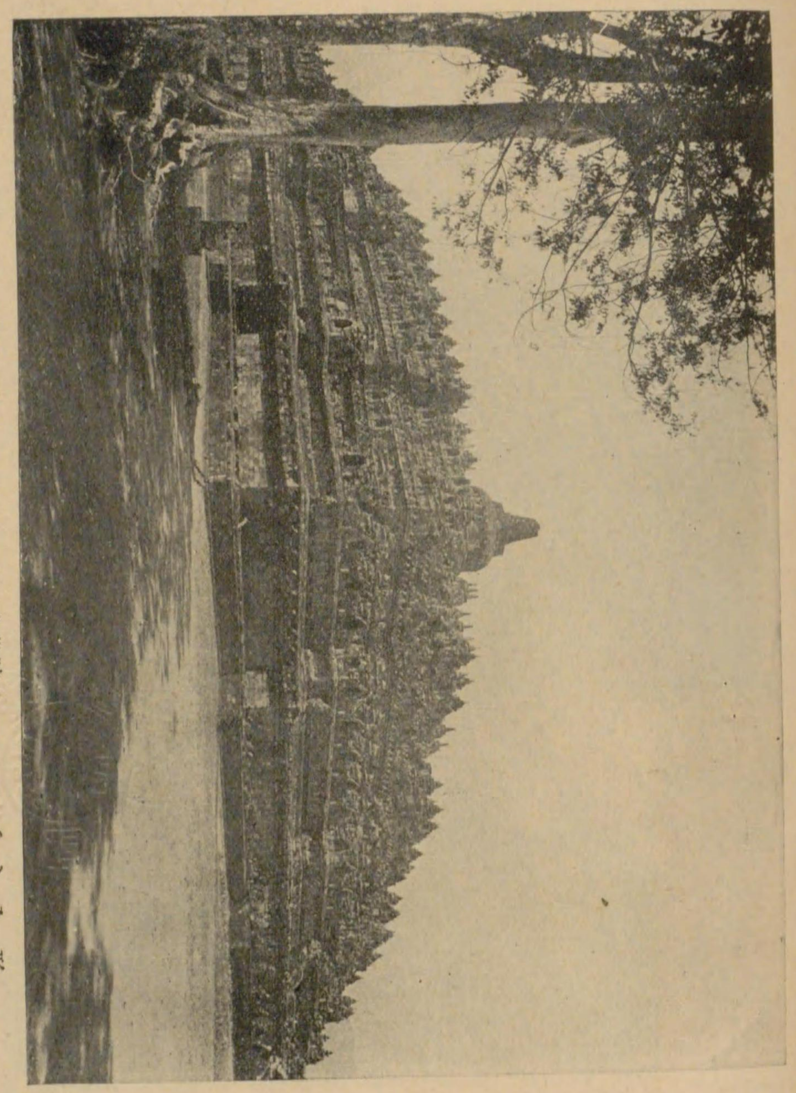
刈取られたる莖は、貨車か牛車で工場に運ばる。起重機で高い處に引き上げられ、輸送帶で壓搾機に送られる。こゝで莖はメチヤ〳〵に碎かれ、汁は悉く搾られて莖の駭骨だけが殘る。こ

れは燃料となるのである。搾り出された汁は不透明の灰色又は暗綠色の混り物があるもので、これに石灰汁を加へ、熱を加へ、浮遊物質を沈澱させる。沈澱した淳は濾して糖汁と別けられる。清澄された液汁は眞空鑵に送られ、蒸發を行へば糖水の濃いものが出來る。眞空鑵で蒸發させる必要のあるのは、高熱で蒸發させると質を損ずる心配があるが、眞空鑵だと低溫でも沸騰させ得るからである。次の機械の處に行つて觀ると、もう眞白な砂糖になつて居る。

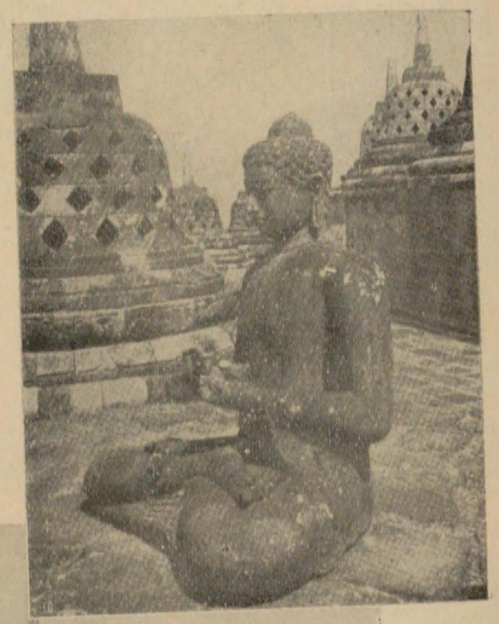
ボロブドールの大佛蹟

何と云ふても、南洋の大工藝で、ボロブドールに及ぶものはない。實に、佛敎の大權威を示すものであり、また上古の爪哇の文明が、如何に進んで居たかを物語るものである。ボロブドールはヂョクジヤの北方約六十キロの處にある。デョクジヤの街を出拔けると、バドカン・バロンカンと云ふ製糖會社の大工場が見える。砂糖畑が多く、竹林、椰子、稻田もある。自動車は坦々たる奇麗な並木の立ち並んだ道路を進んでゆく。一時間半で達する。

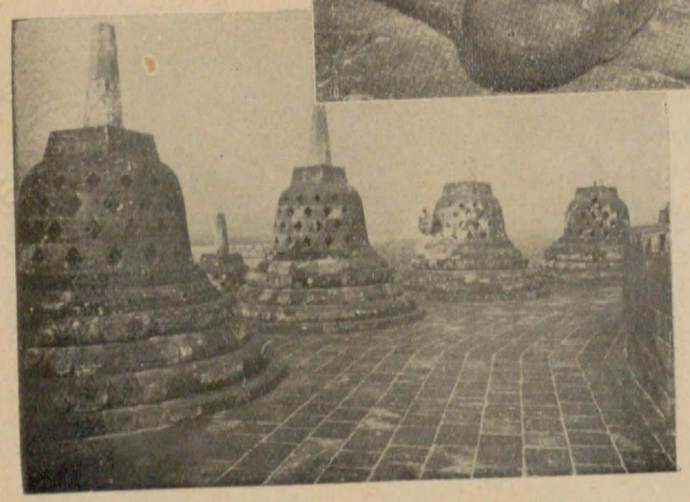
佛蹟はクドウの丘の上に建てられてある。東北には富士山の如く屹立して白雲をたなびかせて



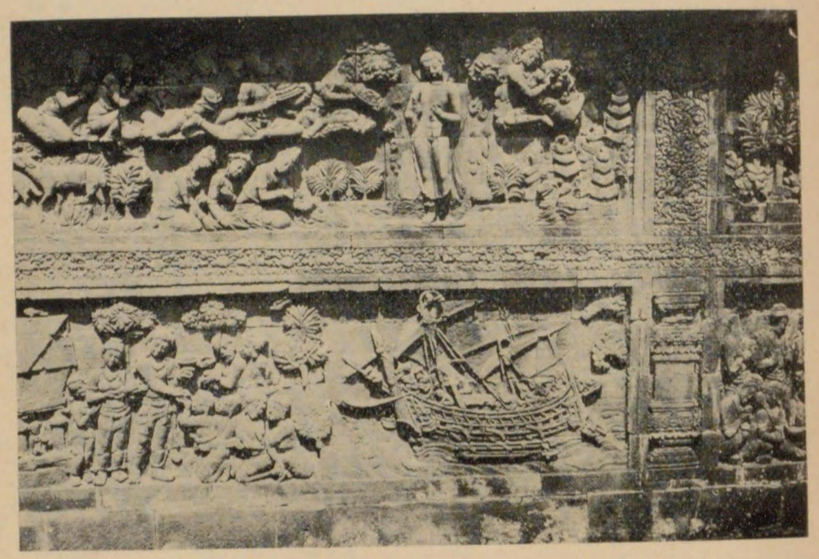
一千有餘年前の爪哇の文化を語るボロブドールの大佛蹟（一）全形



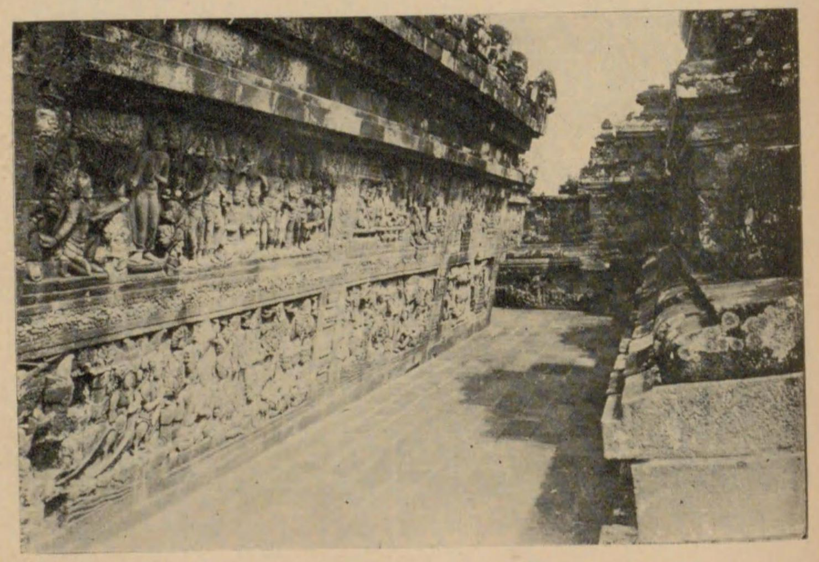
(二) 佛像



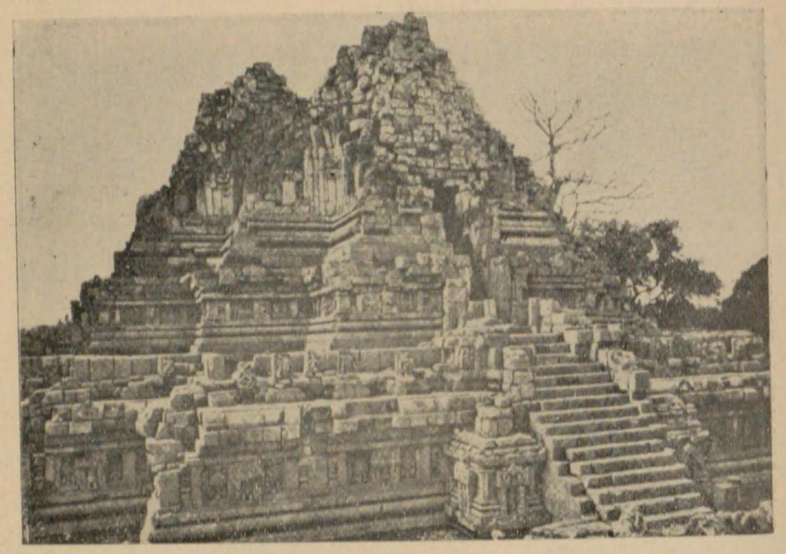
(三) 覆鉢



（四） 壁畫

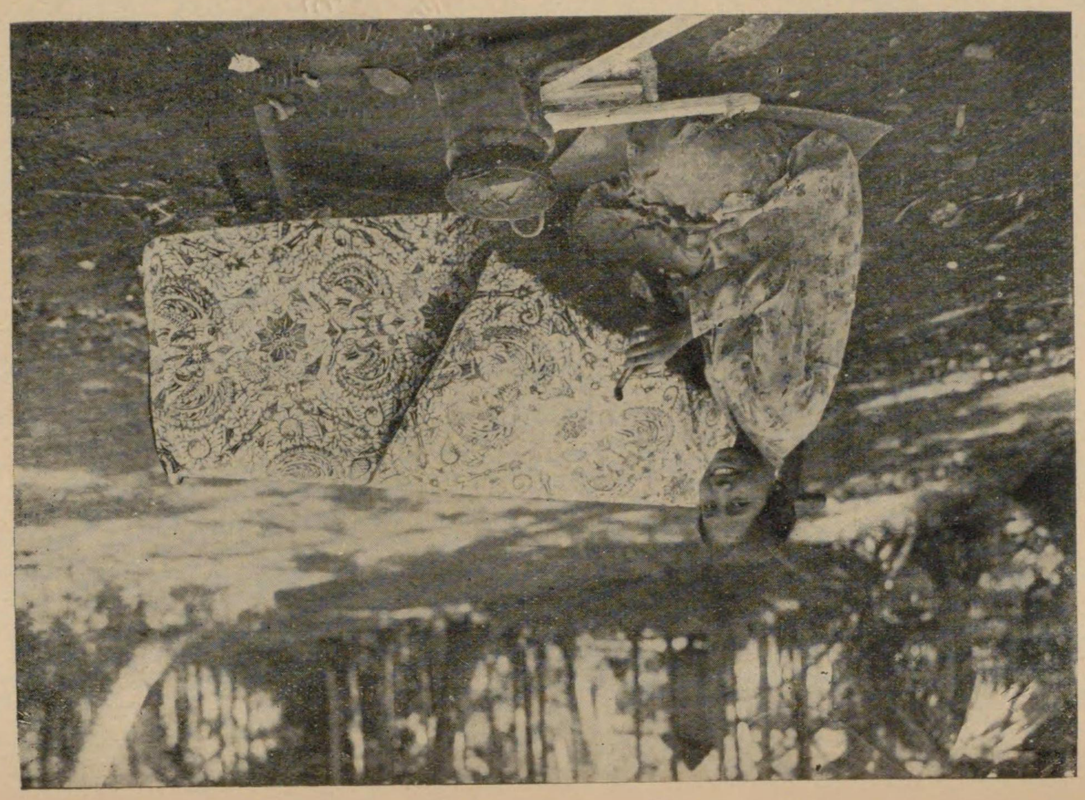


（五） 廻廊



プランバナンの佛蹟

荒廢せる水城（タマンサリー）

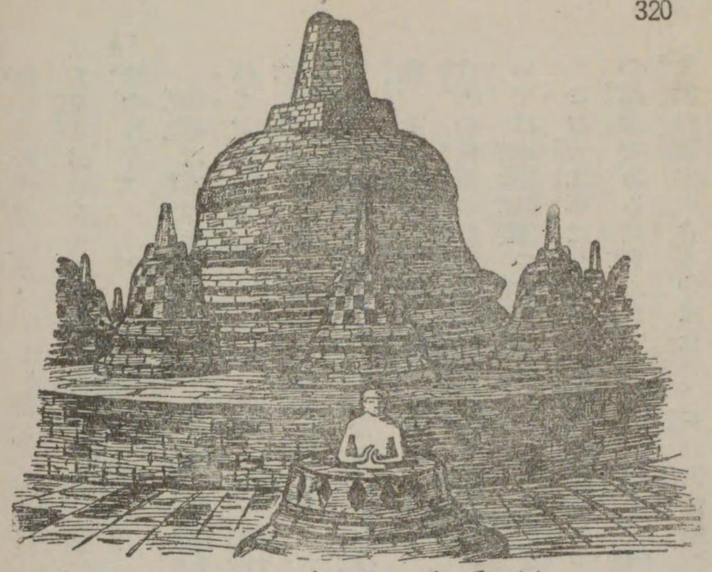


小唯更砂を造る女

居るのが赤火山で、これと相對して西北に聳えて居るのがスンビン山である。近くに起伏して居る丘陵がある。この丘陵は釋迦涅槃の像に似て居るとか。こゝは沃野遠く開けて如何にも形勝の地である。

佛塔は本來寺院ではなくて、佛骨の奉安所であると云ふ。長方形の石材を幾十万となく積み重ねて、それが一掬のセメントも、一本の鐵柱も、一個のかすがひも用ゐずに層々累々積み重ねて、世界の驚異とされて居る大建築が成り立つて居る。七千餘坪の基面を有する大伽藍は十層より成つてたち、各層の周圍は廻廊となり、その壁には幾千幾百の精巧なる浮彫がある。四百三十六の壁龕、七十二個の覆鉢、絶頂までが十三丈、浮彫の延長は三里に亘ると云ふ。浮彫は釋迦一代記で當時の世相の狀態、社會の風俗の實寫で「石造の史詩」と謂はるゝものである。一々の佛畫については卓識該博の大谷光瑞師でさへよくはわからなかつたと云ふ程のものである。

この大工事は八世紀の後半に始まつたらしく、完成までには數十年三四代の王樣の繼續的努力の結果であるは言ふまでもないが、さて何人の寄進で、何人の建立であるかは正確なことは何の文獻の徵すべきものはない。只八世紀の後半と云ふことは、サンスクリツト（梵字）その他で記



ボロブドール絶頂ノ大覆鉢
七十二箇ノ小覆鉢ノ中ニハ仏像ガアル

されたエ事指命の彫刻がある。その字體によつて、この靈場が八世紀の後半(日本の奈良朝時代)、勢力並びなきシヤイレンドラ王の建立と云ふことを推定するのみである。

これ程の信仰を集め得た佛教も、マホメツト教が燎原の勢ひで爪哇に侵入して來てからは、佛教は地を拂つて、顧る者もなかつた。ところに、附近のメラピー火山が大噴火をして、十三丈の覆鉢の頂點さへも、現はれぬ迄に埋めてしまつた。その上には、草が生茂り、樹が生え、全く山林と化してしまつたので、健忘性の土人には、すつかり忘れられてしまつた譯である。

一八一一年、爪哇が一時英國の統治の下に屬し、ラツフルス卿が總督であつた頃、學者にその地點を探査せしめ、これを發掘したと云ふことである。庭前にはホテルがあり、店にはビールやサイダーなどを並べ、說明書や寫眞などをうつて居る。

クドーの丘に近い茂林のうちにチヤンヂー・メンヅーと云ふ佛績がある。石造建築で高さ七十尺、中には端嚴微妙なる三體の像、卽ち佛と二菩薩の像があつて有名である。

この外デヨクジヤの西北郊外十二キロの處にプランバナンと云ふ佛績がある。これらは皆ボルブドウルに比べて「小寶玉」と云はるゝものである。

王城、水城

デヨクジヤは綠樹に被はれた市街で、人口約八万である。アスハルトで舗裝された大道には、王城の武士が髮を結び、スレンダン(肩掛)を右肩から左側に綬のやうに下げ、傳家の寶刀クリスを腰にしつかりぶち込んで悠々として濶歩して居る。この地の全市を壓するものはサルタンの王宮と、水城とである。

理事官の承諾を得て王城を觀ることが出來た。ソローの王城よりもヂョクジヤの方が印度式に緬甸邏羅式を交へた爪哇の美術を應用したものと云はれる。第一門に這入れば廣場があり、その一方に回々教の寺院がある。中央には恰も左近の櫻、右近の橘と云ふが如く、四民が王室擁護の表徵として、ワーリンゲン樹二株を植えてある。この樹が本幹矗立して支根長く延びて周邊を取り圍んで居る。第二、第三門には、洋式やサロンをまいたのや色々の衞兵が衞つて居る。寫眞を撮ることは許されない。第四門をくゞれば王族の邸宅があり中央に大廣間の殿堂がある。天井から四壁は極彩色の上に金泥を施してある。王邸の周圍には百官の事務所、邸宅百工の住宅などがある。今日は殿中に於て王族が舞踊の練習をして居られる。歌手がのどかな調子で、和讃に似たやうな歌を歌ふと、それに合せて、鉦・木琴、鐵琴、胡弓、太鼓の洋々且つ融々たる音樂が始まる。二人の男子は相對して、日本の能樂に似たやうな所作を沈着嚴峻な態度でやる。

帶刀の武士が舞樂殿の四方を固め、王族は息をこらし眼をみはつて拜觀して居る。遙か殿前を通るものも腰を屈め、合掌禮拜して過ぎる。嚴肅にも又優雅なものである。奈良の都の大宮人の櫻かざして歌ひたる、その古へもしのばれる。舞樂を拜觀し、武器庫、裝飾庫、車庫などざつと觀

て壁外に出る、壁の長さは五キロ以上あると云ふ。障壁の四隅には大砲を裝置してある。門の處で貴人の行列に會ふ。從者數名がこれに從ひ長柄の傘をさしかけて行く。ヂョクジヤもソローも日本の旅客には一層興趣が深い處である。

ヂョクデヤには邦商として、富士洋行、南洋商會、河合洋行の三ツの雜貨店がある。皆この町の堂々たるトコである。

○

水城は周回五キロ（一里餘）の城壁を以て圍まれた城で、王城迄地下道があつて王の避難所とも云はれてゐるが、避暑の爲めの別宮であらう。去る年の地震で壞れたまゝに使用もせず修理もせずにある。土人を案内にして、中に這入る。芭蕉や椰子のある土人士族の家があり、濕潤の氣、紛紛として鼻を撲つ。

一番高い處が、天主臺のやうで、王の寢室、王妃、宮嬪の寢室、朝夕の修道場、王子達の食堂、池とか云ふものが各處にある。煉瓦の上にセメントを塗つた城壁は高く聳ゆるも、破壁殘壘、只蔦蘿が纏ひ荒草離々として夕刻暮色迫る頃であつたから、一層陰慘の氣にうたれた。

池には泥水があり、名も知らない草が生えて居るが、一々説明を聞くと、池塘には清水滿々と湛え、官女は玉の如き肌を現はして池中に浴し、遊び戯れる。その側の石の廊下を傳ひ行けば、一つの石室があり、池に面して窓が開かれて居る。國王は餘念もなく、無邪氣な遊びに見とれ給ひ、その中、花顏玉膚を早速召された、と云ふのである。

王の寢室と云つても石造の部屋で、砂で練り固めたやうなものである。こゝも寢臺迄、水が湛え得られるやうになつて居る。恐ろしく暗くて陰氣である。大江山の酒呑童子ではあるまいし、石室に美人を召されたとて、翠帳紅閨の意氣なところがあるではなし、息もつまりさうである。況や、その側にトンネルを穿つて、何處かに通ずるやうになつて居り、何時でも蒙塵遊ばさる御用心があるとは。昔の王樣と云ふものは氣骨の折れたものである。

城の側に流れがある。こゝに水門があつて堰いて城内に注げば、寢室、池塘、修道場等は漫々たる水を以て浸さるゝのである。日ぐれ近くなり廢墟は益々陰慘の氣を加へる。

名物サロンの話

爪哇更紗の製作

デヨクジヤ、ソローの二つの都は、共にサロンの本場で、模樣もこゝのものは地味で澁味がある。サロンは馬來人一般に纏ふて居るもので、貴賤貧富を問はず、男でも女でも、是非なくてはならぬものである。

サロンと云へば布の總稱のやうになつて居る。が、實はサロンは袴で、カインと云ふのが布である。男の頭に戴く帽子を作る布が、カイン・トピで、女が外出の時、頭から上半身にかけて被るのが、カイン・パンデヤン、袴はカイン・サロンであるさうである。

サロンを作るには、始めに鉛筆で下圖を描いて、その上を、矢立位の大きさで先が管になつて尖つて居るもので、熔した蠟を容れてあるものがあるが、それを以て上に、熔した蠟を塗つてゆく。その布を藍に浸す。さうすると、蠟を塗を塗つてゆく。その布を藍に浸す。中々手數つたところだけが白くなる。今度は、また丹念に模樣を描いて、復た他の染料に浸す。

のかゝつたものである。これをやつて居るのは女であるが、實に熟練したもので、蠟の管を以て直線曲線自由に描いてゆく。爪哇の女は決して、無器用ではないのだ。近頃は萬事拙速主義で、一枚のサロンに、さう幾日もかゝつて居ては間にあはぬと云ふので、型で押す。染料も爪哇の藍を用ゐたのでは引きあはないから、獨逸製の安い染料を用ゐるやうになつて來た。ホントウの確なものは、描いたものでなくてはいかぬ。値段もズツト違ふ。が、素人眼には判別しにくい。一枚一盾五十仙のものもあれば、數十盾するものもある。

サロンを用ふるときは、最初水に浸して置いて、影干しにすると良い。と云ふのは、いつまでも色がさめないからである。

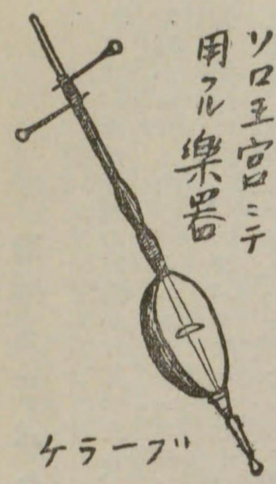
ソローの王宮

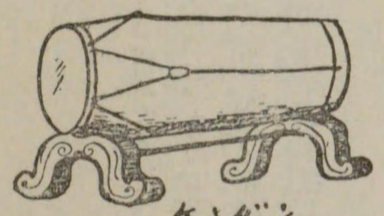
ソロー王宮の宮門、宮城は大體ヂョクジヤのものと同じである。

この日、宮女達の舞踊の稽古があり、伶人二十人が各種の樂器で、優揚たる樂を奏し、のどかな調で歌ひ、唱に合せて美麗な模樣の衣裳を纏ひてしとやかに踊る。二十人程が適當の距たり

を置いて整列し舞ふのは優雅なものである。一人に一人の師匠役の女がついて居て腰のひねり具合、手の動かし方など直してゐる。王宮には十歳から二十歳位までの舞姫が二百人も居ると云ふこれらは皆身分あるものから選び出されたのであつて、容色も藝も優秀なものは女官となり、また後宮にも入るが、さして優秀でないものは家に歸つて更紗を作る。

用事があつて侍女のその邊を通るのが、膝を折つたまゝ、巧に膝行ゆくなど古き繪卷物でも觀るやうである。





商港スラバヤ

スラバヤは港灣の設備から言つたら、タンジョン・プリオークに遠く及ばない。又、街衢の整へる點から言ふたら、ウエルテフレンデンの瀟洒たる美觀はない。が、その市況の活潑に於て、街頭の繁華に於て、スラバヤはバタビヤ、スマランを凌駕し、爪哇の大阪とも言ふべき街で總人口三十万、歐洲人一万九千と註せられて居る。英領の新嘉坡と力は違ふが對抗して見ようと云ふ、輸出入額約四億盾を算する東印度第一の貿易港である。

スラバヤの所在地が既に爪哇第一の豐沃の寶土である。亦沃野連るスラバラヤを中心として、西には豐饒なるレンバン、マジョンの二州があり、南には風土佳良のケデリ、バスルアンの二州がある。東にはマヅラ、バリー、ロンボツクの寶島もある。陸上の鐵道は悉くこゝに集まる。海路に至つては、セレベス、ボルネオ、ニューギニア、新嘉坡、濠洲、日本への聯絡は自由に出來るのである。砂糖の輸出が盛んである。

昔、元の忽必烈の軍艦が押し寄せたのも、こゝの港であつた。和蘭が十七世紀の初根據を置いたのは、バンタム（バタビヤの西）と、このスラバヤとであつた。

市街はマス川を中に挾んで長く延びて居る。本市街は、南北五キロと云ふが埠頭と郊外を加へると南北十キロに亘つて居る。バタビヤでは晝寢をするが、こゝでは蘭人でも晝寢をせずに奮鬪して居る。スラバヤは活氣滿々の都會である。

スラバヤの日本人

スラバヤには約六百人の邦人が居る。矢張りこゝも新嘉坡と同じやうに、或る時期に革新を叫ばれたこともあつた。舊腕力組と新に出來たブルヂョア階級との勢力爭覇の時代もあつたが、結局日に日に榮え行くブルヂョア階級の勝利となつて、スラバヤの邦人團の面目が一新した。各會社、各銀行の重役が幹部となつて采配をふるふやうになつた。これは時勢の進歩であり、發達である。また當然かうならなければならなかつた。

日本人會の現在の會長は三井物産の卜部氏で、三菱とか汽船會社その他の會社から出て居る。宏壯なる日本人會館は、昭和二年二月に起工して、同八月に至つて竣工した。經費は十二万盾

を投じた堂々たる建物で、會議室、圖書室、食堂、事務室なども備はつて居り、庭前にはテニスコートなどがある。

日本人小學校は構内に連接して建てゝある。學齡兒童が二十七名、幼稚園兒が二〇名である。晝間正科の外、夜學があつて、和蘭語、馬來語を教授して居る。その規模に於て蘭領東印度中に比肩するものは無いのみならず、他に於ても餘り類を見ないのである。

これらを以て見ても、如何にスラバヤの日本人が活動して居るかゞうかゞはれる。

日本領事館がある。

今商社商會の重なるものを擧げて見ると、銀行には横濱正金、臺銀がある。一般輸出入貿易商としては三井物産、三菱商事、大同貿易、細亞亞貿易、下里、太洋商工、竹腰がある。糖業專門には、大日本製糖、日本砂糖貿易がある。綿布その他兼業に三ツ引が控え、鈴木、有馬、爪哇貿易、千田、南國産業がある。綿絲には日本綿花、東洋綿花、中村、江商、松永、遠藤がある。雜貨商としては南洋、大信、綿屋、八藤和、東明、南印がある。賣藥に翠松堂がある。美術品に大和商會がある。

海運に大阪商船、南洋郵船があり、倉庫業に南洋倉庫がある。

新聞社に爪哇日報の支社がある。東洋協會の商品陳列場がある。理髮店も十軒位はあらう。ホテルに東洋ホテル、堀野ホテルがある。料理店にも純日本式の松本樓があり、純日本食の「奴」と云ふがある。

トサリ行

二時迄に荷物を片づけて宿に預け、自動車で出懸ける。鐵道に沿ふて南の方にゆく。今は乾季で道が乾き切つて居る爲め、塵埃濛々と立つ。

パスラム迄はマヅラ海岸の鐵道線路に沿ふて來たが、パスラムで御別れして、愈々山に登ることになる。

ブロモ火山は、標高二千二百九十五メートル、海岸の平地から三十餘キロの處に、急に聳え立つて居る山で、幾十幾百の山の襞が、大谿谷、小谿谷をなして居る。この脊梁を迂餘曲折し、百折千折して登つてゆくのであるから、その急峻なることは推して識る可しである。頭足相接すと

云ふのでは、自動車は登れない。が、狭隘な所を曲りくねるので、僅かに車が上り得る程度になつて居る。

谿谷を見れば幾百千仞の深さで、一旦滑り落ちようものなら、何處迄落ちてゆくだらうか、それさへ判らぬ。奈落の底と云ふが、全く、身の毛もよだつやうな深い深い谷が底知れずに下に續いて居る。で、山道の谿谷に向ふ所には、三尺若しくは一間置きに、亭々たる檉柳松を植ゑて、脱線――でない脱道を防いで居る。

何んといふ權木か、さながら鐵砲百合と寸分違はないやうな白い花が、山の殘雪かと疑はれる許りに、咲き誇つて居る。斯様な山道を曲りくねり、登り登り、スラバヤを出て二時間と四十分でテンガー峻峯中の別天地トサリに着く。

トサリは海拔一千八百メートルで、爪哇第一等の健康地である。こゝに佐竹君と云ふ人が、寫眞屋を開いて居る。佐竹君は先年、南米で一仕事をやらうとブラジル、アルヘンチナ、パラグアイ等を旅行したのであつたが、資本が無くては農業の經營も出來ないのだと考へてたので、爪哇の幽仙郷トサリに陣取つて、寫眞屋を始めたのである。技術も相當しつかりして居る。又、爪哇

の名勝地を控へて、遊覽客、避暑客を相手にやつて居るので、商賣は大繁昌。老紳士も若い娘も逗留客も、記念撮影を頼み、風景寫眞を買ふ。

佐竹君から山の説明をきく。

ブロモの火山に行くのも良いがピナンヂヤンに登れば、火口、砂海、四圍の群峰、雲海、滄海等、一眼に觀られる事。午前二時に起きれば、ホテルで辨當や馬の心配などして呉れる事。輿もあれども、馬の方が却て樂な事。途中の危險は更にない。寒さの用意は、時に寒いこともあり、又左程でもない事もある。これは時と場合で、一概には言はれぬ事。

格別案内者も要らぬやうである。兎に角、グランドホテルに落ちつく事にした。ホテルは坂を下つて、四五町の所にある。ホテル・ブロモ、ホテル・カリアなどよりも新しくて、遙に大きいらしい。谷と谷との脊梁のやうな狭い地積に在るから、住居と幾つかの建物は、二段に造られて居る。吾々は下の方の客室に案内された。庭園には蕨？　の大木の椰子の木のやうに見えのが、四方舍を圍んで植えられて居る。

ホテルの庭から見れば、一方は深い谷で、谷底からは白雲が湧き出で、それは折しも夕暮れ時

のことゝて、淡紫、淡紅で彩られた。日本の眞夏に見るやうなの雲の峰が、カウヰ、アルゲヨナの峰峯の頂き近く迫つて、或るものは大入道の如く、或は、妙義山の危岩奇峯の如く、實に莊觀、奇觀である。雲の峰の下邊より下界一面は、只漫々たる雲の海。

暮色トサリの街を包んでゆく頃には、電燈煌々として輝き出す。空には一點の雲もない。

ボーイを呼んで、食事は何時かと聞くと、八時だと云ふ。明日は二時起床であるから、早く食事をすませて寢ようと思つて居るのに、斯樣な規則なら仕方がない。何んだか非常に寒くなつて來た。シヤツを着外套を被る。腹が空いてどうにも仕樣がない。ソーダ水を取り寄せウヰスキーを交へて、胃の腑を慰撫し、幾分の暖をとる。

ボーイに、二時に起す事、馬二頭、苦力（馬子）二人用意の事を命ず。ボーイはクダ（馬）ドア（二）ヤーヤー、オラン（人）ドア、マカン（食事）スス（牛乳）ロテ（パン）ダギン（肉）ヤーヤー、と一々判つて居るといふ風だ。

先に、寢臺に毛布二枚あるのを檢めて置いたが、不安心だ。尙二枚毛布を持つて來いと命ず。毛布はカイン（布）パナス（暖）と敎はつたが、暖かい布丈けでは不安心であるから、今一ツ毛

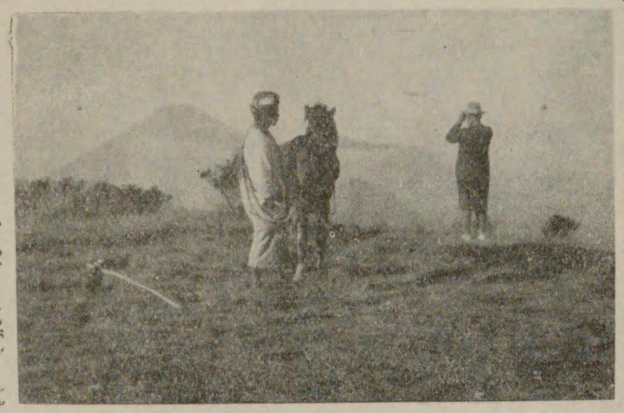
布（セリモーヅ）と念を押す。これもボーイはヤーヤーと領いた。

部屋に這入ると、後からボーイが、毛布二枚を抱へて來た。武井氏は西洋船來、無類飛切の毛布を始終抱へて御座るから、この點毛頭心配がない。毛布四枚は大袈裟で、これなら日本の酷寒でも、心配はない筈ではある。が、暑さになれると、寒いのが苦になるものと見える。

眞夜中、ボーイがコツ、コツ、戸を叩く。時計を見れば、二時だ。起きて支度をする。ボーイはコツピーと、ビスケツトを持つて來る。

箱根主人の登山しての話には、手が冷たくて、手綱持つ手に感じがなくなつて來た、と云ふのであつたから、用心專一とタオルを首に捲き、膝掛を赤毛布式に被る。

子馬と氏井武のンヤヂナピ



この膝掛はブラジル以來、身邊に種々の用務を勤めて居る、ブラジルで、板張の腰掛の下等車

に乗つたときは座布團となり、足の蒸れたときそつと靴を脱ぐ場合は全く膝掛け、足かくしとも なつた。夜は毛布代用で、手廻り品の多い時には、これに包んで手提の皮紐でしばり、早速の手荷物とした。

しかし、これを外套としたのは今回が始めてである。馬上、膝掛の兩端を首のあたりに結んだその恰好は、アラビヤの隊商か英姿颯爽たるローマの勇將か、自ら微笑を禁じ得ない。

空を仰げば、深碧の空は澄み渡り、星斗爛々、二十幾日の片われ月は沖天に輝く。佐竹寫眞屋の處までゆけば、直ちに、幾千仞の深い深い谷間に下りる。月影はあれども木下闇は一層暗い。馬は急峻なる山道を下りてゆく。下り切れば、直に亦上る。上り切れば、そこに柵があり、門があり、戸がある。夜番が居て開けて呉れた。こんな處に人家があり、町らしきものがあるのだ。

こゝを出ると、底知れぬ谷を見ながら馬の背のやうな處を登る。馬は馴れたもので、喘ぎもしない、平氣である。急峻になれば急になるだけ急ぐ。先に立つた武井氏の馬は、仲々元氣が良い。半驅け足である。一人の馬子はその鼻面をつかまへ、後の馬子が尾につかまる。それでも急ぐ。自分の馬は遅れる。梢を折つて鞭とし、馬の尻をひつぱたきつゝ走らしてゆく。

前の方の木闇から、「オーイ、オーイ」と呼ぶ聲がする。一鞭あてると、馬は思ひ出したやうに駈け出す。その時は追ひ付くが、亦遅れる。亦鞭打つ、亦急ぐ。やうやう自分の馬も先きの馬に追ひ付いた。追ひ付いて見ると、馬子が武井氏を捕へて、しきりに何か云つて居る。何事かと思へば、時間時間、時間は何時かと言つて居るのだ。「時間を聞いて居るんです。」と言ふと、武井氏は馬上で指を四本出して見せる。これこそ本當の禪宗の問答だ。時計を見れば、正眞正味の四時である。一時間といふものは峻坂を息もつかずに驅け上つたのだ。

馬子は夜明け迄には、頂上に登れると思つて、休みもせずに亦牛飛びに驅け登つてゆく。恐ろしい奴等だ。

登つてゆけば、鶏の鳴く聲が聞える。犬の吠える聲も聞える。人が住んで居るらしい。段々進むと全山パラー松の矗々天を摩す大森林となる。パラー松の木は根本から頂上まで一直線をなし、五葉松の五倍もある長い葉が、枝垂れ柳のやうに葉を垂れて居る。道には石ころがあるのか、木の幹が倒れて居るのか、暗くて判らぬが、馬は相變らず片飛びに急いでゆく。

亦、犬が吠える鶏が鳴いて居る。鶏や犬が居るなら、人家があり、虎や象など居らぬ事は請

合ひ。マア、かうやつて居るうちに、行く處には行けるだらうと、馬のシツペタを叩き、時々驅足をさせて付いてゆく。五時三十分に、馬子は愈々ピナンジャンに着いたと云ふ。

登ればやゝ平な處がある。こゝが展望の最も好い處らしい。夜は未だ明けぬ。山上は流石に寒い。馬子に木を集めさせ、火を焚く。山上で火を焚くのは固く戒められてあると見えて、火焰の起るのを氣にしながら火を焚く。これで大分暖かになつた。

夜は未だ明け切らぬ。雲霧に包まれた千山万岳の間には、處々電燈がちらつく。

こゝは海拔約二千五百メートルであるが、この朝はさう寒くはなかつた。寒暖計を見ると、五十六度である。しかし、氷點下になる事は珍らしくはないといふ。

曉近くして、月光淡く、天地は薄衣を被つて居たやうになつて居たものが、五分、十分、二十分と經てば、東の空にパツとぼかした紅が、見る見るうちに擴大し、東天一帶紅となる。この間に、幾條の紫雲を配合する。紅雲はやがて金色に輝くと見ると、眞紅の大日輪が金海に飛び上る。天地は急に明るくなる。東天の紅も薄く、大陽の形も小さくなる頃は濃霧霽れ渡つて、山々の輪廓が段々鮮かになる。

今度は落ち付いて、四圍の光景を眺める。

脚下に横たはる雲霧の海と見たは、これが幅五キロ長さ十キロのブロモー火山を取り圍んだ大砂海であつた。砂海の四方は山となつて居る。これは外輪山である。砂海の中には、大小の摺鉢を伏せたやうなものがある。その摺鉢のうちでも、今盛んに萬斛の煙を吐いて居るのがブロモ火山である。ブロモ火山の先方には、その形富士の山に似て、標高三千六百七十六メートルと註せらるゝスメルウ山が雲上に聳えて居る。日本尺で一万二千百三十尺あるスメルウ山は、高さに於ても富士山に匹敵すべき高山である。

ピナンジャンの高處から眺めると、雲海漠々たる間に、實に、乾坤雄大な舞臺が展開して居るので、ブロモ火口の萬斛の噴烟も、十キロ餘の大砂海も左程に感じない。舞臺の雄大で、展望の廣濶など云へば、比類少きものであらう。

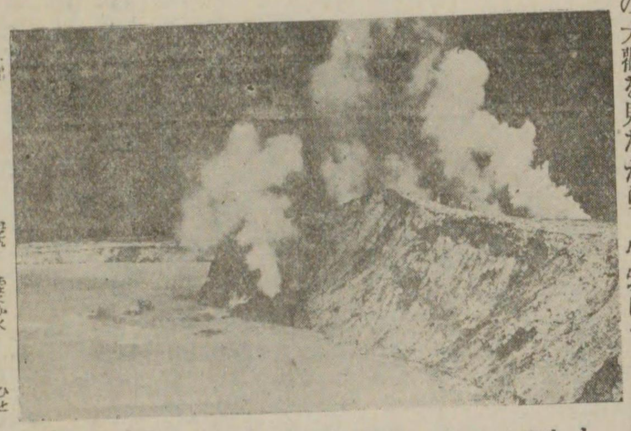
脚下には、噴烟渦卷き昇るブロモ火山、雲霧立ち迷ふ漠々たる大砂海。その後には、一万二千餘尺のスメルウの高峯が天にそゝり立つて居る。東方遙か雲間に突き立つて見ゆるのが、ラモンガン活火山で、噴烟の天空高く立ち昇つて横に棚引いて居るのがかすかに見える。左の方の山々

は、カウキー、アルジョナの諸山で、雲間にその雄姿を現はして居る。前面は、谷から平野、海空、にかけて、只一面、簇々層々果てしもない雲の海である。

眼下砂海の處を見て居ると、やがて、白い白墨の動く位の人影が、三ツ二ツ砂漠の端を火口に向つて動く。ブロモの火口に向つてゆく人々らしい。双眼鏡を出して見ても、馬に乘つてゐるのかゐないのか判然しない。そのうちに噴火口の上り口に行き着いたやうである。一寸間を置いてから再び觀たが、もう見えなかつた。

すつかり雲霧は霽れた。附近をよく注意して見ると、驚く可し！　この八千尺のブロモ火山の外輪山、卽ち大砂海に接した高原地は、皆畑地になつて居るのである。又、その下の窪地、谷間のやうな處には、人家が軒を並べて、小さな町なして居り、高い處には點々と相離れて、人家が見えるのである。

途々、鷄の鳴き聲や犬の吠える聲をきいて、かゝる處にも住む人があるものかと驚嘆したが、これなどは讀書入門卷の一程度で、二千五百メートルの高原山谷に、町家があるとは眞に意外であつた。



海砂大と煙噴の斛万

この大觀を見ながら、牛乳にサンドウキツチ、バナ、、鷄卵等の食事をする。馬子もパラパラした飯に蝦の干したのを菜として、指でつまんで頰張り腹をこしらへて居る。

山上で活動寫眞を撮る。

午前八時山を下る。武井氏の馬は無上に急ぎ出す。今度は登る時とは違ひ、後れたとて驅けさせるのは危險故、平等に急がすため、馬子に一筋の綱をつけて引つ張らす。

例のパラー松の林を出ると、驚いた事には峻嶽嶮山の側面は立派に耕され、何か植えられて居る。一體全體こんな足がかりもない落ちれば千仞の谷と云ふ峻急なところを、如何にして耕したか。綱でも張り渡してそれにつかまつて耕したのか、殆ど直角にも等しい急勾配である。

千里の沃野は、外人の利益のための砂糖畑に提供し、何千尺の高處の峻坂を、終生登つたり下つたりして、瘠せてヒヨロ〳〵した玉蜀黍に、僅か飢を凌いで居る彼等土人の生活もまた哀れなものである。

登る時は二時間半かゝつたが、歸りは二時間。丁度十時にトサリのホテルに着く。晝飯をすませてスラバヤに歸る。

マランの同胞をたづねて

マラン町

スラバヤの東京ホテルを立つたのが、午前七時である。朝の涼風を味はひつゝ、椰子園、甘蔗畑、稻田等に挾まれた坦々たる道路に自動車を走らす。左にはペナングンガンの峻峯を望む。山路とは云へ急峻ではない。田があり、土人部落がある。

マランの街までは、スラバヤから九十三キロある。マランは人口五千ばかりの町であるが、スラバヤからケデリーに至る南部鐵道の要路にあつて、パスルアン州の重要市場である。海拔四百四十メートルの高地で、日中は氣溫最高八十度まで昇るやうである。氣候が相當よく、且つスラバヤにも近いので、富豪の別莊地になつて居る。

日本人としては、雜貨商に佐伯商店、南洋商會、トコ小川の三軒である。この外に、理髮屋、靴屋、洋服屋、製菓子業が各々一軒づゝある。

佐伯商店

佐伯商店での日本品と外國品との賣行、一九二三年から四年にかけては七分が歐洲品で、日本品は僅か三分であつた。が、一昨年から薄利多賣の主義で、なるべく多く御得意を作るやうにしたところ、それから日本品が四分、歐洲品が六分となつたさうである。今では五分五分の處まで漕ぎつけが、只、歐洲品と競爭して、如何なる程度まで、日本品が生產費を減じ得るかが問題であると云ふ。

佐伯商店での賣行は、日に四五百盾見當で、月に二万盾近くはあるさうである。で、今の處利益は一割以上にはなつてゆくから、御蔭でやつてゆけると云ふ。歐洲人になると、一般に生活費がかゝるので、勢ひ賣數を多くしなければならないが、この點は日本人の方は餘程らくらしい。

佐伯君は未だ若いが、奮鬪家である。數年の間に急激の發展振りを示した。

サムライ農園

カウヰ山腹に、岡野君と云ふ人がサムライ農園を經營し、スラバヤの人々に人參や牛蒡大根などを供給して喜ばせて居るときいて、「セロルジョウのジヤポン・トウアン」と云つてたづねた。大街を横道に這入つて、山の部落に行くのである。が、家は仲々判らない。この部落の四ツ角

を右に這入れ、と教へられる。その通りゆく。復た聞くと今度はさうではない。上らなければいけないと云ふ、上つて聞くと下れと云ふ。實に閉口だ。案内したホテルの番頭君に、「君、今少しよく運轉手に聞かせたらどうだ。」と言ふと、「スラバヤでは馬來語で通用しますが、こゝへ來ると、爪哇語でサツパリ判りませんので……」と番頭は頭をかく。どうにか尋ねつけたが、肝心の本人は不在だつた。

その後八月、スラバヤを再び訪問したとき、岡野君がたづねて來て呉れた。以下は岡野君の話。

「いつも土人を騙し、土人の貧しい財布から、汗の結晶を搾り取る支那人の商賣は舊式です。村の先達株の人々が二三人、いつも產物の米やカボツクなど賣りにやつて來ると、支那人はこれを値段を叩いた上に、秤や桝で胡麻化してしまふが、日本人は決してこれをやりません。で、彼等は自然日本人の處で取引するやうになりました。

南洋には支那人が勢力を張つて居て、日本人が日本商品を買ふのに、支那人の手から仕入れなければならない、といふ情ない狀態でありますが、日本人商人がどん〳〵這入れば、卸も小賣も支那人の手に依らずに、直接土人相手に出來るやうになると思ひます。」と、

ソングリテの溫泉が近くにあると云ふので、晝飯はそこで喰べることにした。こゝは谿谷になつて居て、高山が四方を周つて居る。高い山の上には、白雲が棚曳いて居る。その白雲の間からカルタを並べたやうな畑が見える。爪哇が如何に人口稠密であるかに驚く。

峻山の横つ腹を一條の線が走つて居る。この線の上をさながら黑玉の飛んでゆくやうに走つて行くが、自動車である。どんな高山でもどんな嶮山の横つ腹でも、自動車の走る立派な道路のあるのには感心した。

こゝには、ホテル・ソングリテと云ふのがある。浴場は一人宛入浴する普通の浴室で、チバナスのやうに泳ぎ廻るプールはない。

カポツクの工場

ソングリテ溫泉の裏山の峠を下れば、バトと云ふ町になる。バトを過ぎて平地になると、カンダカンの町となつて、こゝに竹腰君のカポツクの工場がある。

カポツク（樹棉）と云ふのは、馬來語の「纖維」と云ふ意味で、元來はランヅーと云ふのだそうである。が、普通カポツクで通じて居る。

カポツクの收穫期には、支那人が地方々々を廻り歩いて盛んに買ひ集める。近來は日本人も買ひ出しに出るものが多いやうである。

樹は二三十尺もある喬木で、枝は殆ど水平に張つて居る。三四年でアケビのやうな實を結ぶ。熟すると外殼の中に綿毛があり、綿毛の中に種子がある。

これを採集するには、竹竿の先に鎌をつけて、これを伐り落す。外殼をとり捨て、綿毛だけ袋につめて工場に運ぶ。工場は廣い運動場のやうで、コンクリート張りの床である。上には金網を張つて綿毛の飛散するのを防ぐ。竹のへらで叩くと綿毛が分離し、ふくらんで白味を帶びて來る。これを精撰室に送り、種子を除き、塵芥をとり去つて奇麗にする。次に器械で壓搾して包裝し、市場に出す。作業は頗る簡單である。

カポツクは極めて火を引き易い。火藥よりも危險だと云ふ位で、工場で煙草を喫ふことは大禁物である。

用途としては、非常に輕くて彈力があるので、枕や椅子やクツションの中に入れる。水中救命器などに用ゐられ、又外科用にも使はれる。種子はオリーブ油の代用にもなり、シヤボンにもな

れば、機械油にもなる。輸出先は、和蘭、濠洲、米國であるが、近頃日本へも、かなり輸出されやうである。

カボツクの相場は一ピクル(六〇キログラム)で、五六十盾位である。一バウからは約四五ピクルの生産があるといふ。

地所家作の所有者

カンダカンで、町の地所家作の三分の一を持つて居るのが赤井君である。赤井君は日本人に逢ふことを非常に嫌がつて居る。といふのは、ズツト以前に浮浪の輩がよく金を借りに來たもので、中にはピストル二挺持つて來て、「金を借せ！　借さなければ一挺でお前を殺し、一挺で俺が死ぬ。」と脅かした爲めであつた。

老爺が病氣であつたときに、醫者にかゝるやう老爺にすゝめた。が、和蘭の醫者は高く金をとるので決してかゝらなかつたとか、貯蓄心のない南洋カブレの多い處では珍らしい。店では雜貨を扱つて居て、爪哇人の婆さんが店に頑張つて居る。

親爺は今病氣であるからと、やゝ暫らくして息子が出て來た。自分はマランに於ける邦人活動

の狀況を觀に來たものである、といふ目的を話すと、金を借りに來たのではないと云ふ事丈けは判つたらしいが、こつちの質問に對して、只、「ハイ」とか「ィ、エ」とか言ふ位で、餘り多く語らなかつた。で、平凡に別れたのであつた。

西部爪哇のパイオニヤ

大津君は義俠心に富んだ面白い肌合の人で、わが子の如く後進の世話を見てやるさうである。今相當の店をもつて居る人で、この人の庇護によつて、身を立てるやうになつた者もかなり澤山ある。大津君はこの土地のパイオニアで、忘れられない功勞者であらう。

一時は手廣く商業を營み、爪哇では南洋商會と並び稱せられた程であつたが、事業上の失敗から、今では小さな一雜貨店に收まつて居る。爪哇の商業開拓についての話もきゝ度いと思つたが、こゝからスラバヤまでは百キロもあると云ふので、留められるを辭して歸る。スラバヤの宿に歸つたのが八時過ぎであつた。

海外万里遙に御即位の御大典を祝するトロナゴンのわが同胞
(一)假裝行列

(二)　餘興に打ち興ずる婦人連

トロナゴンの人々

トロナゴン

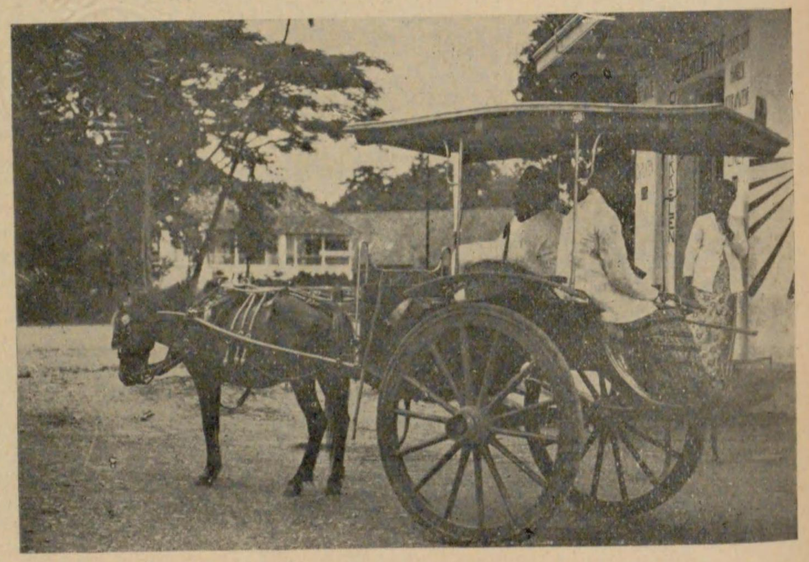
スラバヤから、ソロー行の汽車で西南に向ふと、一時間十八分でケルタソナと云ふ驛に着く。この驛から分岐して眞すぐに南に進むと、三十分でケデリー州の首府ケデリーに着くことが出來る。

こゝまで來ると、スラバヤの大平野もやゝ狹まる。西方には標高二千五百五十六メートルのキリス山が聳え、東方には一千七百三十一メートルのケルト山がそゝり立つて居る。これから南に向ふに隨つて、平地は段々狹められ、起伏せる山陵が接近して來る。ケデリー市から約二時間で、トロナゴンの驛に着くのである。南の方には爪哇南海岸に連亘せる山脈が横はつて居るので、トロナゴンはスラバヤ大平野の行きどまりの地點となつて居る。

トロナゴンは大きな町ではないが、道幅は廣く、綠樹に圍まれて居て氣持が良い。トロナゴン地方の物產としては、砂糖、椰子、カポツク、タピオカ、米などの類である。

樹綿（カポック）

マランの市街　トコ・佐伯，



爪哇の馬車

噴烟豪々たるアロモ火山

この市街を中心として、數キロの間に約三十餘戸の日本人住宅が盤踞して居る。イジュナ製油と豐田君の砂糖工場を除けば、他は雜貨店を本位とし、工場の物產たるカポック、米などを買ひ集めて、これを精製加工し、その大部分を濱に出す所謂物產商である。

そして、この土地の日本人は、庄屋樣のやうに、又銀行家のやうな商賣以上に、優勢なる社會的地位を得て居るのである。この地方は日本人を中心としての經濟組織をなしなつて居るかの感がある。それには、この地方の土人の生活狀態と、又日本人雜貨商の活動狀態を說明する必要があらう。

日本人雜貨商の活動

土人は久しい間の自然的天惠から、貯蓄心などは更にない。有れば有りつきり、無ければ無いでどうにかしてゐる。それで、收穫のあつた場合には、所謂鼓腹擊壤で、笛や太鼓、木琴や鉦などの樂器を鳴らして、面白く可笑しくお祭り騷ぎをやつて祝ひ遊ぶ。金のある內は仕事をしないで只遊んでばかり居る。金がなくなると、金を借りて一時の凌ぎをつける。

こゝが、支那人の目の付けどころで、彼等支那人は、市場へ出掛けて、金の要り相な奴を物色

するか、又は地方廻りをして困るのを見込んで、高利で金を貸しつける。この利息は驚く勿れ、一圓で一週間（或は五日間）に十錢と云ふのである。支那人の苦力上りが、急に金廻りの良くなるのも、この金貸業に依つてである。

これはいけないと、官憲も嚴重に取り締り、一方、主要なる處には官設質屋を開いて、金融をはかると共に、他方高利貸について嚴重なる取り締りを開始した。然し、支那人は亦この逃げ道を考へ、反物賣りに化てしまつた。朝、田舍道を通つて見ると、支那人が自轉車の上に五六反の反物を乘せて、列を作つて行くのを觀る。この反物賣り――實は金貸は、反物を賣つても賣らなくても、金を二圓貸せば、反物を三圓で賣つたと帳面に記入し、支拂期日を指定して取り立てゝ歩く。

こんな馬鹿な金利を拂つて、金を借りるものもあるまいと思ふが、案外これが商賣になる。然し、彼等土人は支那人に膏血をしぼられるので、稅金が納められなくなつてしまつた。それで官憲の眼が光り出すが、支那人は巧に法網をくぐつて、土人の經濟的觀念の乏しいのに乘じ、相も變らず、高利貸をやつて居る。

高利を借りても、今度はその利息が拂へないとなると、絶體絶命、終に家でも取られてしまいさうになる。と、そこで日本人雜貨商の活動となり、前述の如く銀行家の商賣以上に、重要視せられて來るのである。

雜貨店は土人の作る米とかカボツクなどを買ふ。只、買ふ時期が、收穫があつてからそれを買ふのではなく、又、土人も收穫後までは待つて居られないので、畑にある內に、賣買契約をして代金を土人に拂ふのである。土人はその金を受け取つて、雜貨店の拂ひをすませ、それからあつちこつちの借金も片付ける。久しぶりで金が手に這入つたので、よろこんでサロンも買ふ。友達を集めて、飲み食ひもする。で、その金は忽ち無くしてしまふ。亦、日本人雜貨商にすがるよりほか仕方がない。

日用品として、米や石油やマツチ砂糖鹽などはどうしても要る。如何に南洋でも水だけでは、魚でない限り生きて居られない。椰子の殼に米を半分下さい、と云つて來れば、現金でも賣るが貸してもやる。土人は日本人雜貨店にさへついて居れば、支那人の高利は別に借りないでもすむ位である。結婚しようと思へば、日本人のところに相談に來る。で、日本旦那の首の振り樣一ツ

で、結婚が大きくもなり小さくもなる。

しかし、如何に日本人であつても、さう利益を見ずに土人の便宜ばかり計つては居られまい、偉らさうな顔ばかりして居てもたまるまい、と思ふが底に底ありで、物産は現金故、幾らか安く買ふが、之を加工すれば二割三割は高く賣れる。又、時價の變動で二倍にも三倍にもなる。副業だか主業だか判らない雜貨も毎日商賣になつてゆく。これで、品のわるい高利貸の眞似はしなくとも、充分に立つてゆくことが出來るのである。

トロナゴンの人々

堤林君はイヂュナ製油工場を經營して居る。この工場の主任矢部君は、會津育ちの熱血男兒で今から二十幾年前、パレンバンの糸川君と同じく爪哇に渡つて來たのであつた。爪哇に來てからあつちこつちさまよつて居る内に、或る支那商人を識り、その商人から支那人仲間に英語の教授を委託され、その後で娘を貰らつて色々後の世話まで一切引きうけなければならないやうな境遇になり、轉じてボルネオの會社に支配人となり、今はトロナゴンに長老格でおさまつてゐる。

豐田君は豐田製糖會社の社長である。社長であるが社長室に反りかへつて居る社長ではない。

活氣滿々精力旺盛、一ツの製糖工場と雜貨店を持ち、四角八面に奮鬪して居るのだ。豐田君が新たに仕事をやり始めたのは大正十五年であつた。爾來、砂糖は一般に不況續きであるが、原價が安いので、計畫通り相當利益は擧つて工場は益々發展し、前途多大の望みを囑されてゐる。

千代喜の女主人は、五間間口の店に一杯に品物を飾り立て、盛んな發展振りを示し、男子も及ばない奮鬪振りを見せてゐる。

この婦人の居るウンテルウングの部落には、支那人の商店が二軒あるが、千代喜女將の爲めに壓せられて、十年一日の如く小さな店にくすぶつてゐる。この婦人の健鬪振りを見れば、苟くも男子たるもの意氣地なくへゝ垂れて居れるものではない。

トロナゴンの元老格としては、佐々木君があり、續いて小西君、鹽塚兄弟、内野君等がある。これら人々は皆、堂々たる雜貨店を有し、裏にはセメントの床のカボツク乾燥場や、椰子園などを所有し、充分落ちつきを見せてゐる。トロナゴンにはこの外に、

原田、住吉、播磨、二葉、長谷川、蓼沼、尾本、金子、藤本、大町、松本、水田、吉坂

の諸君及びその他の面々が、土人を相手とし、或は支那人と競爭し、涙ぐましい程の奮鬪をつゞ

けて居るのである。

そして、これ等の人々は相扞格せず、相尅せず、互に助力して、小さいものを引き立て、共存共榮の實を擧げて居る。

共同貯金が五萬圓

トロナゴンの人々がよく協同して、仕事をやる一例として擧げるものに共同貯金組合がある。始め大正十二年に皆が集まつたときに、月々五圓宛無いものと思つて貯金しようではないかといふ相談が出來た。五圓積む者もあり十圓、又それ以上積む者もあつた。忽ちに數千圓の金が溜つた。東京では五千六千の金は一寸した煙草店を出しても、權利とか敷金とかにとられて無くなつて仕舞ふが、爪哇では五百圓、千圓でも一軒の店が開ける。人間がしつかりして居て、土語や商法が判つて居れば、周圍の援助に依つて立つて行けるからジャワの數千圓は大したものである。これに興味を持ち、段々積んで來たのが五萬圓ある。頭株の人達が金の要る時は、銀行から借りることも出來る。が小さな人達の最も必要な少額な資金が一番融通に困る。かういふ時にこの五萬圓はどの位役立つかも知れない。亦、トロナゴンの人達がどん〳〵延びて行くに於て、大活力

を與ふるものであることは言ふ迄もない。

トロナゴンもこれから爲すべきことは多い。多いが大體に於て基礎は出來て居る。又、人の和を得てゐる。これから安心して進んで行ける。

日本對東印度貿易

◇

日本對蘭領東印度貿易の統計表にのつたのは明治二十四年からであつた。その頃は、東印度が日本からの輸入額は千五百盾で、輸出はなかつた。又その品目も雜貨、陶器、化粧品、紙類のみであつたが、日清、日露の戰爭を經てだん〳〵盛んになつて來、歐洲戰爭となつて、日本對蘭領東印度貿易はこゝに驚くべき發展を遂げたのである。

明治三十年に日蘭通商航海條約が締結され、在留邦人も歐洲人と同一の待遇を受けることゝなつた。これは三十七八年戰役の勝利の賜ものである。同三十五年には、三井物產がスラバヤに始めて出張所を開いた。四十五年には、南洋郵船會社が日本と南洋の間に直通航路を新設したので、

非常に取引上の便益を得、又新嘉坡を經由し積替をする不利益から免れたのである。

明治三十四年には、日本よりの輸入百五十八万盾、日本への輸出四百八十三万盾、總計六百四十一万盾位のものであつたが、大正元年には輸入四百九十万、輸出二千百四十六万盾、總計二千六百三十六万盾と增加した。輸出の大宗は砂糖であつて、千九百万盾近くある。

◇

蘭領政府は大正三年八月から十月迄、スマラン市で大博覽會を開催することになつた。しかるにこの年歐洲の大戰亂が勃發して、交通は杜絶し、歐洲よりの來觀者は勿論、出品もなかつた。で、外國館としては濠州と日本とだけであつたが、日本としては、願つても得られない好機會であつた。日本品の紹介は完全に出來た。日本品の評判もよく、賣れ行もよかつた。於是、蘭領に於ける空前の記錄たる日本よりの輸入一億三千四百十三万七千盾、日本への輸出一億四千一万四千盾と云ふ大好況を現出したのであつた。

しかるに、大正九年下半期に於て、世界的大恐慌の影響を受けて大正十二年に日本よりの輸入四千九百六十九万三千盾、日本への輸出一億九百三十七万三千盾に低下したが、その後は漸次

景氣を快復し、だん〳〵堅實な足どりを以て地歩を進めて來た。

◇

日本から爪哇への輸出の大宗は綿布である。東印度が諸外國からの輸入品中、大闘は綿布で總輸入高の二割を占めて居る。その内第一が晒綿布、第二が染綿布及び雜綿布、第三が縞綿布、第四が生地綿布である。日本綿布はこの第四位の生地綿布が優勢で約八割を占めて居たが、昨今は染綿布も四割九歩、縞綿布も八割八歩と擡頭し來つたから、晒綿布に於て歐洲品を壓するやうにさへなれば、最早や綿布は日本の獨壇場となるのである。日本對爪哇貿易は六割以上が綿布で占められて居る。即ち一九二七年の日本から爪哇への輸出額が六千六百万盾で、内綿布は四千一百万盾である。後の二千五百万盾の雜貨では、

陶磁器、メリヤス、セメント、琺瑯鐵器、硝子製品、小間物、臺灣茶、マツチ。

などはその雄なるものである。

◇

東印度から日本への輸出貿易額は、一九二七年の爪哇からの輸出高が八千七百万盾で、八千

四十万盾は砂糖であつた。が、臺灣製糖の發達で、對支那輸出用の原料糖のみを爪哇から輸入すれば足りると云ふので、爪哇では大恐慌を來して居る。砂糖を除けば後は、

ゴム、キナ、玉蜀黍、篦麻仁、タオビカ粉、マンガン、錫、コカ葉、珈琲、シトロネラ、實綿、古鐵

である。この内玉蜀黍の百三十四万盾を除けば、他は十万盾乃至三十万盾の處である。

◇

日本商店のうちには、少し商品の蓄積が出來ると、手形の支拂をする爲めに利益には構はず投げ賣りを始める者があるが、これが爲めに忽ち相場をくづして、他の商店まで非常に迷惑する。折角儲かる品物でも、かう云ふ輩が一軒出來ると直ぐ無茶な相場が現出して、一般の日本商店までが投賣の御相伴をしなければならぬやうになる。

今は日本品も外國品に劣らぬやうになつて來た。只化粧品は外國品に壓せられる。購買者は良い品は歐洲品を要求するので、同じ品でも日本品となれば二割方安い。それで日本品でも歐洲品として通るものは、歐商ではこれを歐洲品として賣つて居る。ずつと利益率が多いからである。

勢力減退し行く支那商人

蘭領の支那人は爪哇に約五十五万人、外領に約六十万人ゐる。富から言へば億万長者もあり、數十万のものは數へるに遑ない程多數ある。これ等は皆商業であるが、自ら企業經營するのではなく、商業網の勢力を利用して、仲介業者となり小賣店となつて、歐人日本人對土人の間に介在し、その利益を占有して來たのであるが、最早や支那人にのみ依頼して行かうとする歐商がだん〳〵減じて來たのは、前に述べたインターナショナルばかりではない、獨逸商人も、蘭商人も、支那人にはさん〳〵手古ずらされて來て居、日本人も大分損害はうけて居る。しかし支那人の爲めに良いやうに翻弄されて居つたものも段々覺醒して來た。歐商が自身御得意廻りを始めたり、又日本商人がだん〳〵奥深く這入つて土人と直接交渉を持つやうになつて來てからは、支那人の活躍が日に日にその範圍を縮少されつゝ行くのは免れない運命である。彼等には商業道德なるものがなく、欺瞞が多くて、ペテンが多いので、今では土人にさへ信用を墜として居る。

戰後の恐慌は支那人にも打撃がひどかつた。歐商も日本商も大に覺醒して改善に努力しつゝあ

るのに支那人が相變らず他人の褌で角力をとつて、その上句ひどい目にあはせること許り考へて居て、舊惡を改めなければ、衰滅の外はないのである。

南洋と野師

野士と海賊は兄弟分

爪哇に來て觀て、今のやうに商業の發展せざる前の日本人の活動と云ふものは、野師的分子に被はれて居つたと云ふことを特に感ずる。一面から觀れば南洋の發展は娘子軍の分布と野師の活躍より始まるとも言へる。そこで、日本人は農を以て國の大本となすのに、どうして農家が鋤と鍬とを以て進出しなかつたかと考へて觀る。

日本には鎌倉時代から、一所懸命と云ふ言葉がある。領主は自分の領國を守るには、死力を盡し弓矢を以て爭ふた。百姓は祖先傳來の地所を見棄てると云ふことは容易なことでは出來なく、賣買すらも容易に出來なかつた。他處へ出るにしても、抵當に入れてある地所を取り戻す爲めの一時出稼であつた。これが卽ち、布哇に於ても北米に於ても、永住的に土地を持つ考へになれな

かつた傳統的の思想であつた。この點から言へば、布哇や北米は高率な賃銀が、その奮發心を起させるに充分であつたが、南洋は勞賃の點では問題にならない。で、農業的の勞働で動くと云ふ氣持にはなれなかつた。そこで野師的の活動となつたのである。

日本には昔から浪漫的の活動をするジプシーのやうに、旅から旅をわたり歩く一種の團體があつた。これが卽ち野師である。野師は香具師とも言ひ、矢師とも書き、野士とも書く。海賊と野師とは兄弟分で、海賊は三百年前にあつては、南洋貿易の先きがけとなり、野師は三百年後に微弱ではあつたが、先頭に立つて一幕だけは演じたのであるから面白い。兄弟分の關係と云ふのは、海賊の木家は海內將軍の宣旨迄蒙つて居る位置であるが、働く人は多くは領國を失つた豪蓮の士が快腕を揮はんが爲めに海外に活動地を見出したのである。そこで野士の起原は何であつたか餘り文獻の徵すべきものが無いやうであるが、彼等の口傳とか信條によれば、亡國の遺臣が二君に事ふるを潔よしとせず、賣藥を業としたのに始まると云ふ。その代表的の人物としては江戸に長井兵助があり、松井源水がある。仙臺には熊野傳三郎がある。松井家は當代で十七代、祖先玄長と云ふのは越中富山の反魂丹の元祖である。醫藥と應急手當は武士の心得べきものであり、これを賣

つて糊口の資としたとは肯かれる。人の足止めには居合を拔いたり、商買の仕方が高飛車で威赫的な文句でタンカを切つて買はせるなどはまさに野武士の傳統である。然らば等しく亡國の士であるが、一は海賊に、一は民間に分れたものでこゝが兄弟分たる所以である。この兄弟分が時代を異にして東洋に幕が明くや、第一の登場人物となつたところに興味がある。

それで香具師の商ふものは、賣藥、香具、芝などで、醫術と云ふは齒磨ぎ粉、齒拔きなどであつたが、後には大道商買のありとあらゆるものが含まれて來た。その商買のやり方は威赫と機智と能算とこの三ツを資本として、一文無しになつても友達に泣きつかず、絶對に泥棒はせず、死中に活を求むる臨機應變の妙術によつて、必ず難關を切り拔け、窮除の戰法を講じ、汽車賃にこまるやうな事もなく、旅から旅、國から國に飛び歩く。そして彼等が特別の技能として誇るものに、婦女子を籠洛する魅術(ナオコマシ)と、これを商品化(ナオチラシ)する事についての常習がある。これが娘子軍分布に密接な關係をもつて居た。

この生活、この技能、これが瘴痢蠻雨の邊土と見なされて居た南洋に先頭部隊として立つことになつたのであつた。

吹矢とぶん廻し

村のにぎはひなどあるときは吹矢ぶん廻しの興行を始めるのである。

日本の內地ならば大きな聲でどなり立てるのであるが、野士もこゝは言葉が思ふやうに行かぬから、能辨も揮ふわけに行かぬが、道具を飾つて景品をつんで置けば土人は集まつて來る。土人はかう云ふことが非常に好きで、子供でも二錢五厘の銅錢を張つて煙草などをとつて行く。景品には時計もあれば、自轉車もある。これは金の張り高によつて區別されてゐる。しかし、これが當りさうで中々當らないのは、やり方がわるいわけでも何んでもない、幾分の手品の種のあるのを知らない。土人は今度こそはと思ふが、その今度はきつと金を全部まき上げられてしまふ。その爲め納稅の金にも差支へるやうになつて弊害も多いので爪哇では停められた。爪哇で禁止されてこんどは外領へ行つた。外領でもとめたが手心はまちまちである。外領では今でも、賬はひの時は支那人に賭博を許したり、ぶん廻しなどを許して居るところもある。

かつて、この興業が禁止された時にも、土人の郡長を籠絡して興行をやつて居た。巡査の方は一般方針から踏み込んで物品を差おさへ當人を檢束した。そこで當人は承知せず、あべこべに官

憲の暴擧を訴へた。が、この問題は郡長の免職によつてあつけなく落着した。

爪哇の直ぐ傍にバリー島と云ふのがある。こゝで興行をして居る時の出來ごとであつた。野師は巡査數名に包圍された。この時當人は上衣を脱いで裸になつて、短刀を逆手に「腹切り！」と大聲で叫んだ、巡査は青くなつて逃げ出した。

四五日の興行に可成り纏まつた金は這入る。けれど元來が浮草稼業で、それを溜て商買の元資としやうなどゝ、凡俗のやうなことを考へぬのが原則である。金のある時には平生望んで居つた享樂的、耽溺的の生活に一時なりとも思ふざまにひたり得るならば、後はまた行きくれて野山に寢ても、三度の食事に事を缺いても、それはあきらめがつくのである。

一時は毎日官憲との間にも、支那人土人との間にも、問題が起き間違が出來た。爪哇でも領事館がバタビヤにあつたのみの頃には、各自自衛上の必要から會合し相談もした。對抗策も講じた。鐵道の役人が無禮の仕打があつたからといつてビール瓶でなぐつたり、外國水兵を投げつけたり、毎日問題が起きた。が、漸次その存在は許されなくなり、外領に隱れたものもあり、又支那人の賭場荒しを常習としたりしてゐたが次第に姿を隱して、今は昔の物語りとして影も見せない。

賣藥行商

蘭領に、醫術のまだ開けない二十年前、日露戰爭後——日本の威名が急に南洋に響き渡つた頃——が賣藥の全盛期であつた。その頃の賣藥業者には旅順奉天の戰から歸つた許りといふやうな猛者が多かつた。胸には從軍記章や赤十字の徽章などぶら下げて、榮譽ある戰勝國の軍人だと言つて土人を驚かして居た。

「この藥は日本の陸軍省で特製したもので、常に戰爭に用ゐて居たものだ、日本がロシヤに勝つたのもこの靈藥の御蔭である。」

と吹聽して歩いたものだ。土人は元來、統治の位置にある蘭醫にかゝるなど言ふことを非常にきらつて居る。それは、滅法高い金をとられて牛馬の診察にも劣るやうな粗雜な待遇を受けるからであつた。又迎えに行つたところで急に來て呉れなかつたので、かう云ふときに日本の賣藥醫者は非常に重寶がられたものであつた。頭が痛いと言へば、土人の納得するやうに、頭に聽診器を

あてゝ容體をみるやうな風をした。そして、およその容體をきいて效能書を觀、藥をおいて來れば良かつたのである。また土人も平生藥などは用ゐないのだからどんな藥でもよくきいたらしい。これについて次のやうな話もある。

ある鼻下に髯を蓄へた容體の立派な藥の商人があつた。ある部落に行つたところそこの村長の妻君が下痢を病んで、どうしてもとまらない、そこへ丁度日本のドクトルが來たと云ふので、非常に喜んで招じ入れた。が生憎商人その時は固腸丸式のものは持つて居なかつた。當意卽妙、そこで、香の高い金色の藥を取り出して、重々しくその效能を述べて、「この病氣にはこの藥の外はない、只非常に高いがそれを御承知ならば差し上げる」と言ふた。高價と云へば猶欲しくなる。是非頒けて呉れと來た。そこで五六粒を置いて十圓を受けとつて來た。宿に歸つて來ても一寸薄氣味が惡い。その翌朝早く出立しようと思つて居る處に、馬車で村長がやつて來た。「コリヤ大變一大事露見」と覺悟をきめて居るところが村長は、更に十圓の紙幣を出して、藥の效能によつて病氣は全快した話をして、繰返し感謝の意を述べるのであつた。これにはくすぐつたいやうな恐縮したやうな體であつたとは當人の實際談である。

これ等行商人はトコ小川か、日蘭から藥を卸て來て、山の奥までも這入つて行つた。或る時は土人の家に泊り、ある時は橋の上で寢たりした。木橋の橋には屋根があつたから、橋の兩側に火を焚いて猛獸を防ぐ設備さへすれば、安息所には涼しくて好適の場所であつた。

しかし、今では醫學校も出來、土人の醫者もあつて簡單に治療が受けられるので、日本人の賣藥はだん〳〵その必要がなくなつてきた。又、土人の智識も進んで來たので信用の程度も薄くなつて來たが、田舍の町に行けば今でも賣藥專問の家もあり、又雜貨の傍ら賣藥もやつて居る處もある。また、日本人と言へば必ず醫療の心得あるものとして、雜貨店の主人や、寫眞師の處へ病氣の相談をもつて來る土人もある。

これ等の人が南洋の山奥の部落々々を訪問した經驗は、だん〳〵日本人がその土地に幾分なり根據を据て、雜貨店を開くなり何なりに、實際的の資料を提供する豫備行爲になつたのだ。

醫師には事を缺かない日本でさへ、賣藥は相當に賣れるのだから、組織方法を改めて日本賣藥の信用を增して行くやうにしたならば、まだ發展の餘地は充分にあらう。昨年メキシコに日本賣藥會社をこしらへ、富山の人々が中心となつて活動を始めたが、そこへゆくと南洋は既に地盤が

あり、經驗があるのだから一層よい譯である。

齒醫者

新嘉坡の山本老の世話になつた齒醫者だけでも百名以上は居るといふことであるが、新嘉坡は齒科醫速成養成所であつた。一體蘭領では、本國の軍醫が退職になつてから、東印度植民地へ來、軍隊兼務で老後の稼ぎ場所として、五六年の間に一廉の財産を蓄へて國に歸るのを希望とし理想として居、又力めてこれを保護してゐる爲め、他國人には容易に齒科醫の開業試驗に通過させない方針をとつて居る。

しかし、齒科だけは流石に軍醫の手にも餘るものと見え、又、和蘭人自身も不便で仕方が無いところから、特別扱ひとして大目に見るの已むを得ざる狀態になつて居る。

バレンバンでの話であつたが、こゝの理事官の妻君が、齒を病んでいつも難儀をして居た。多額の費用をかけてはバタビヤまで出懸けて行つて治療するのだつたが、根治しない。試みに日本人の齒醫者にかゝつてみたところ、實に親切で、注意周到で、技術も相當よかつたので、完全に

癒つた。妻君は非常に喜んで治療代をたづねてみたところが、

「貴女の治療を致しましたのは、非常な光榮であります。そしてそれが完全に癒つたと仰しやて頂けば　その御言葉だけで非常な滿足です。」

と、金などは頂かなくもと云ふやうなことを言つたさうだ。そこで亦妻君非常に喜んで、もう齒の事なら日本人に限ると思ひ込んでしまつた。

その後、蘭人の醫者が抗議を申し込んで來たことがあつたとき、理事官の答へは、

「家内の齒の治療はお前には出來なかつた。バタビヤの醫者にも完全に出來なかつた。けれど日本の醫者は立派に直したではないか。規則はどうでも必要にはかへられん。」

兎に角、齒醫者は蘭人の醫者の出張所の形になつて居るものもあり、又默許されて居るが、今のところはまだ優秀な技能と、完全なる機械設備を多く要求されて居る。

理髮業

スラバヤのホテルで、理髮業の器械を南洋全體に賣り擴める組合の幹部の人で、この方面を調

査して居る人に會つた。この人の考へは、器械を賣り擴めるのみならず、南洋全體に亘つて、優秀なる技術者を配布したいといふ希望であつた。これは頗る面白い事で、先づ爪哇でいへばバタビヤとかスラバヤとか云ふ要地に特別養成の本部を置く。また、そこで理髮業の技術と語學とを練習さして、理髮の傍ら理髮用の道具を賣らせる。それからその店員中優秀なるものを選び、隣の村に理髮屋を一軒出させる。それに又店員をつけてやる。

家賃と少しの設備費をかければ、直ぐに開業が出來て、他の仕事のやうに大資金をかけずに南洋各地を、漸次その方針で擴張してゆけば遂には、日本人の手に依つて理髮業を獨占する事が出來る。尙經營者だけを日本人とし、土人を助手として使つても差支へない、必ずやつて行ける。かやうにして日本人の理髮業を發展せしめるといふ案である。

これは組合等で少し資本を出してやろうと思へば、直ぐ出來る仕事である。世界第一の熱帶植物園のあるバイテンゾルグには、日本人の理髮店がある。この日本人の店の附近に蘭人經營の理髮店も二、三あるが、蘭人は丁寧で安くやるところなら、何れの國の人の理髮屋でもかまわない。それ故、日本人の店などへは可成り蘭人の客が來る。

こゝでは助手として土人を使つて立派に暮して居た。蘭人の理髮屋は一回一盾五十仙位をとる、日本金で一圓二三十錢のものである。蘭人の理髮店の中に居る職人の給料を聞いて見たら、百五十盾から二百五十盾をとつてゐるやうである。が、職人肌で、パツ〳〵と使つて仕舞ふ傾向ある故、開業資金は出來ないやうであるが、少しその積りで協同出資すれば、店を持つ事位は何でもなく出來るのである。

理髮は寫眞屋よりも齒醫者よりも、尙簡單なる技術である。スマトラ南部の或處で、私はホテルに賴んで、理髮師を呼んで貰つた。ところが、土人の理髮屋がやつて來た。彼等も相當丁寧に器容にはやるが、しかし少し文化の進んで居る所では彼等もまた矢張り優秀なる日本の職人の手にかゝらなければ滿足しないのである。

娼婦型の爪哇娘

爪哇の女は、先天的に娼婦型に出來てゐる。現在では、土地も次第に狹められ、且つ種々の稅金を課せられるので、人並に生活難にも苦しめられ、働かねばならない樣になつて來たので

あるが、元來爪哇は土地肥沃、山野には果樹が茂り、五穀は豐かであり、且つ氣候が熱いので着物の心配も無用であるところから、遊惰姪佚に流れるのは、自然の趨勢である。

自分の身を美しく飾る事は女の生命である。それは南洋の女と雖も異る所はない。彼等にはマホメットの教旨として、男はその富の程度により四人迄の妻帶を許されて居る。女には貞操觀念は殆ど絶無と言つてもよい。ジャワの女は、腕輪一ツ又は耳飾り一ツで、自分の夫を取り換へる事など何とも思つて居ないらしい。

スンダ（西部爪哇、バンドン地方）の婦人は、最も整うた容色を備へて居る。この地方に於ては、マホメットの教旨として、女は優待されて居るから、女に不都合なことがあつても、男は女を打擲したり、虐待したりする事は出來ない。これは固く禁ぜられて居るので女はこれを良い事に、隨分我儘勝手な行動をしてゐる。こゝでは一般に男の方が意氣地がなく、女の方が却てハキ〳〵して居る樣な傾向である。

例へば市場に米を賣に行く時、重い米俵を擔いで行くのが男の任務で、これを巧みな掛引をして市場に賣り、精密に桝目を計り、或は細かな計算をして、金を受け取るのは女の仕事である。

彼等は不完全な椰子の實の桝で計り、間違ひもなくこれに換算する事などは實に巧みで、暗算などは非常に敏速にやる。しかし、これが男には出來ない者が多數ある。

スマトラのゴム園では、苦力としてジャワから契約移民を入れるが、その男、女の作業場は決して同一場にはしない。（九十六頁）若し一緒にしたならば、男女間の紛紜は常に絶えないからである。

こんな爪哇の女のことは、何等吾々に關係が無い樣であるが、實はこれが吾民族の南洋發展に非常な關係を持つてゐるのである。南洋發展といふ點について、吾同胞青年は爪哇娘と結婚し、早く爪哇に同化して仕舞ふ方が良いと主張する人と、亦斯樣にしなければ、吾民族の眞の發展が出來ないやうに說く者とがある。日本人で內々この娼婦型の爪哇娘を內緣の妻といふ風にして居る者も相當多いのも事實である。

こゝに最も不思議に思ふのは、支那人の妻になつてゐるジャワ人には、比較的美貌なる女が多いが、日本人に關係して居る者には、可成りひどいのが多いことである。しかも、日本人は若し內地に居るならば、殆んど相手にもしない樣な女に對して、溺愛に近い程の愛慕を感じ、どうして

も浮脱の揚がらない境遇に迄、沈淪してゐる者が多いと聞いて居る。爪哇娘は一種の妖魔の如き魅力を持つて居るやうに見える。

土人の娘になど耽溺するのは馬鹿氣きつて居ることだが、男はどうしても振り離すことが出來ないらしい。それは全く不思議な程である。一種の魔法を施されたる如く、常識を失し、痴呆に近い狂態にまで陷る極端な例がある。それは或る處に日本人の店員があつた。この店員は、一ツの店を預かつて、一人の爪哇婦人を內妻として居た。或る時この店に失火があつた。店員は妻の密告によつて、放火罪として裁判所に廻された。その時裁判官は、

「この事件の證人として、お前の關係して居る女の他に證人となる可き者はないか、自分の世話になつて居る人を罪に陷入れようとする女は、必ず夫を陷入れようとする他の惡い計畫をしてをるか、又は女自身に精神的欠陷があるかと思ふ。この點に就いて、何か述べることはないか」と訊ねた。

和蘭の裁判は證人に重きを置くのである。それで、犯罪に對しても證人が無い場合には、罪の成立しない事が多い。この裁判は妻の證言に依つて、その罪が定まるのである。故に、この女の證

言は最も有力なもので、店員の通譯に立つた日本人も、店員がこの女は平常から變であつたと云ふことを主張するのを衷心希望して居た。が、店員はその女は非常に自分に忠實であり、平日も嘘言などは少しも無かつた、と明言したので通譯の人は勿論、判事さへも自分の耳を疑ふ程であつた。そこで裁判官は、

「お前の罪が決定する場合である。假にその女がお前に忠實であつたとしてみても、常識から考へて有り得べき事ではない。何か女に精神上の欠陷がある樣に思ふが、よく考へて、明瞭に述べよ」と繰り返して注意したが、男は女を明かに辯護して居るので「では、その犯罪を自分でも全部認めるか。」と聞くと、「女が、私を左樣に見てゐるならば仕方がない。」と子供のやうな事を言つて、甘んじて刑に服した。その店員は平素商賣の事も上手であり、算筆にも達者で役に立つた人であつたので、傍の者も非常に心配したが、辯護の餘地は最早無かつた。その女は間もなく、自分の好いた男の處へ行つてしまつたと云ふ。

爪哇の女は、日本人の內妻になると云ふ事を得意とし、誇りとして居る。又、その親迄、村に於ける位置が幾分高まる。女子は日本人の手によつて買つて貰つた新しいサロンをまき、奇麗な

上衣を着け、これに燦爛たる金のボタンを飾り。腕には金の腕輪を欲め、胸を張り、一日一回、用もないのに村を一週して、孔雀の様な誇りを示して歩く。

又その店等を管理させて置く場合等は、兄だとか、親だとか、從弟だとかと云ふ人が常に尋ねて來て、食事を共にするのみならず、歸りには品物を持たしてやる。持たしてやらなくても、彼等は勝手に失敬してゆく。爪哇人は、妻は自分の夫の物を盗み、夫は妻の物を盗む。家内中でも互に警戒して土の中に金を埋め、又竹の栓の中に金を隱して置いたりする。

爪哇女は腕輪等を買つて貰つて、自分の虚榮心を滿足さして居る間はそれでよいが、日本人が一旦貧窮のどん底に落ちた時には、共に苦勞をするといふ事は全々念頭にない。然らば非常に金持になる事を望むかと思ふと、餘り金が出來て立派な位置になれば、必ず日本から妻を呼び自分は捨られて仕舞ふ懸念がある事から、これも餘り望まない。夫や自分の立身をも望まず、又貧苦な時には、共苦勞もしないそれ等の女に對して、日本人が耽溺的の態度を採るのが、實に不思議といはねばならない。が、これは世界大戦爭で景氣のよかつた時、行商して歩いたといふ青年の話を聞くとよく判る。

「その頃は、少しビールやサイダーの瓶でも並べ、反物雜貨の一棚もあれば、もう二倍も三倍もの利益があつて、面白い様に儲かりましたが、只故郷を離れた遠い蠻地に居る事が長くなれば、次第に何とも言ひ得ない淋しさと、物足りなさが、ひし〳〵と胸にせまつて來、そのまゝぢつとして居れば氣狂ひにでもなるのではないかと思ふやうな事がありました。それで、かういふ淋しさを忘れるために只無暗に金が儲かれば儲かるだけ使つて、今では着のみ着のまゝお恥かしい次第です。」

と、これは海外生活の青年の眞相を語るものであつて、教養のない自制力のない、人間らしい青年の對照物として、日本に於てならば殆ど問題にならないやうな女でも、彼等を誘惑し、魅了し、耽溺せしむるに於て、充分なる力を持つて居るのである。

爪哇の女に花柳病の多いと云ふことも重大な問題で、放縱生活の結果は限りなく蔓延して行くので、爪哇民族の興廢に關する程の問題として官憲も心を痛め、田舍迄も醫者を派して僅かの實費を徵して注射を勵行して居る。ある日本人の家庭に使はれて居つた女中が、いつの間にか感染して居つた。それも、注射を受けに行つて來ますからお金を下さい、と買物にでも行くやう

に平氣で言ふので、妻君も驚いて居つた。

これ等の事實から考へて、爪哇の女に關係をもつ事は、決して望ましい事ではない。

私は妻は日本から迎へるのが最もよいといふ事を力説するものである。南洋に於ては三百年も昔、比律賓でも、シヤムでも、セレベスでも、可成り日本人が發展し、その數も多かつた事と思ふが、今その跡の尋ぬべきものがないのは乃ち、日本人の子孫が彼等民族の間に沒入してしまつて、その智能が次第に低下し、遂にその跡は杳として尋ぬべからざるものとなつたからである。

何と云つても爪哇の女は低級である。護謨でも砂糖でも優良種に苦心する世の中に、わが子孫を低劣ならしめることは忍びないことである。その子の將來はどうなるか、日本の籍にも入れられぬ土民の階級に置いたのでは前途奴隷の階級で頭の上がることはない。この點は非常に苦心して居る。トロナゴンの連中は、先達格が心配して夫々日本から家内を迎へることに骨を折つて居る。然るに從前女が渡航し過ぎて困つて居つた時代のことを考へれば、女の南洋行は色々手續上面倒で困る、とこの土地の人はこぼして居た。堅實な家庭を作るべく婦女子を送るべし、これが眞の發展の途である。

馬來より暹羅へ

馬來より暹羅へ

新嘉坡から彼南までは鐵道が通じて居る。新嘉坡タンク路停車場から半島の重なる都市への賃金哩數は左の通りである。

地名	一等	二等	三等	哩數
	弗仙	弗仙	弗仙	
ジョホール	一、二四	〇、六〇	〇、四	一五
マラッカ	一二、二八	六、〇〇	四、〇〇	一九〇
コールランポ	一五、七二	七、六五	五、一〇	二四五
彼南	三一、〇六	一五、〇六	一〇、〇一	四八七

尙新嘉坡より、彼南を經て、谷盤に通ずる鐵道がある、毎週三回發車する。この行程一千二百三十哩で、約三日間かゝる。

半島西海岸の諸港へは、新嘉坡から毎日の如く便船があり、交通は海陸共に便利である。

マレイの邦人事業

ジョホール州内に邦人の護謨栽培地として聞ゆるのが三ケ所ある。一はジョホール河畔に、一は

鐵道沿線に、一はバトパハにある。バトパハはバトパハ河の上流數哩の左岸にある。町がバンダル・ペンゲラン一般にこれをバトパハと呼んで居る。こゝには三五公司や南亞公司の分園が出來て、つゞいて大小の護謨園が出來、段々開けて來たのであるが、こゝに一つ異彩を放つて居るのがバトパハに於ける南洋鑛業公司の鐵鑛である。

バトパハは石原鑛業の採掘事業の發展につれて開港場として指定され、邦人の數も四百二十名。新嘉坡についで優勢なものである。石原君は始めは護謨栽培業を志して渡南したのであつたが、偶々護謨園中に發見した鐵鑛は、君の大事業計劃のエポツクを作つた。調査の結果確信を得た君は、直に內地に飛びかへり、資金調達から賣込の相談まで整へて、採掘の準備にかゝつた。今では八幡製鐵所へ納むるのが毎年廿五六万噸あると云ふ。猶、東海岸にも手を伸ばして、トレンガン州ケマヽン所在の滿俺鑛山の權利を得て七八万噸の輸出をやつて居る。六七千噸級の社船三隻と傭船七隻で、日本にも鑛石を送つて居る。

東洋の商港マラツカ

南洋に新嘉坡があり、彼南があり、又スラバヤ、バタビヤがある今日では、港灣淺きマラツカの如きは最早や言ふに足らないけれども、昔はマラツカは南亞南洋に於ける最も重要な商港であつたので、世界各國の商人が皆こゝに集まつて貿易をしたのである。支那商人は紀元五世紀頃からこゝに來て絹を賣り、金、香料などに代へた。又、アラビヤの商人は、歐洲一圓に供給する丁字、肉荳蔻等の香料の買出しに來た。半島はマラツカを以て稱せられ、海峽もマラツカを以て呼ばれた。マラツカは歐亞商人貿易の中繼港であつたのである。

アラビヤ商人の甘い汁は敏感なるヴェニスの商人によつて嗅ぎつけられた。ヴェニスの商人の活躍は、葡萄牙人の注意を惹いた。バスコダ・ガマは一意印度、馬來の富を一手に掴まんとして印度洋の波濤を蹴つて乘り込んで來た。冒險船がカルカツタに着いたのは一四九八年で、情勢視察の任務を了し、無事歸港したのは其翌年一四九九年であつた。リスボンの朝野はこの大成功に湧き立つた。以來、冒險的海賊商船隊は踵を接して馬來に乘り込んで來た。遂にマラツカは葡人の手に落ちた。葡人は更に香料の寶島を探るべく探險隊を派し、遂にボルネオの東、モロツカス群島に秘密島を見出して、その利益を獨占したのは前に述べた如くである。葡萄牙は更に進んで

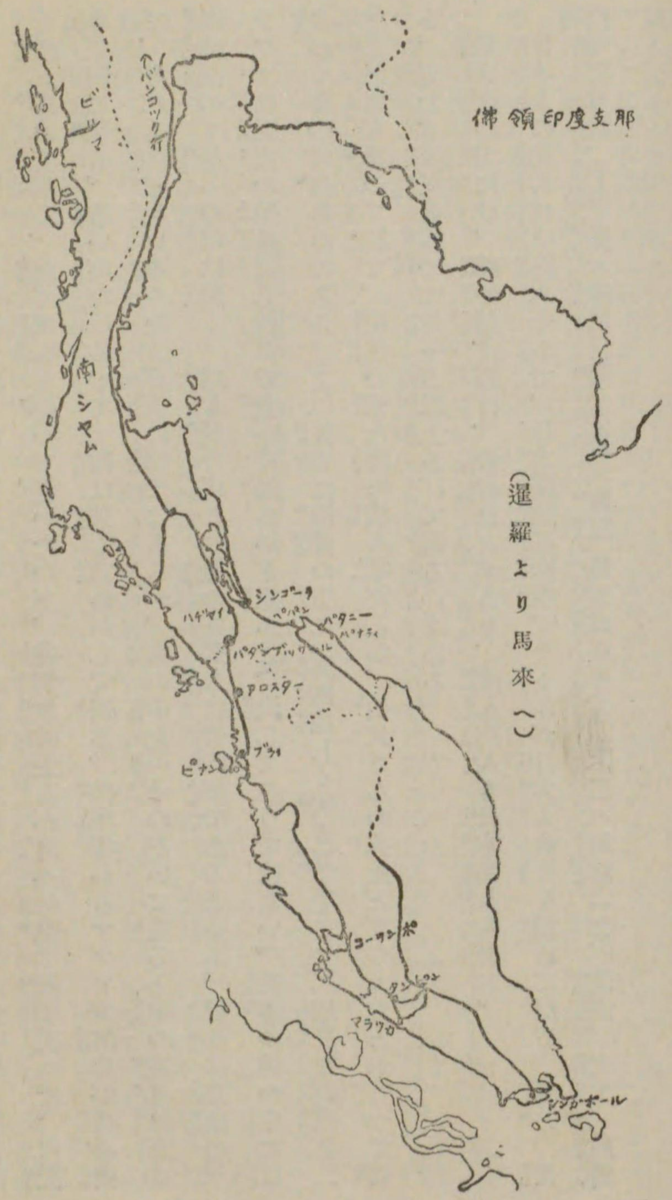
支那から日本にまでも進出した。

冒險的航海の海の勇者は、必ずしも、商覇戰の驍將ではなかつた。續いてスペインの活躍となり、和蘭の出動となり、一六四一年マラツカは和蘭の手に落ちた。續いて英國は印度に根據を据えて勢力を張りマラツカを攻略した。是に於て爪哇ボルネオを根據とする和蘭と、印度を地盤とする英國とは、馬刺加を天王山として覇を爭ふた。

マラツカは英國の勢力下に支配され、又和蘭の有となり、最後に英國の大勢力に抱かれることゝなつたのである。

英國海峽植民地マラツカは七百方哩總人口十三万で、マラツカの人口は四万である。

汽車は淡邊で乘り替へる、淡邊の驛長も事務員も印度人で、態度堂々としてゐるが親切である。淡邊から馬刺加港までの汽車は清々して居る。一等は一室二人、氣持のよい室であつた。



（羅選より馬來）

マラツカの驛につく。額の處に白い壁土のやうなものを塗つた男や、鼻の處に金の飾りをした女達が群れて居る。兼て電報を打つて置いたので、井筒旅館主人が迎へに出て居て呉れた。自動車で町に出る。古い町だけあつて、町は狹く古めかして居る。停車場からマラツカ河迄が舊市街で、それも陰氣臭いやうな支那人の街ではあるが、家の中を一寸のぞいて見ると中の家具裝飾は隨分凝つて居るのには驚く。話を聞けばこの邊の支那人は皆內福であるといふ。彼等は哀殘のマラツカに過去の榮華をしのんで慨いて居るかと思ふと、決してさうではない。彼等の庫の中には金がうなつて居るのである。また、彼等は海岸の方に、海風涼しく吹き亘るところ、宏壯な別莊を二ツも三ツも持つて居て、從弟の來た時に宿る家だとか、伯父さんの來たときのゝだとか言つて居る。また、長屋を持つて月一万以上あげて居るのもある。

新市街の方には、郵便局、銀行、會社などがあり、歐人商人も日本商人も居る。

日本人の總人口は約六十名で、日本醫院長彦坂ドクトルが日本人會長を務めて居る。石井、長門兩寫眞館、中村、鈴木兩齒科醫、小野塚醫院、筒井商店外、酒場(二)、旅館(二)、洗濯、大工、煎餅屋と云ふところである。

こゝには和蘭馬來の聯合軍が攻め入つた時、葡軍が防いだ舊蹟のあるセントジョンス丘がある。海岸は遠淺で、葡萄牙人の殘した棧橋は、今は三分の一許りに短くされて、只、涼風を樂しむ市民の遊歩場になつて居る。

黑い泥を現はして居る波打際には、帆船が潮時を待つて居る。大船巨船は入るべくもない。海上には白帆紅帆點々と浮び、夕陽沒せんとして雲も空も眞紅に輝いて居る。この夕陽と丘上の殘壘、感慨の多い港である。

馬刺加馬來の首府コールランポ

汽車は馬來の首府コールランポについた。電報をうつて置いたので、旅館「はるな」の主人堀君が迎へに出て居て呉れた。堀君は私のところは餘りひどいからと「日の丸」旅館に案內して呉れた。堀君中々寬大な處がある。

「日の丸」旅館には疊を敷いた廣い日本間もある。支那人馬來人の宿泊は裏の座敷としてあるので、南京虫の心配もない。こゝで簡單な食事をすませ、自動車を傭ふて市中を一巡した。

大體、この街は丘陵起伏して居る高地である。人口十五万、英國總督の居る立派な都市で、馬來全部に號令をかける本營のある處である。都市の經營には最も力を注いで居る。蜒々起伏せる丘陵の間をカラン川が流れて居る。都市として不便なやうな地を巧に利用して、立派な道路は急勾配なしに長蛇の如く捲き廻して居る。その間に平坦なる箇所は、支那人が殷賑なる商業市街を作り、河に近い處には總督府を始め諸官衙の高莊な建物があり、起伏した丘陵には閑雅なる住宅が鬱蒼たる巨木に被はれて、夏知らぬ幽靜なる生活を樂んで居る。

コールランポ公園は天然の丘陵と森林とをそのまゝ利用して作つた植物園で、宏大で幽邃である。中には大きな池が湛えられてある。池畔の最も高いところに巍々堂々と聳ゆる大建物が總督の官邸で、豪然として俯瞰睥睨して居る。奥に進んで行くと、こゝに農業試驗場用地があつて、熱帶有用植物園がつゞいて居る。

コールランポの日本人

コールランポでも金があつて巾をきかせて居るのは支那人である。始めは苦力として來たものが、永年辛苦して今日の富を作つたのである。富豪は錫山で金を儲けた連中である。何といつても多數は勢力で、彼等は經濟的の組織が立派に出來て居るので、たとへ落伍者があつても救援してやることも出來る。又無一物で上陸しても就職に困るやうなこともない。

彼等は郊外に堂々たる別莊を建てゝ居る。又市中の長屋、郊外の貸住宅は概ね彼等の所有である。彼等には中華會館式のものが、色々の世話をして面倒を見てやつて居る。

當地の日本人は大變難局にある。一時ゴムの景氣の良かつた頃は、ゴム熱にうかされて、吾も吾もとゴム園を持ち、永年の蓄積を傾けてゴムにつぎ込み、まだ足らず工面をし借金してゴムにかけた。それがゴムの暴落となつた。不景氣の殘虐な風が吹きまくり、手放すの餘儀なき狀態になつた。抵當流れでとられてしまふのも出來た。手放した頃からゴムの値が出たが、ゴム園はなくなる。借金は殘る。折角發展しかゝつた處へ、急轉直下奈落の底に落ち込むと云ふ始末となつた。それで落ちるものは落ち、殘つたものは漸く持ちこたへて來たところへ、今度のボイコットと來たのであつた。ボイコットは從前のやうな亂暴もしない。又物を賣らぬとも言はぬ。が、深刻であり、陰險なやり方である。日本人に物は賣るけれども三割方も高く賣り付ける。そして高くて厭な

ら買はないで呉れと言ふ。彼等はまた日本人のホテルに宿りに來ない。日本人の醫者の處へも寄りつかぬ。日本人の雜貨店には物を買ひに來ない。寫眞屋にも來ない。土人には購買力がなく、支那人相手の仕事であるかく行き立つ譯がない。

「今三月もボイコットが續いたら、引き揚げる外はありません」と堀君も悲觀して話した。

カラン王宮

カラン王宮は小高い丘の青い奇麗な芝生に彩られた處に建てられてある。前の庭にはパラー松の亭々たるものがある。色々の草花が咲いて居る。王宮の中に這入つて觀るに大廣間は正面に大きな鏡があつて玉座が設けられ、その前には多數の椅子が並んで居る。謁見所と云つたやうなものであらう。二階に上つて觀る。近日結婚式をあげられるとかで、侍女が花の飾りつけなどをやつて居る。昔半島に勢力を揮つたカラン王の宮殿も、今來て觀れば、階上階下ガランとして、狂人のやうな老爺が何かブツ〳〵獨言を言つて歩いて居た。國滅びて山河ありの悲哀を語つて居る。

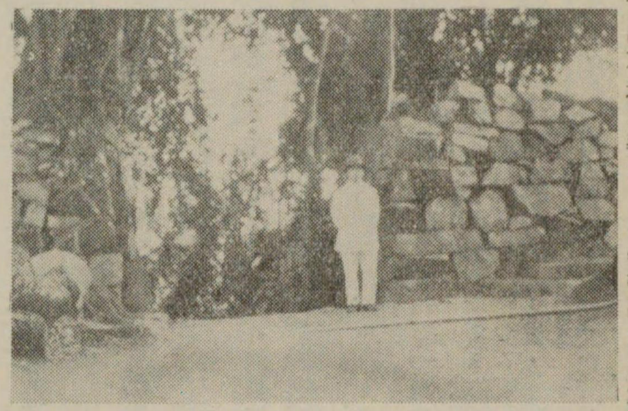
抑々カラン王朝の創は、セレベスのブキス王族であつた。中々強勇精悍で、ボルネオ、スマトラを攻略し、更にリオ群島に根據を置き半島に攻め込んだ。そしてその諸王子は海岸の要地セランゴールに城塞を築き、ブギス王朝を定めた。和蘭と開港のことから戰端を開き、一度び擊退されたがまた回復した。然るに王位繼承の爭から、遂に一族に叛逆者を出して、要害地セランゴールを捨て王はカランに蒙塵した。之を望み觀たるは新嘉坡に虎視耽々たる英人である。カラン王朝援護の名の下に、セランゴール河口に出動し、要塞を砲擊し、叛徒を平げた。これが英國に於ける國政干與の始めであつて、爾來國内治まらず、亂民蜂起の狀勢につけ込み、遂に理事官を置いて、公然政治に嘴を入れ、それより絶えざる干渉政略を以て、此處を中心に馬來聯邦を組織し、半島經略の礎を築く迄に至つたのである。

コーラ・セランゴールはマラツカ海峽に臨み、カラン川口に近く小高き丘に據り海に臨みた要害の處で、弓矢刀劍の時代なら實に難攻不落の要地である。

城塞は曲折せる道路を以て丘上に登る。頂上に近き處に廣場があつて、それより一段高きとこ

ろ四方に石垣を築き、その中に本丸があつたものらしく、我國の城趾を訪ふ感じがする。正門前に俎石がある。叛將が逃げる時に少女をいけにえとし、その咽を切り、その血を樓門に灑いで、敵軍に災あれと呪つて逃げたと云ふ傳說がある。大木森々葛葛茂り、晝猶暗い城跡にはレストハウスがある。

丘の一隅に燈臺がある。



コーラ・セランゴール城塞

これがバト・ケーブだといふ。

バトケーブ

バトケーブは鐘乳の大巖塊である。大きな洞穴があるので名高い。コーラ・ランポーの北方三キロの處にあるゴム園の中を、自働車で二十分も走らせると、ゴム林中に突兀として峨々たる危怪案走の大巖丘が突き立つて居る

正面には大きな洞口があいて居て、自然の岩をつんで石磴がついて居る。恐ろしく枝を張り、根は蛇のやうに這ひ廻つてゐる大木に被はれた陰慘な石段を登つて行くと、登り行くこと約三百段で洞口に達する。洞口から中を望むと中は暗いが、巾が三十餘メートル奥行きは約百メートルもあらうと云ふ大洞窟である。白色のところに青銅色の幽雅な色つけられた鐘乳岩の、瀧の落ちかゝらんとするやうなのや、上から危ふく缺け落ちんとするやうに垂下したのや、又下から突き立つて居るのもある。

岩壁の入口の奥迄、文字好きの支那人が天然美地何とか、南洋桃源だの、南島幽岩だののべつに刻みつけたり、墨で書いたり、中に歐文も見えるが、頗る俗臭を帶ばしめる。

馬來人の行者が燈火を揭げ、華を供へて、何か經文を讀んで祭壇の前にかしこまつて居る。

更に奥の方に行くと、こゝにも一段高い四百疊敷位の場所がある。土人が蓄音器を持つて行つて、御馳走を運び込んで景氣よくやつて居る。

その横に今一段高い處に、又岩壁に圍まれた自然の殿堂がある。四方の岩壁は戟を立てた如きもの、青龍の垂れ下る如きもの、翠簾を懸けたる如きもの、全く神技鬼工を凝らした大殿堂であ

る。岩窟王の住家か、酒呑童子などにはふさはしい玉樓である。仰けば千尺上は屋蓋取り拂はれて蒼穹と白雲が望み得られる。奇絶妙絶、全く南洋の奇勝である。

岩壁の奥の暗い處に方丈の岩窟がある、行者が坐禪でも組む處らしい。

洞口を外に出ると右手の方に今一つの大洞窟がある、草を別け石壇をよぢ上れば一つの岩窟がある。こゝは全く日光がさゝない。陰慘の氣が人に迫る。異臭鼻を撲つ。暗中を飛ぶ怪物蝙蝠の糞が堆積して居る。

更に岩窟の奥には池があつて盲目の蛇が居ると云ふ話である。先年支那人の探險隊が炬火を照らして奥に奥にと進んだが、二哩はかり進むと火が消えたので中止したと云ふ。

こゝを觀てコール・ランボに歸る。

彼南島

彼南は檳榔子のことである。東西九哩、南北十五哩、總面積百七平方哩の小島で、島の中央にはピナン丘が連亘して居る。

彼南の港は汽船や帆船サンパン等蝟集して、帆檣林立、黑煙天を被ふて居る。が、良港といふには港内水深淺くして、大船巨舶を容るゝに足らんのが一大缺點である。

彼南市は海からの外觀は非常に良いが、街は餘り奇麗とは言へない。支那人の街である。ピナン市は見渡す限り、金色燦然たる支那商店で、門口や柱に「天官賜福」とか書いた赤い紙が張つてある。ピナンの支那人はピナン總人口十八万一千一百四人の中、十三万を占めて居る。(一九二七年の調)七割が支那人である。

ピナンの日本人

彼南の日本人會は大正四年九月に出來た。これは以前に彼南慈善會と彼南青年會とがあつたのを、藤井領事巡回の際の勸告によつて、打つて一丸としたものであつた。會長が梅津君、他に理事六名、委員男六名、女六名であつた。委員が男女同數などは、彼南の女子の勢力の如何に盛であるかを物語るものである。

大正八年六月には、支那人の日貨排斥の問題が起きた。この時は日本人の物を買はぬ、と云ふ

やうな生やさしいものではなかつた。絶對に日本人には物を賣らないのみならず、暴動團は邦人商店の破壞までをやつた。平生は學校の補助金を受けるさへも容易でなく、不況だからと云つて低利救濟の資金も借り得られる譯でもない植民地居住者は、何か國際問題が起れば非常の犧牲を拂はねばならぬのである。この時も戰亂狀態であつた。邦人は朝日ホテル、松屋ホテルに集合し竹槍を唯一の武器として一週間籠城した。幸ひに死者もなかつたが、物質上精神上には多大の損害をうけたのであつた。

大正七年軍艦最上が碇泊中のと、世界的のインフルエンザが流行した。軍艦にも病者が殖えて、もうしまひには艦長自身が氷を破り水兵の頭を冷やしてやらねばならぬ程になつて來た。陸は陸で店を閉して寢込んでしまふ處も大分出來た。日本人會はホテルを開放して病室にと艦長へ申込んだが、各所に病人を別けては手がまはり兼ねると云ふので、安藤病院の三等室一棟全部を提供したのであつた。こゝへ患者全部を收容し、日本人會の諸君は都合のつく限り總出で奔走した。特に平生問題にされて居る娘子軍の活動は眼ざましいものであつた。客衣も自分の浴衣もありつきり提供して、日夜つきそひ、通譯もやれば看護婦の役もつとめ、心をつくして看病した。死者十

五名は邦人墓地内に涙と共に葬られたが、後は全快した。三千里外の異域に於て、わが同胞が心からの丹誠は、猛きものゝふも深き感激に熱涙を灑いだのであつた。現在、ピナンの日本人の總數は二百八十四人である。その職業別は、

貿易業	一	ゴム栽培	一	醫院	三	剝製	二	旅館	六	雜貨商	五
齒科醫	七	大工	一	時計製	一	僧侶	二	寫眞館	三	寫眞材料	二
理髮	四	製菓	一	理髮品修繕	二	製靴	一	賣藥業	三	マンサージ	二
漁業	二	洗濯	二	製材	二	帽子、洋服修繕	一	無職	一五		

極樂寺

支那街の富豪の建立である。寺はピナンの郊外山腹に在る。門を這入つて行けば池があり、廊があり、花壇がある。曲折したる石の階段を上りゆくと、また門がある。支那式の極彩色を施した樓閣佛堂が、幾棟か山の上に續く。この間は廊下を以て連ね、中にはバーも出來て居る。上には佛塔があり、眺望のきく樓閣もある。日本の佛閣は、老杉古木シン〳〵として晝猶暗く、自か

ら敬虔荘厳の感があるが、こゝでは金色燦たる佛像も端厳微妙の御姿はなく、凡てが薄ッぺらに見える。唯佛殿前の眺望臺で悠然として紫烟をくゆらし乍ら、景色を眺めて居ると、風は涼しく見晴らしが良くてよい。靈所として見れば飽きたらぬが、ビールでも飲んで涼風を容れ、展望を縱にする行樂地とすれば結構な處で、形勝の地を占め、輪奐の美にも骨を折つてある。ピナンでは必ず觀るべき名所となつて居る。

寺で今一つ蛇寺と云ふ名所がある。緩起や由來は知らないが、こゝにお詣りすれば金持ちになれると云ふ。支那人も妙なことを考へたものだ。小さい寺であるが中に這入つて觀ると、驚いたり、佛壇、華、賽錢箱、至る處長いのが横はつたり、とぐろを卷いたりして居る。薄暗い御寺の中は滿堂蛇の巣窟である、金はたまるかも知れんが餘り良い氣持ちのするものではない。

ピナンの郊外眞直なる道路は、鬱蒼たる大樹を覆ふて晝猶暗き感がある。この間に點在する大厦高樓は皆支那人の別荘である。彼れ等は早くよりピナンに來て、錫山の鑛夫として働き、大道の露店から始めて、富巨万をなしたものである。一度支那人の墓地を觀れば、幾百幾千となき壘々たる墓石、彼等の永き歴史と、苦闘の蹟とを物語るものである。

ピナンよりハヂヤイ

珈琲、パン、卵の簡單なる朝飯を濟ませ、棧橋に驅けつける。汽車は對岸のプライといふ驛から出るのである。渡しは小蒸汽船で二十分程かゝつた。對岸に近く突堤がある。これは一万噸級が二隻、六千噸級が三隻つけらるゝ豫定で、總經費一千九百万弗をかけ築造したものであつたが、河の上流からは絶えず土砂が流れて來、又下からは潮流が逆にこれを押し上げるので、如何に浚渫船を活動させてみても、海床が埋まつて駄目であつたと云ふ。で、十ケ年もかゝつて漸く出來上つたものであるが今は用をなさずそのまゝになつてゐる。

プライ驛を發したのが九時三十分、汽車は椰子園ゴム園の中を走り廻る。この邊のゴム園は無暗に密植して居、その葉にも力なく疎らである。土質は鐵分が多いので、表土は赤錆を帶びて居る。餘り良いとは言はれない。

田圃は遠く開けて居る。田には刈跡に青葉が延びて居る。その中に印度牛や水牛が悠々と晝寢をして居る。水牛のためには、田の隅に一坪程の水溜が出來て居る。水牛は良い氣持ちでこの

中に浸つてゐる。水牛は水を出ると天日に體を晒すので、身體は壁土を塗つたやうである。或年、旱魃で水のなくなつた時、最も難儀したのは水牛であつた。この年には、水牛が大分斃れたと云ふ。

ケダ州からシヤムの國境にかけて、ゴム園や田圃の中に團子のやうな山が突兀として居るのを見る。これは鐘乳岩の山である、馬來半島には元來この種の山が多い。中には、大きな洞窟が有つて數百人の隱れ家となるのもある。一時馬來半島を戰慄せしめた强盜團もこの無數の洞窟を根據に、出沒變幻、富豪を脅かし、銀行の金を奪ひ、或は自動車を襲つたりして大いに官憲を手古摺らしたと云ふが、成程これならば堅固な要塞である。ケダ州の首府アロスターも通り越して晝頃には馬來とシヤムとの國境の驛パダンブツサールに着くことが出來た。

山き如の子團

驛の附近は草原で、只、驛員の住宅と二三町行つたところにホテルが一ツあるだけである。土人の部落は少し離れたところに見える。近く遠くに支那の書に見るやうな長楕圓形のさつま芋を押し立てた山が見える。驛はシヤムから馬來に行くものと、馬來からシヤムに行くものとで大分賑はふ。黃色い衣をまきつけ手には天蓋を持つたシヤムの坊さんも見える。勞働者として馬來に行く支那人も見える。

この間にシヤムの稅關吏が來て調べた。荷物は一寸カバンを開けて見ただけであつたが、大きな帳面を持つて來て旅券の中の主要記事を寫しとるのが、書いたり消したりして大分手間とる。姓名、年齡、住所、身分、職業、目的、旅券を縱にしたり横にしたり、ためつすがめつ漸く書いた。二十分位はかゝつ

パダンブツサールにて
左武井氏、右著者

たらう。これでは發車迄に間に合ふのだらうかと思つて居たら、流石に稅關吏もウンザリしたと見え、武井氏の分は寫眞と本人の顏を見比べただけで終り。

一時半には發車した。

暹羅

暹羅は東、西、北の三方面は、佛領安南と英領ビルマに包圍され、南方細長く馬來半島に延びて居る。南北の延長は千二百哩、東西最も廣いところは四百八十哩、總面積十九万八千九百平方哩、わが國の本州に臺灣、朝鮮を加へたものよりはやゝ狹い。暹羅の總人口は一九二四年の調査によれば九百六十一万八千人である。

暹羅の產物としては米が多く、チーク材は世界的に有名である、また錫も澤山に產する。

暹羅の貿易（一九二五——一九二六）

輸入總額	一億六千一百二十四万〇〇四銖
綿布及其製品雜貨等	一四〇、七〇九、〇〇〇銖
酒類	二、九〇〇、〇〇〇銖
阿片	五、〇四五、〇〇〇銖
金銀等	三、六三四、〇〇〇銖
金の地金	八、五九四、〇〇〇銖
輸出總額	一億九千六百五十八万九百二十一銖
米	一六二、六二四、〇〇〇銖
チーク材	五、六三六、〇〇〇銖
雜品	一八、九一二、〇〇〇銖
再輸出品	九、〇九三、〇〇〇銖

新開の市街ハヂヤイ

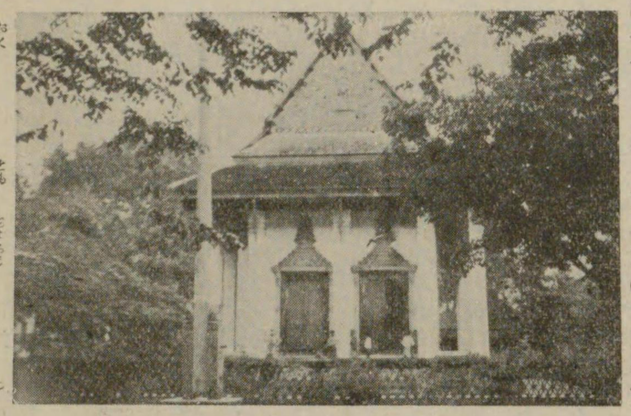
國境からハヂヤイ迄は約一時間である。こゝに椎葉君と云ふ人が旅館と撞球を兼業して居る椎葉君とハヂヤイから三十キロ許り距つたシンゴーラの久松君とが迎へに出て居て呉れた。久松君は暹羅に住むこと十年餘、齒醫者と藥種屋で上下の信望を博して居る人である。この町には驛に近くレストハウスがある。椎葉君は餘り自分の家がひどいからレストハウスにでも御案內しませうと云ふが、扨心配なのはこの旅館は海南人の經營であるから、果して吾々をとめて呉れるや否や疑問である。が、まあ當つて見ろと言ふ譯で交渉して見ると、承諾して呉れた。こゝで椎葉君

にどんな狀況ですか、とボイコットの有樣を聞いて觀る。

支那人のボイコットの實行委員連が會合して椎葉君に一寸相談があるから來て呉れと言つて來た。椎葉君としては、これ迄三回――こんどともで――ボイコットを受けて居ると云ふ。そして、椎葉君は商買が樂になりさうになるとボイコットで、復た元の木阿彌に立ち歸る。忌々しくて仕方がないが、日露戰爭で彈丸の中をくゞつて來た漢で、度胸の据つて居る君は、チヤンコロ何が出來るかと云ふ勢ひで乘り込んだ。彼等はその勢ひに僻易したか、顏を見合せて居るだけで一言も言はない。そのうちに頭立つた者が、今夜は委員が揃はぬから歸つて呉れと言ふので、大にタンカを切つて歸つて來たと云ふのであつた。又、

椎葉君の處に球撞きに來て居たシヤムの青年達がラネムを飲みたいと言つたので、前の支那人のバーに註文してやつた。ところがバーの主人は、「どうか私共の方に來て上がつて下さい、日本人の店には出せないから」と斷つた。そこでシヤムの青年達は怒つた。吾々の飲むものが賣れないなら、誰れにも賣つては承知しないぞ、と巡査を引つ張つて來て、表に張り出しをした、「この店は休業中故、何人も買ふことを許さず。」と、そこでバーの主人も閉口して百方陳謝し、張札

だけはやつととつて貰つたのであつた。



院寺の羅暹

「支那人もシヤラクサイ眞似をしますが、シヤム人は中々痛快なことをやりますよ。」と言つて、椎葉君は痛快氣に笑ふ。

また久松君はシンゴーラに於ての出來事を語つた。そのはなしは、

彼南の支那人は魚を食べたくて仕方がないのであるがボイコットの爲め、日本人の捕つた魚を買ふ譯に行かぬ。市場には魚が山ほどあるが何とも手の出しやうがない。そこで支那人はシヤムのシンゴーラ迄魚を買ひ出しに來た。その爲めシンゴーラの魚市場は悉く手金をうつて賣約濟と云ふことになつた。かくとは知らず、こゝの總督の奥さんがお伴の女中かなんか連れて魚を買ひに見えた。一尾買ふことになつて、店のもの

がそれを渡さうとすると、それはもう賣約濟みになつて居るのであるに、なぜ貴樣はそれを賣るか、このノロマめと云ふ譯で魚市場の者が皆でなぐつた。奥さんは吃驚して邸に歸つて總督にその實情を話したと云ふ。

そこで問題は大きくなつた。

これを聞いた總督は烈火の如く怒つて、海濱に居りながら魚一尾も買ふことが出來ぬと云ふやうなことは仕出かすのは甚だ不都合だ、シヤム人の生活を脅すものだ、國法にてらして一日に千銖（一銖は日本の約一圓）三日間の分三千銖を納めよ。又シヤムの魚は一尾も領外へ出すことは出來ぬ、と嚴命したといふ。

ボイコットの影響は久松君にはないらしい。無いばかりでなく、彼南あたりから態々治療を受けに來る支那人もあるので、却て大當りの方である。久松君とハヂヤイの町を歩いて居ると、一人の若い女に會つた。この女は小學校の女教員とかで、久松君の兼ねての知り合ひの中であつたと見え、吾々の側に寄つて來て恭しく合掌禮拜するのであつた。吃驚したが、後で話をきいて見ると、暹羅では一から十まで佛教中心であると云ふのだ。

佛教の國

シヤムは佛教の國である。日本のやうに葬式とか、追善供養などのみに坊さんが關係するのとは違ひ、苟くも男子は一度びは必ず剃髪して佛門に這入るので、冠婚、葬祭悉く佛教に關係して居るのである。今その大要を述べると、

シヤムの總人口九百四十万人の中、僧侶の數が十万人、その外に千三百人の修業中の御小僧が居る。兎に角百人に一人は坊さであるから素晴らしいものだ。シンゴーラの町を歩いても、頭を剃つて、黄色の法衣――長い布を身體中に卷きつけたやうなもの――を着て、手に團扇のやうなものを持つた坊さんが何人となく通るのを觀る。

僧侶の持戒は實に堅固で八ケ釜しい。五戒十戒は扨て置き、日常座臥飲食凡べて二百二十七個條あると云ふ。シヤム人は貴賤貧富を問はず、一度は必ず出家する、食は毎朝午前中に托鉢に廻つて一回食をとるだけである。雨期三ケ月だけ出家して修業をするものもあれば、一、二年やるものもあるが、これが了つて始めて一人前の男となる。寺院の修業により、佛教々理を修得し、

禁慾生活を體驗して、一生佛門に身を捧ぐる僧侶の有り難さがわかることになる。

出家には幼年で寺には入るものを沙彌僧と云ふ、二十歳以上の出家が比丘である。朝は鉢を抱へて長者の門に托鉢し、午後からは一切の食をとらぬ。米錢を貯へず、遊樂の地に足を投ぜず、漉さない水を飲まないなど一々戒律にある。月二回各寺の丘比が一堂に集まつて講義をきゝ、過去半月の行につき反省する。雨季三ケ月は佛寺に留まつて經典の研究と修業に精進し、それが了ると行脚の旅に上る。身に着くるものは、三衣と一鉢、野營用の天幕——大傘の周りに白布を垂れたもの——糸、針、水こしの袋、剃刀などである。行き暮れて木の蔭を宿とし、難行苦行を重ねて靈跡に參詣し、民風を視、布教傳道をする。

王者となる方も一度は必ず出家をされる。現王も太子時代には徒跣で、稻垣公使の門前に托鉢に來られたと云ふ話もある。

佛教は美點もあるが一面遊惰の風を作り、また文化の向上國運の進歩を妨げて居る。

南シヤムの日本人

ハヂヤイには椎葉君の外に岩谷君と云ふ人が居る。シンゴーラには久松ドクトルの他に寫眞屋が一軒ある。少し南のパタニーの町には、瀨島政彦君と云ふシヤム人から崇拜されて居る快男兒がゐる。この人は鹿兒島の醫家に生れたのである。醫術は修めずに何か外の學問をやつたのであるが、シヤムに來てからは醫術で立つて居る。柔道が三段の猛者で、病人があれば夜る夜中でも、如何なる貧者の家にでも行く。半分以上は施藥である。また一切平等主義で親切であるので地方の人の信頼は絶大なものだと云ふ。齒醫者に川村君、ドクトル箕輪君、田邊吾市君、瀨戸君などがあり、皆この近くに居るのである。

シンゴーラ町

シンゴーラは南シヤムの中心と言ふが、人口は五千位なもので、町はシンゴーラ湖と海との接觸點にある。シンゴーラの湖は長さ八十哩もある。海とは續いて居るので內海とも言へる。二十

哩も航行して行くとそこから淡水とかはる。この町は南部總督の所在地である。

濱邊に近く砲門を据えて石垣で圍んだ舊要塞もある。海岸にはシヤム灣の洪波激しく打ちよせて居る。濱邊の檉柳松の古木は、磯風に吹かれ吹かれて、幾十年か鍛え來つたその巨軀を、今も猶、頑丈な枝を伸ばし、幹をくねらし强風と鬪つて居る。磯馴松の趣きは巨木だけに一層、雄大と雅致がある。

町の側に小山があり、燈臺があり、寺院がある。この上の展望は頗るよい。シンゴーラの町は眼下にある。湖水は丘陵にさへぎられて遠方までは見えないが、山田長政に緣のある六坤國は湖水の北に當ると云ふ。パタニーは南六十哩、日本とも關係ある舊港である。東の方はシヤム灣の蒼波渺茫として、水天髣髴のあなたは安南か。

山田長政とその時代

暹羅と云へば山田長政と云ふ位に、山田長政は日本人では昔から有名であつた。しかし、長政いかに偉くとも事情もわからず、言葉もわからぬところへ行つて直ぐに總大將になれる譯のもの

ではない。これにはこゝに何十年かの築きをなした日本人團の勢力があつたと云ふことを考へてみねばならない。

一五七九年(天正七年)、シヤム國のアユチヤ朝ナレーサワラ王のとき、隣國ビルマの大軍が侵入して來た。アユチヤ王朝の危機で上下動搖したが、この時奮然日本の義勇軍が起つてシヤム軍に參加し、ビルマの大軍を邀擊し、敵の總大將の太子を殺し、大に日本人の威名を揚げたことがあつた。これは長政の生れる前、卽ち十一年も前の話である。シヤムに於てはこの時分から日本人の勢力は侮るべからざる權威を示すやうになつた。その後二十九年を經た一六〇五年に、王位繼承の問題が起きて、新王が卽位するや反對派の貴族を誅した。日本人團は殺された方に同情したので、王宮に亂入して、貴族を殺した下手人の四人を誅することを要求し、王の血判をとり、その質として數名の首長の引き渡し方を要求した。王は悉くこれを承諾した。とは英人フロリスの書いたのにある。して見ると、日本人は宮中の內爭に迄關係して隨分思ひ切つた手段に出る程剛勢なものであつたに相違ない。これは長政の十六才の年に當るので、未だ無關係の時代であつた。それで軍隊を向けて日本人町を威嚇するでもなく、日本人町は益々優勢になつて行く處を觀

ると、その當時のシヤムの朝廷などは洵に無力であつたことが想像される。

この頃日本町に居住して居たものには大坂關ケ原の勇者も大分あつた、船を持つて居る商人もあれば、海賊專業のものも居た。釘屋庄右衛門、玉屋忠兵衛、總元締岩倉平右衛門、大坂屋、綿屋、岸部屋などは商人だが、有賀門太夫などは兵法家である。津田又左衛門など言ふのも居つた。何十年かの地盤も出來、國の戰亂に義勇軍も編成すれば、小さな喧嘩にも飛出した。英商會とシヤム官吏になつて居る英人との爭鬪に飛び出して命を失つたものもあつた。これは英商館にも雇はれて居る日本人は大分あつたのである。貿易もある、政事向きにも口を出す、これが日本人町の情況であつた。

○

長政の生れ故郷は駿河の國の安倍郡藁科郷で、家は農家であるが、長政は持てあましものであつたので、親戚にあたる駿府の紺屋嘉兵衛の家に預けられた。

その頃駿府の貿易商は二十戸あつた。これ等は渡唐と稱して毎年二軒づゝ巡番に年々交趾、シヤムなどへ船を出した。長政はかう云ふ雰圍氣の中で育つたので、シヤムや安南の事情は充分知り拔

いて居た。日本町の人が長劍を横たへて威張つて居ることや、隣國と戰爭が絶えないことなどは彼の功名に燃ゆる精神に一層油をそゝいだ。

この頃シヤムへ行く船の官許を得たものは三十五隻あつた。この外に、渡唐船もあれば御朱印のない船もあつた。また外國船も日本甲螺や色々の交渉の爲めに日本人を便乘させたものであつた。行く便宜はいくらでもある。

上陸してから日本人團の世話にならなければならぬ。關ケ原大坂の剛の者がさう安々と新來の若造に采配を任せる譯はないが、長政は駿河に居たとき臨濟寺で學問はして居、軍學も學び、劍術も出來數年間諸國を武者修業をして歩いたし、元來が大膽で辯說はよし、武辯一片でなくて人心操縱術も心得て居たので、在留日本人の信任を得てしまつたのである。國王に推薦したのは津田又左衛門だと云ふ說もあるが、兎に角日本人團の親分株になつてしまへばもうたいしたものであつた。日本人團は步調がそろひ、長政は大勢力を率ゐることになつたので、長政時代が最も優勢になつたのであつた。そのうちに暹羅と六昆國との戰爭になつたが、六昆の百姓一揆見たやうな軍勢なら何でもない。長政は六昆國の唵普羅となり朝廷では大臣の位置を兼任して居たと云ふ。當時の日

本人の位置を考ふれば長政がさう無力である譯がない。そのうちに呂宋からも攻めて來たとか、隣國からの侵入があるとか云ふ問題のある毎に、日本人の勢力は增して行つて、長政が日本人團を率ゐて居るうちは隣國も一寸手出しも控えて居つたと云ふ、長政は從者數百人で槍を押し立て意氣揚々得意滿面であつたに相違ない。

日本からも頻々と船は行くし、シヤムからも日本へ歸つて來る人もあり、そこで長政の評判は大したものとなつた。

鄉里の貿易商桑名屋淸右衞門、富田屋五郎右衞門が暹羅に行つたとき長政に會つた。長政の羽振りの良い位置に居たことを眼のあたり觀て來てそれを吹聽した。またその時に淺間神社に奉納する額を持つて來た。駿府のみならず日本の暹羅行の貿易船は非常な便宜を與へられて居たのであつた。

元和七年には暹羅王から將軍へ國書方物をもたらした使節をおくつた。長政も執政に書面と土產物を贈つた。その後九年寬永六年にも使節が來、長政からも方物を獻じて來た。かう云ふ譯で長政は日暹國交には大分力を盡して居る。獨り日本人に重く見られて居るのみならず、外國船も

長政の庇護に俟つことが多かつた。その當時平戸の英商館に居つたコックスと云ふ人の日記に（一六一七年十二月三十日の條）暹羅に居る英人と日本人のオムベラ（長政を謂ふ）に宛て書面を認め贈り物をして居ることが書かれてゐる。

また、有名な天竺德兵衞事米澤德兵衞、角倉與一の持船の書記に雇はれ、寬永十年十月長崎を出帆して暹羅に行つた時の記事に、

右シヤム國ハンデビヤの城主はオヤカウホンと申候、侍大將にて、位はナンフウと申位の由日本にて右大臣の位にて御座候……國主の下知にて所々の軍に手柄とも致し候故、國主の婿になり、その上後にはシヤム國の大將と成り申候由、日本にては山田仁左衞門と申候へ共天竺にてはオヤカウホンと申候……

この當時、國際的に長政くらい、日本人の耳に華々して勇ましく響いて居るものはなかつたのであつた。

又一外國人たる長政にさうシヤム人が顯要な位置を與へる筈がない、との疑問もあるが、シヤム人はその後ギリシヤ人にすつかり國政をゆだねて居つたこともあつたくらいで、存外寬裕なと

ころがあるから不思議はないのである。

津田又左衛門はもと商人であるが六昆征伐の功で王女を賜はり、三右衛門と云ふ子を設けた。後に子を連れて長崎に歸つて、暹羅貿易の監査役と通事とを兼ねて居たのである。

長政の全盛時代に王位繼承問題が起きた。お家騒動で、先王も毒殺され幼帝も毒殺された。長政は憤慨して奸黨の掃蕩を考へて居るうちに毒殺されてしまつた。戰爭中創所の療治をして居つたその膏藥に毒があつて、王より送られた女子と結婚式の最中に頓死したとも云ふ。

長政が死ぬと日本人は宮廷に對して反感を持つやうになつた。遂には、王を生けどりにするなどゝ公言するものもあつたので、宮廷では先手をうつて一六三二年(寛永九年)十月六日の夜、日本人町に火を放ち、大砲を打ちかけた。日本人町は全滅し、日本人は船で逃げたのであつた。或は、寛永十一年二月十九日いろ〳〵悶着の末、日本人町の人々が船庫から三百餘艘の船を出して、堂々と砲火を交へてカンボチヤの方に引き揚げ再擧の計劃をしたとも云ふ。

シヤムに於ける日本人の勢力は、その後幾分もり返へしたが鎖國となつて後を繼ぐものがなかつたので自然消滅となつた。

序にその隣國に於ける日本人の狀態をのべると、

シヤムの隣國は今の佛領印度支那で、その南端がサイゴンの港のある交趾支那である。シヤムに接した北隣が南瓜で知られたカンボチヤ、その北が羅亭竹で有名なラオスである。東海岸の北隣が安南國で、北端支那に接近したところが東京で、港はハイフオンと云ふ。ハイフオンはサイゴンから千六百キロ、東京ハノイから百六十キロ、風光明媚なハノイ灣に臨んだ港で、古いところは阿部仲麻呂の遺跡があると云ふところであるが、德川初年頃には御朱印船が輻輳して、日本との貿易が盛であり、こゝに多數の日本人も住んで居た。

沃野を訪ねて

シンゴーラ湖を北に進み、北岸につくと、こゝに廣漠たる沃野がある。沃野は民有に歸したところも大分あるが州有地もある。この地方の產物は米作であるが、概ね原始的の農法で幼稚なやり方である。

久松君は、「これを器械を用ゐて日本人の手でやつたならば、利益は非常なものであり、又日本

民族の發展にもなる」と云ふ。これは久松君の持論であり、永年計畫して居る事でもある。自分としてもその話を聞いて居たので、今度それを觀ようと云ふことになつたのであつた。

州有地は一ライ（四十メートル平方）二圓五十錢出せば、それで完全に土地所有權が得られるのである。地租は下附された地は耕作すると否とに關はらず納めることになつて居る。地租は左の五等級になつて居る。

一等田 一銖、 二等田 八十士丹、 三等田 六十士丹、 四等田 四十士丹、 五等田 三十士丹

明朝早く出懸けることにして、湖水を渡るランチの世話や食糧などの用意をたのみ、ハヂヤイに歸る。

次の日は自動車を傭つてシンゴーラに向ふ。坦々たる道路、朝風涼しく吹き渡る野を一氣に走らす。約十四分でシンゴーラに着いた。既に用意は出來て居る。蒸汽船は靜かな內海——琵琶湖のやうに四面平野と山とに圍まれた廣々とした湖水—の上を一時間に十浬近くの速力を以て駛る。

シンゴーラ內海は、入口の處は狹く、中は廣く、又中間くびれて、先方に行つて一大湖水をなしてゐる。中間くびれたやうな處は極めて狹く、これより奧は淡水である。內海とは言へ一大湖

水で、漂渺として、島山淡く、水平線上に英字を草書で達筆に書きなぐつたといふ形に、奇峯亂山が臥伏してゐる。舟が岸邊近く行くときは、漁村の點々として叢林の間に在るのが見える。湖面に全く風のない時は、氷を張つた如く、林、森、家屋、そのまゝの影を水にあらはす。

實に幽邃靜和な湖である。

シヤムの風俗

◇

以下は久松君の船中で語つた話を綴つたのである。

シヤムでは街を見ても、田舍でも、男は手に一物も持たずにぶら〳〵遊び、ぶら〳〵道をゆく。物を賣る人、勞作する人、皆女子である。男子は三四人の妻を持ち、妻に稼がせて、只ぶら〳〵してゐる。男子の結婚前の修業といへば、剃髮佛道である。

それで、いくら富家の子弟でもこれが終らない內は一人前となれない。隨つて妻を持つ資格が出來ない。が、二十五歲以上になれば二人でも三人でも、自由に妾を持つてもよいので、妻の姉が寡婦であればこれを妾とする。又、妻の母が寡婦となつた場合でも多くはこれを妾とする。

それは後夫を迎へれば、その財産が後夫のものとなるから財産の分離を懼れて双方共その方を喜ぶ爲めである。妾は同一家に起居し、妻の侍女のやうに立ち働くのである。シヤム人は幾つもの戒律を守るが、親や姉妹を妻にすることは禁ぜられてゐない。

英明の君主であられる現プラジヤデイポツク王は、西洋式に一夫一婦を守られ、女官、冗官を廢し、鋭意國政の釐革に努められて居る。先年治外法權を撤廢し、外國人も內地人同樣に土地所有權、その他同一權利を得させることになつた時、日本好きの皇帝は、若しシヤムの女子にして日人系の子供を得たる場合は、國費を以て教育し、その器によつては、大官にとり立てゝやると・の御諚があつたと傳へられては居るが、シヤム人は、外國人を總理大臣にする位は平氣でやつてゐる。嘗ては山田長政も重く用ゐられ、またギリシヤ人が總理大臣となつたこともある。

今シヤムには、支那人、若くは支那人の種が隨分多い。今のまゝにシヤムの男子が怠惰であつたならば、シヤムは全部支那人化して仕舞ふかも知れない。王樣は是非日本人を入れてシヤム人を日本人の如く聰明且つ勇敢にしたい。シヤムは日本より非常に早く西洋と交渉を開始して居りながら、今以て文化が進まない。然るに日本は最近西洋文明に接して、今は一等國——であると、

非常に日本に憧憬て尊敬を持つて居られると云ふ。

◇

おかしいのは敬禮で、寢て居て右の肘を床の上にもたせ足を長く伸ばして居るのが最敬禮であるといふ。物は左の手で差し上げる。寢て居る敬禮は樂なやうであるが、非常に窮屈で骨が折れるさうである。特に遠方から膝でいざつて伺候し、寢て居て拜受し捧呈するなどは隨分變なものである。

これについて一ツの挿話がある。先年王の一族シンゴーラの總督が、會計官が不信任とあつて、土地の商人に「今回からは自身金錢を拂ひ渡す」との御諚であつた。サア大變、總督自身から受取るとすれば貴族に對する禮法によらなければならぬ。そこで商人達は代金を受けとるのに廊下から膝でいざつて行つた。金は間違ひなく頂戴出來たが、膝の皮がすりむけてしまつたので、一度で懲々してしまつて、後は金を頂戴に行くものがなかつたと云ふ滑稽なこともあつた。

シヤムでは背後を通るときに限つて挨拶をする。普通は人の前を通るのが作法であると云ふ。もし背後を通る場合には御免下さいと挨拶して通るといふ。これも聞けば理屈がある。と云ふの

は、シヤム人は中々執拗で、一旦受けた怨みは、必ず報復しないと氣がすまぬ。その爲め五年も十年も經つて匕首をつき通して怨みを晴らすものもあるので、前を通るのは不意打ちは困難だが、後に窃に忍び寄るのが危險であるから、背後を通るならば聲をかけて挨拶するのが禮であるといふ。かゝる習慣も戰國時代には尤もの事と領かれる。

シヤムでは何業をしても、營業稅はないが、只成年に達した男女から人頭稅を徵する。これが納められないと道路修繕とか何とかの勞役に使はれるのである。人頭稅と云つたところで、十圓とはかからぬし、之れを三期に納めれば良いのである。

◇

シヤム人は、昔から隣國と戰爭をして居つたので殺伐なところがある。喧嘩をするにも人ごみの中ではやらない。必ず草のある廣場あたりへ出て堂々とやる。そして立ち會ひをつけることは丁度、日本の武士の果し合ひのやうである。

椎葉君も昔は山など旅行するときは隨分用心したものであつたと云ふ。僅か四五圓の金で人命をとるなどゝ云ふ手合も居たので、堅い金剛杖のやうなステツキを持ち、懷には匕首と鎗と兼ね

たやうなものをかくし、イザと云へばそれを金剛杖の先きに嵌めて、武器にしたと云ふ。また、山に這入るときは五百メートル位の先きが、見し通のつかぬやうな處は、餘程四方に注意を拂つてから這入つて行つたとか、寢るときは床板をしらべたとか、位置を考へたとかいふ。武者修業の人のやつたやうなことをしたさうであるが、實際、只一人僻地に生活するには、大分苦心が要つたことであらうと思ふ。

船は午後三時には北岸のタツキリヤムラについた。それから小舟にのりかへて小川を少し上つて行く。この邊の民家は、木造建のアタツプ葺の屋根、板壁か蓆壁であるが、それが揃ひもそろつて壁は破れ、軒は傾き、屋根も月の漏るといふ位の程度ではなく、骸骨現はに、そのみすぼらしさと來たらお話にならない。熱帶下の寒村である。こゝでも亦シヤムの女の働いて居るのは見るが、男はブラ〳〵して居る。產業の振はざる所以あるかなと言ひたくなる。

この邊一帶に土地は平坦である。一望十里山を見ない。綠草は白雲に接して居る。只この曠野の中に處々森林が見える。土質は白みがゝつた强粘土質だから、雨期の頃になると、ペタ〳〵と

した一面の泥となる。が、今乾季に來て見ればコンクリートで固めたやうで一寸鍬を入れられさうにも見えない。大體こゝの土地は水面と餘り高さが違はないので排水のしやうがない。こゝに田をつくつてあるのを見るが、雨季に植付をする仕組であるらしい。見渡す限りの廣野原で、土地も相當物が出來るやうであるが、困難な問題は雨季に湖水の水が增加するために築堤の設備が要り、灌漑、排水の設備が要るといふことである。これなどはどうにか出來るとして第一勞働者の問題であるが、この地方の男子ではとても傭はれて勞働をするものはない。よし雇つたところで半人分又四分の一人分の仕事しか出來ぬ。かゝる土地に日本の農家を移すとして、果して米だけで生活が出來るか、これは大に考へて算盤を彈いて見なければならぬ。が、二毛作も設備さへ良ければ不可能ではないといふし、反當り一回二石位はとれるといふ。兎に角、シヤムは毎年米の輸出が一億圓もある。米田は全國の百分の二が開發されてゐるだけであるが、今日猶國民を養つてその外に一億圓の輸出をして居るから大したものである。

今農業を急に盛にすると云つても、農民を教育訓練して行かねばならないから、それは出來ないことである。が、日本人が最も適當なる處を選んで租借をし米作をやるならば、出資者も利益

もあらうし、又、日本の農民も立つて行けると思ふ。そしてこれがシヤム人を刺戟することゝならば、シヤムの爲めにも最良の生きる道になる。

日の暮れぬうちに湖水のほとりに出た。今夜若し暗夜ならば、湖水の上に一夜を明かさねばならぬ。幸ひにして一天晴れ渡つて居る。月は東天に昇つた。明月皎として湖面を照し、處々金波銀波を蕩はす。山は遠く黑くかすかに、天地只月光に包まれて、寂寞たる宇宙の萬象、只聞くものは間斷なき推進機の聲のみである。

全く夢の世界、詩の境地である。

てにて海岸のラーゴンシ

佛徒の供養

夜は未だ明けきらぬ。ランチは無事シンゴーラに歸り着いた。久松君の家で少憩し表に出てみた。正直に言ふと散歩に出たのでなく便所に行つたので

あつた。シンゴーラには家々に便所はないので、海岸に突き出してある共同便所まで行かねばならぬ。ジヤワ、スマトラと同じく廁は川屋である。兎に角、在り場所を教はつて行つて見たが、これは海中に突き出して建てゝあるから清々したもので、覆ひは半身隠れるだけであるから、碧水緑山が眺められる。下は波が打ちよせて居る。この位痛快な便所は始めてゞあつた。

歸る途中、支那人經營の精米所の前に、三十幾人の黄袍徒跣の僧侶が行儀よく整列してゐるのに逢つた。精米所の門口には粥の釜と、豆か大根の煮たものが卓上に備へられてある。最初一人の僧侶が靜かにその前に進んで、右脇の衣の下に隠してあつた鉢を取り出して前にさゝげる、傍の人がこれに一さじ飯と菜を掬つてやる。貰ひ受けた僧侶が元の位置に歸る頃、次の僧侶が進み出る。子供が卒業證書をもらふ時のやうな靜粛さで、緊張してゐる。雑談したり惰容を示したりするものも無い。

この精米所で供養する人數は、毎朝八十人とは驚く。八十人に毎朝供養する長者は、上下の信用もあり、名聞にもなる。シヤムで長者といへば、大人數の僧に供養する人の事である。

日　遲　寺

日遲寺は名古屋にある。曩に稲垣公使が遲羅在任中、遲羅皇室から日本佛教徒に佛骨を分與せらるゝことがあつた。そこで日本から佛骨奉迎使の一行が遲羅に行くことゝなつた、明治三十三年六月十一日一行がバンコックに着くと、皇室では國賓の禮を以て鄭重な待遇をした。一行が歸つて、これを奉安したのが日遲寺である。遲羅からは佛殿の建築用材を寄進した來た。

後同三十五年に先帝が日本來遊の砌は、日遲寺の奉安殿前に手ずから記念の松を植ゑられた。佛教弘布の上のみでなく、日遲國交上にも頗る關係の深い寺である。昭和三年日遲寺からは奉謝使の一行が遲羅に來た。著者は往きにも還りにもこの人達と會つた。不思議な佛縁であつた（全文寫眞説明）

日本と遲羅の國交

明治八年に工部省四等出仕大鳥圭介、大藏省四等出仕川路寛堂の一行が墺太利公使に同行して

暹羅を訪問したのが、日本官吏の正式に訪問した始めであつた。

日暹修交宣言書の批准を了へたのが明治二十一年であつた。二十年には內國勸業博覽會あり バヌランシー親王殿下の御來朝があつた。三十年五月公使館を設置し、東方策の著者稻垣滿次郎氏を一介の書生から暹羅駐劄辨理公使に任じた。翌三十一年二月に日暹修好航海條約が調印せられて、在留帝國臣民は治外法權を享有することゝなつた。日暹寺の出來たのは前述べた通り。明治三十五年先皇帝も御來朝、明治天皇の御盛德には悉く心服され、爾來日本を以て範とし、國政の釐革をされたと云ふことである。

シヤムから馬來へ

シンゴーラを八時前に出發、歸りは國道を自動車で走らせて觀ることにした。國道の兩側には、蠶籠を作るに使ふやうな細い竹が茂つて居る、ゴム園も見える。ゴム園の强敵として大騷ぎをやるランも茂つて居、その橫領にまかせられてある。

この邊のゴム園の持ち主は支那人である。無一物で、海南か雲南、福建から渡つて來た彼等は、

初めは錫山に苦力として働く、少し金が出來れば、町の近くに來て農園をやり、農園の收穫で食糧を得て、鷄を飼育し、野菜をつくり、又幾分かの收入を得る。かくして幾分の貯蓄が出來れば共同で町に商店を出し、仲間のうちの一番商才のあるものに經營をまかせて、自分はその商店の荷物を運び、その賃銀をとつて、段々貯蓄を多くする。勘定が細かくて、浪費がない、勞働はお手のもので、商店の主顏はせずに雇人となつて働くのだから、どうしても殘る筈である。又その合間合間に地所の權利を得て、それにゴムを植ゑ附け、土地に價格をつけてから賣りに出すと云ふ筆法である。

シヤム國境の稅關

國境を挾んで、シヤムと馬來の方と、兩方に稅關がある。稅關の前には汽車の通行止めのやうな橫木がある。どつちの稅關も、碌に檢査もしないで、グズ〳〵して居る。自動車は走つて居るうちは涼しいが、とまると、小さな室に上の覆ひが燒けてくるので、イヤに暑い。結局碌な調べもなしに通過させたのであつたが、しかし阿片の密輸入などが八ケ間敷いのであるさうだ。

ケダの王都

ケダの王都アロスターは、人口二万、北域の重鎮である。町の官吏の邸宅は、大木の欝たる間の青草短く刈込んで、青絨壇を敷いたやうな處に、生垣を廻らした瀟洒な構へである。玩具のやうに綺麗に彩つた可愛らしい議事堂もある、實は議事堂の必要もないのである。が、英國の、王と國民を安心させる機關と見れば良い。

大藏省も司法省も内務省も宮内省も、百官有司整然として、一國統治の機關が備はつて居る。而もこれ一片の外觀的の儀容で、その實は、英國の政務局の一室にシガーを吹かして居る監督官の一指の動くまゝに政事は動いて行くのである。

殺人受負の支那人

こゝに日本ホテルと云ふがあるので、こゝによつて晝食を依頼した。

このホテルも支那人が常得意で、客と云へば支那人、他は僅かの馬來人であるが、ボイコット以來、客足はピツタリと止まつたので大分困つて居る樣子、今のところ馬來人に、十仙二十仙のコ

ーヒーを出す位で、商賣にも何にもならないとこぼす、無職浮浪の支那人が、事あれかしと待ちかまへて居たところへボイコットと來た。

規約を破つたものゝ制裁は、この手合の一手專賣となつた。十圓だせば闇うち、五十圓くれゝば人一人殺して逃げると云ふ物騷な受負ひ事業家である。支那人同志にも、色々裏面に暗闘があつて、このドサクサ紛れに、平生の商敵を威縮めつけやうと企むものもあると云ふ。しかしいつも事件のある毎に威縮めらるゝ日本人は、みじめなものである。

こゝで食事を取り寄せて貰らひ、少憩の後、前の自動車はこゝまでしか來ないので、こゝで新たに傭ふことにした。今夜はピナンの對岸ブライ驛まで行つて、コールランポ行の夜行に間に合ふやうにしなければならぬ。ボイコットの最中で、おまけに言語不通の旅客二人、聊か心許なき感なきにしもならねど、致方がない。兎に角、宿に頼んで確な自動車を探して貰らうことにした。

自動車は氣持ちよくアスハルトの道路を走る。道路の一方は運河となつて居り、運河をへだてゝ大木や竹に圍まれた土人の家がある。溝には丸木橋か、竹二三本渡した橋がある。しかも念入

りなのは、眞ん中に枠が立てゝあつてへの字なりになつて居り、竹の手摺が一方にだけついてゐる。全く文人畫にでもありさうな野趣横溢なもので、英國流のドツシリしたアスハルトの道路と、この原始的の橋とは面白い對照である。いやこの道路と橋とばかりではない、最新式の文明と、極端に原始的な組合せが南洋である。

自動車の置去り

スンガイバタニー迄來た。道の凡そ三分の二は來た譯であるが、この運轉手自動車の溜り場へ引つ込んだ。ガスリンでも入れるのかと思つて居ると、降りて呉れと言ふらしい。それじや話が違ふぢやないかと談判しようとするが、言葉が通じない。グズ〳〵して居ると夜行の汽車の間に合はない。元來ブライと云ふ處は厄介な處で、同名で二ケ所ある、單にブライと言へばピナンに渡るランチの出る棧橋があり街をなして居る處で、今一つブライの驛と云へば新嘉坡行の本線から少し這入た分岐線の終點でピナン行の渡船場になつて居る。兩者の中間に大川があり、渡るのにも多少の時間がかゝる。直ぐに驛にのりつける譯にゆかぬので、氣が焦せる。

特に間に合ふやうに速力の出さうなのを探さしたのであるから、こゝで變なのに關り合つて居たら大變。それはいかん直ぐ行けと、行け、行け、眞直にを連發するが、運轉手はピナン近く行けば、還りに客がないつまらぬので、ウーウーワーワー一向要領得ぬ。そこで日本人の處へ行けと言ふと、解つたらしく運轉手狹い小路に引つこみトントン裏口の切戸を叩く、現はれ出でたるは一人の女子、脊の低い方ではあるが年頃三十四五にはならうか、娘子軍の殘黨とは知れたり何でも言葉の解るのが嬉しい、この人に事情を話して、確な運轉手を賴んで呉れと依賴した。女は直ぐ飛び出して行つて一臺の自動車を引つぱつて來た。前の車と後のゝと賃錢の割振りの話も出來たので、よく途中の間違ひの無いやうに。又ブライの驛近くの棧橋迄をくり返し言ふて、女には禮を述べ、幾分の銀貨を出したが辭して取らなかつた。吾々一片の旅行者でさへ不便があると、この種の人の手を煩はす、汽車も能もない昔、僻遠の處邦商が何かと便宜を與へられたことなどを思ふ。

漸く出發が出來た。日は暮れる。まさか山賊の棲家に連れて行かれることもあるまいとは思ふが、何せい速力がにぶい。

椰子の樹の間を漏れて燈火點々、海の先きが見える。どうやら近くはなつて來た。愈々車は止まつた。下りて聞くと、これはピナンに渡る方で驛に行く方ではないと言ふ。運轉手を叱咤して又車を飛ばせる。時間は未だ三十分程ある、愈々プライ近くラブ河の端に來た。サンパンに乘りて驛にかけつけた。扨て來て居る筈のピナン朝日旅館の主人が見えぬ、寢臺券も買つてある筈である。又一寸まごついた。驛長室に飛び込んで電話を對岸ピナンに掛けると、今客を送つて出懸けた處だと言ふ、ヤレヤレこれで安心。發車少し前にピナンのランチが着いた。客と言ふのは華南銀行の有田重役であつた。朝日旅館が勘定書と釣錢を出すや汽車はガタンと動き出す。若主人は飛び下りる。御機嫌やうの聲も遙かに、

寢臺は上下二段ではあるが、一部屋づゝに仕切つてあつて、洗面の設備迄出來て居る、窓には細かい金網が張つてあつて、蟲の這入るのを防ぐ。

汽車には涼風が吹き込む、月が朧に、ゴム園か錫山か虫が鳴く。

同胞發展の爲めに

蘭領東印度在留邦人

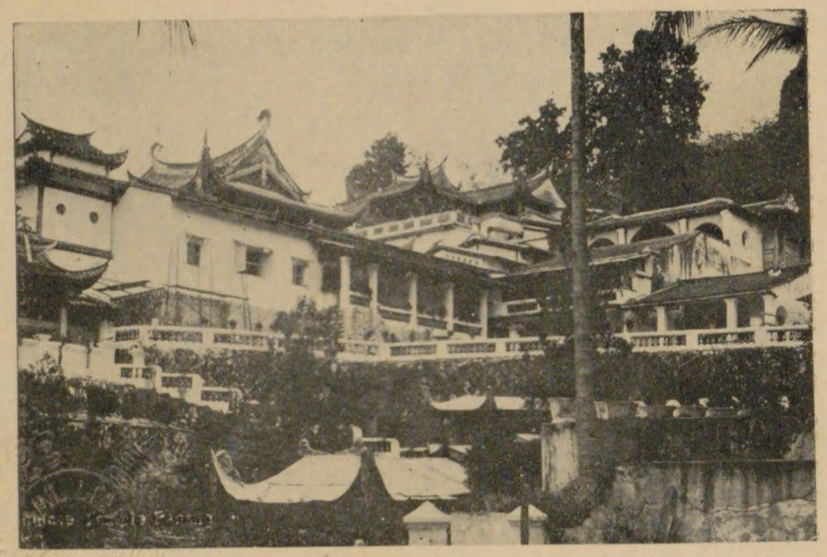
昭和二年十月一日現在の外務省調によれば、蘭領東印度全部を通じての日本內地人本業者數は男二千三百五十三人女二百九十六人で、家族數は男五百五十人女千三百十五人、總計四千五百十四人である。これに朝鮮人と臺灣籍民を加へて男四千八百五十一人、戶數から云へば千三百八十九戶、今その細別を示せば左の通りである。

地方別	職業別	日本人計 男	日本人計 女	以上日本人合計	朝鮮人 男	朝鮮人 女	臺灣籍民 男	臺灣籍民 女	總計	戶數
爪哇	本業者	一・二七一	三五	一・三〇六	一	一〇〇	一〇〇	二・五四四	六一八	
	家族	二八一	六四五	九二六						
スマトラ及附屬地	本業者	四一四	三三五	一・一三三						
	家族	一五九	三三五							
ボルネオ及附屬地	本業者	二五七	三一	五一四	四	二	五	一	五三五	一七〇
	家族	二六三	一六四							
セレベス及附屬地	本業者	二七二	—	四二三	一	—	九	三	四八六	二二五
	家族	二六六	二五							

モルツケン群島及ニューギネア	本業者	二九七	五六	一八七	—	—	—	—	一八七	四八	
	家族				—	—	—	—	三五	一六	
バリー、ロムボック及テモル諸島	本業者	二〇五	一〇								
	家族			三五							
合計	本業者	二・三五二	二九六	四・五一四	一六三	三三五	一〇三	四・八五一	一・三八九		
	家族	五五〇	一・三二五								

右のうち、多いのは會社銀行、商店の事務に從事するもので、次は物品販賣業、家庭勞働者、農耕園藝、漁業勞働者、寫眞業、旅館、料理、貸席、遊戯、興行、齒醫者、大工、左官等である。

職業別	男	女	計
會社、銀行、商店ノ事務員	五九九	—	五九九
貿易商(社員ヲ含マズ)	三二	—	三二
物品販賣業	五一九	—	五二〇
農耕、園藝、畜産	九八	—	九八
理髮、髮結及浴場	六九	—	六九
大工、左官、石工、ペンキ職	八一	—	八一
家庭勞働者	二四	一六七	一九一
飲食料其他ノ製造	四八	一	四九
漁業、製鹽(勞働者ヲ含ム)	一八七	—	一八七



ピナン極樂寺

極樂寺に於ける奉謝使一行と著者

醫務ニ關スルモノ	二四	一	二五
旅館、料理、貸席、遊戯、興業	九〇	七六	一六六
森林業、林產物業	五〇	—	五〇
寫眞、畫、字、彫刻、音樂	一〇三	—	一〇三
自動車運轉手、車馬業	二八	—	二八
洗濯、洗張、染色業	一九	二	二一

と云ふところで他は十人內外で言ふに足らぬ。大多數は店員銀行員と云ふところで、未だ眞の發展と云ふ處に行かないが、大體が歐洲戰爭以後の體形を爲したと云ふもので、段々家族數も殖え落ちつきを示して居る。

支那人に代る邦商の勢力

支那人は爪哇に約五十五万人と外領全體に約六十万人總體で百十五万人は居る。彼等は個人として巨万の富を擁して居る、億を以て算するものもあり、千万の富豪も少なくない、數十万程度のものならザラにある。南洋一般に亘つて輸出入業者から仲介者、小賣店、飲食店等、商業網を張つて居るが、彼等のやり方は投機的で欺罔ペテンが多くて取引上信が置けない。歐商から大手

筋は六ケ月拂で借り、小卸は二ケ月の猶豫期間があるので、彼れ等はこの間に元價またはそれ以下で賣り飛ばし、現金を握つて物產の思惑をやる。當れば大した利益、損になればいつまでも拂へるまで待つて貰らう。その結果、度々述べたやうな詐僞破產となつたり逃亡となつたりする。歐商もこれまで散々愚弄されて來たので、だん〳〵覺醒して小賣の方とも直接取引をするやうになつて來た。邦商も大分痛手は受けて居り、何かと言へば日貨排斥をやられる。が、歐商よりも土人に接近するに於て、邦商の方が便宜の位置に立つて居り、歐商に對しても、支那人よりはズツト信用がある。で、漸次支那人の活動跋踞の範圍を狹くして、邦商が地盤を固め、勢力を擴張して行く氣運に向つて居る。支那人の地盤は漸次覆へされ、衰退しつゝ行くのは時勢の進歩である。

支那人の手から漸次商權を獲得して行くには戰鬪部員を多く作つて、これが段々堅固な地盤をつくつて行かなくてはならぬ。潑剌たる青年には南洋は好個の活動舞臺である。

併し徒らに圖南の鵬翼と云ふやうなことを考へて飛び出した處で、さう簡單には成功するものでない。矢張り三年なり五年なりの實地修業が要る。第一に必要なのは言語である。その土地で

活動するに於て一番必要なのは語學である。が、日本人は昔から國際的に各國の人々と交際して來たのでないから語學は不得手の方である。その爲めにどの位損をして居るか知れない。次は實地商業の骨意であるが、相當の學校を出て居るものが、兎に角この實地商家に這入つて丁稚奉行から仕上げて行くことは中々忍耐努力の要ることである。大會社に就職してテニスでもやり乍ら位置の進むで行く方を希望するのが人情であるが、しかし實地について苦勞をして堅固な地盤を作つて行くと云ふことは、民族發展の上からも肝要なことであり、腕限り獨立獨歩活動して行くことは男兒の本領でもある。今までも折角爪哇まで行つて商店に這入つても、半歲も經たぬのに出てしまふのなどを度々見もし聞きもしたが、忍耐奮勵して大成することを希望する。既に人物が確で、商業上の才幹があるならば資本などは後を追ひかけて行く。

邦人の農園

蘭領東印度に重なる邦人農園は四十に近い。栽培物は護謨　甘藷、茶、油椰子、ココ椰子、シトロネラ、シイザル、麻等である。

爪哇島

作物種類	農園名又ハ會社名	資本主又ハ資本關係
砂糖	ゲダーレン	大日本製糖
茶、護謨	チンタリ	臺灣製糖
茶、護謨	ウオノサリ	臺灣製糖
珈琲、規那、護謨	テムプルセウ	臺灣製糖
茶、護謨	ハリムン	日蘭拓殖
シイザル	スムベルラワン	日蘭拓殖
椰子	ニヤミル	堤林數衛
シトロネーラ	東印度農林工業	大谷光瑞
藍	ランカツプ	根本榮治
材木、馬鈴薯	チカヂヤン	佐藤茂

スマトラ島

護謨	ボルネオ護謨	横山享
護謨	南洋護謨	
護謨	スマトラ護謨	山地土佐太郎
護謨	スマトラ興業	相馬半治
護謨	南和公司	平亮三
護謨	南國護謨	大内幾松
護謨	日新護謨	深井
護謨	第一合同	村上稔
護謨	臺灣拓殖	納富
護謨	スマトラ產業	吉田權四郎
油椰子	カランイノ	野村德七
養蠶	三笠農園	高田繁一

外ニ十二ノ護謨園アリ

ボルネヲ島

護謨	ダナクサラク	野村德七
護謨	東印度起業	鈴木源吉
護謨	スランヂン	塚田清男
護謨	南方拓殖	清水將隼
護謨	永石護謨園	永石伊三郎
護謨	金子護謨園	金子久松
椰子	蘭印拓殖	東京拓殖

外ニ數多ノ小園アリ

セレベス島

椰子	南洋貿易	岩崎清七
椰子	セレベス興業	上野清助
椰子	南斗農園	
珈琲	蘭印農林工業	大谷光瑞

ドボ島

椰子	川原椰子園	川原儀六

ハルマヘラ島

サゴ澱粉、陸稻	江川農園	江川俊治

大體以上の如くであるが、農園投資額の比較から言へば、

	投資額(單位千盾)	百分率
和蘭	一、二一九、二六〇	六七・〇〇
英國	二四六、七〇〇	一三・〇五
支那	二〇六、五八五	一一・七三
白耳義	三五、七〇〇	一・九六

	投資額(單位千盾)	百分率
日本	二八、九五〇	一・五〇
佛國	二七、八五〇	一・五〇
米國	二七、五〇〇	一・五〇
獨逸	八、一〇〇	〇・四四

小企業農園は可能なりや

護謨

南洋で單なる農園の勞働により賃銀を以て立つと云ふのは、比律賓のダバオ位のもので他は不可能である。と云ふのは、南洋一般に勞働賃が安いからである。

けれども小企業としての栽培物は南米に比し不利ではない。只南洋に於ての邦人の發展は奥地に居るものも、多くは雜貨商の利に趨いて、これと兼營にして、多少試みて居るものはあるが、單獨にこれのみで立つて行くと云ふやり方の人を觀ない。しかしこゝに珍しき例がある。

それはボルネオのバンヂヤルマシンの街に近く野村護謨園とか、金子護謨園がある。その近くに二人の青年が護謨園を經營して居る。二人共、十八九の青年で、一人は大阪の某商業學校の卒業生である。野村や金子農園の先輩の指導を受けて、こゝに獨力特行で苦力の手をからずに護謨園を經營して見ようと決心したのである。そこで、二人は共同して處女林を開拓し、家を建て、家の周圍にはタピオカ、野菜、稻などの日常の糧を作り、自炊しつゝ丁度ブラジルに於ける新らしい移住者のやるやうな生活を始めた。この希望に滿てる雄々しき腕に振り上げらるゝ斧により鍬によりて、仕事は着々として進行して居る。この計畫は一ケ年に十九英反づゝを開墾して十年間この作業をつゞけると云ふのである。十年間忍耐力行この生活と努力とをつゞけるならば百九十英反は新式の優良種の實生や芽接によるので、地所は全部開拓されて、六年木が三百ポンドから十年木七百ポンドは確實に得られる。それで左の計算となる。（單位ポンド）

年次	一英反生産量（單位ポンド）	反生産量總計	一ポンド最低三十五仙
六年目	三〇〇	五、七〇〇	一、九九五弗
七年目	四〇〇　三〇〇	一三、三〇〇	四、六五五弗
八年目	五〇〇　四〇〇　三〇〇	二二、八〇〇	七、九八〇弗
九年目	六〇〇　五〇〇　四〇〇　三〇〇	三四、二〇〇	一一、九七〇弗
十年目	七〇〇　六〇〇　五〇〇　四〇〇　三〇〇	四七、五〇〇	一六、六二五弗

十五年目には六年木から十五年木まで、總生産量十一万四千ポンドとなる。十年目に一万六千六百弗の收入で、この金額三万九千九百弗となる。護謨の値は最低ばかり何年もつゞいて居るならば、他の固定資本を多くかけた農園は成立しなくなるから、護謨は自然に上がる。よしんばいかに下落したところで、自活自力の農園であるから平氣に持ちこたへが出來る。一旦暴騰したとなると、十万圓になり十五万圓になることは好況時代から觀てあり得ないことではない。

七年目からは相當の收入があるので、農園が擴張されては行くが、苦力を入れて仕業をやらせるだけの餘裕があるので、これ以後は順調に進展して行くことが出來る。

もし前の青年の如く、自力自活で開拓に當るとしたならば胡椒の如きも、有望なる栽培物たるを失はない。

胡椒については大要前に述べてあるが、

今十バウ(約七町歩)の土地を得て開墾栽培するとする。九バウを胡椒栽培地とし、殘り一バウを住宅地、作業場、菜園、道路等とする。

一、胡椒は三年目から結實多少の收穫がある。八九年目になつて成木する。二十五年乃至三十年間同一の收穫を保つ。

一、收穫量は土人や支那人の原始的方法でも、成熟した木から二斤から八斤九斤は得て居るも、平均四斤を標準とする。

一、價格は白胡椒が七十盾から、百四十盾までも昂騰して居るが、五〇盾とし黑胡椒はその六割の見當で三十盾とする。

一、一年二年は間作に米を作りて、生計の資を得て、園の育成に力を注ぐ。

一、一バウ千五百本、九バウ一万三千五百本植付とす。

一、初の收穫を普通平均收穫量の十分の一とし、毎年增加。

第三年目	一、六二〇盾	一バウ生産量 五四ピクル　一本收獲量 〇・四斤
第四年目	三、二四〇盾	一〇八ピクル　〇・八斤
第五年目	四、八六〇盾	一六二ピクル　一・二斤
第六年目	八、一〇〇盾	二七〇ピクル　二斤
第七年目	一一、三四〇盾	三七八ピクル　二・八斤
第八年目	一四、一七五盾	四七二・五ピクル　三・五斤
第九年目	一六、二〇〇盾	五四〇ピクル　四斤

胡椒は護謨に比べてその收獲が早いので、その收穫で生活を補ひ、次の經營費も出て來る。で餘程樂な點がある。

米

一、米は年一回又は二年三回の割にて收穫す。

一、一バウの土人生産量は二十五ピクルを普通とするも、施肥、耕耘、選種等宜しきを得ば、五〇ピクルを得るは困難ではない。

一、一ピクルの相場は、籾で三盾か五盾位である。

それで米の收獲は、一年一回半ならば一バウ七十五ピクル、十バウ七百五十ピクルあるから、一ピクル三盾とすれば二千二百五十盾、五盾とすれば三千七百五十盾となる。早く收入を得られるのと、生活を安固ならしむるには必要である。廣大なる面積で機械を以て大農式でやつたならば、一層有利であらう。

その他、土地土地によりコーヒーでも野菜でも、藥草でも何でも研究してやれば途はある。困難に打ち勝ち不便を忍んでやるだけの勇氣さへあれば小企業農園の方面で充分發展出來る。

共倒れの惡競爭

歐米の商人も競爭はやるが、日本人のやうな同志打ちは避けて居る。國際的の競爭には一歩も假籍しないが、自國同業者間では互に協調して分野を定め、決して他の權利、利益を犯すやうなことはしないで、組織的に一團となつて他にあたつて居る。

然るに邦商はどうであるか、紐育などでも折角小商人が、多年努力の結果築き上げたる地盤を、他に活動の餘地綽々たる大會社が奪ひ取つて、多數の邦商を苦境に沈淪させ怨恠の的となつて居る。大會社然り、小商人同志に至つては、一人が苦心して販路を開き相當利益が上がり、漸く立つて行けさうになれば、直ぐ他の人が同一地盤で同一の仕事を始める。そして忽ち競爭を始める。惡競爭の結果、一方が値を下げれば、こちらは更に下げる。で、しまひには元値を切つて賣らなければならなくなる。その結果、製造元に影響し、品質の粗惡となり濫造となり、爲めに信用を失墜し、共倒れの結果に陷る。斯の如きは到るところでその實例をみるのである。

組織的活動の訓練

文明の活動は組織的の活動でなくてはならぬ。元龜天正時代の戰爭と違ひ、獨りで十六貫の鐵棒を振りまわして荒れまわつた處で何の効果もない。凡てが科學的に研究された一大組織の下に正々堂々一絲亂れず勇奮活動してこそ、始めて効果が上がるのである。現在、農園經營に於ても數園共同して實地の經驗が充分あり、經營上の材幹あるものを顧問指導者とし、又、會計上にも共同の會計監督官を置き、支配人と共同して、互に好感を以て、事業を經濟的にやつて、浪費を

防ぎ失敗を未然に防止する方法をとるなど、漸次共同してその利を多くするやうに力めて居る。

しかるに最も利益に敏なる商人が、完全なる組合を作つて、共存共榮の活動が完全に行はれないなどは實に不思議と云はねばならぬ。殊に資金難の關係から無闇に廉賣投賣りを始め邦商全部に迷惑を及ぼし、不利を蒙らすなどは實は思はざるの甚だしきもので、商業道德も組織的活動も無視した輩のまだ後を絶たないのは嘆ずべきである。

永久的に

蘭人が甘蔗畑を作るには、先づ始めに廣大なる地所を得、次に住宅地區に植樹を始める。それから住宅を構へ、次に試驗園をつくり、溝渠をつくり、最後に畑をつくる。その間株主も重役も手腕ある人に經營をまかせて信頼して待つてゐる。五年、十年よしんば配當がなくとも、事業の成育を樂しんでゐるだけの餘裕がある。隨つて事業は漸進的に堅實に進んで行く。

日本人の經營になると、猿蟹合戰の昔話のやうに、植えたかと思へば早く芽を出せとあせり、芽が出れば直ぐに利益利益と騒ぐ。十年十五年の後などはどうでもよい。經營費は成るべく少くして、直ぐに利益のあるやうにしないと承知をしない。

和蘭人が本國に六十二倍の東印度を、植民地として今日までに大成せしめたのは、この永久的努力の結果である。しかるに邦人の事業が南洋に於て兎角投機的に傾いたり、少し安泰になれば引き揚げたりするのは、永久的の安住所としての考へが薄い爲めである、この點は支那人などに學ぶべき處が多い。

和蘭に學ぶところ

現今は排日とか何とか言つて、先方の思惑ばかり考へて心配するやうであるが、今時何處へ行つたとて生活に適するやうな處で、日本人が來て呉れなければ立つて行けぬと云ふやうな國のある譯がない。それについて感心するのは和蘭である。あんな小さな國で、しかも東洋に乗り出して來たのは葡西兩國から見るとずつと後れて居るのに、葡、西の勢力を蹴ちらかし、强敵英國とも抗爭して遂に東印度に大植民地をつくつてしまつたのである。

これを日本に於ける働きについてみるも、和蘭が始めて來たのは西班牙や葡萄牙が來たときからみると六十年も後であつた。葡萄牙や西班牙の勢力は素晴しいものであつたが、日本の當局者が切支丹を厭やがるのをみて取つた蘭人は、キリストの聖像を踏み十字架を碎いてキリシタンで

ないことを證明した。又喜望峯の近海で葡船を捕拿したところ、船の中から幕府を倒す連判狀が出たと告訴したのも和蘭であつた。又西班牙人が日本沿岸測量をするのを、國權侵害だと言つて停めさせ、宣教師は皆政府の間諜だと說いたのも和蘭であつた。大阪の役に大砲を提供し、島原の亂に火藥を送つたのも和蘭であつた。島原の亂には和蘭東印度商會の委員コケベツケルは軍艦から大砲を發して、遙に海上から應援したものである。

百方手段を講じ幕府の信任を得るには、至れり盡せりの忠實振りを見せた。兎に角、鎖國令の出た頃の排外と來たら、うか〳〵通商を求めになど來れば首をチョン切られるのだから凄じい。この間に於て幕府の信任を得て葡西のみならず、英國までも追ひ拂つて貿易權を獨專してしまつたのである。

幕府としても西洋で一ケ國位は空氣窓をあけて置く必要もあつたらうが、手段の正邪は兎に角先方の氣分を察し、あく迄隱忍耐苦目的を貫徹する迄やつて行く蘭人の努力と精根とには敬服せざるを得ない。

この熱心と努力とを以てやつて行つたならば手段も方法も自ら湧いて來る。諸外國はこれ迄

の努力と犧牲とを拂つて、漸く地盤を固めて來たのに三百年も門戸を鎖して、桃源の夢を貪つて居て、今覺め來ればあちらもこちらも既に劃然と分野は定まり、門戸を固くし番兵がついて居る。で、多少の文句はあり問題のあるのは當然である。矢張り和蘭がやつたやうに忍耐と努力でぐん〳〵道をあけて行くより外仕方がない。

海外思想の涵養が第一

一

教員の海外視察を奬勵せよ。

古から百聞一見に如かず云ふ。地圖や統計表や書いたものでいかに海外の氣分を味はうと思つても、しつくりと頭にひゞいて來るものではない。

諸異邦人の間に交つて活動して居るわが同胞の有樣や、日章旗をへんぽんと海風に靡かせて、堂々たるわが軍艦が外國の港を訪問したときに、その地の同胞が齊しく流す感激の涙は、その地に足をふみ入れて始めて體得出來るのである。冷暖自知である。

中國九州邊の教育會では、よく、滿韓視察をやる。これは東京に出懸けると同じ位の費用で行けると云ふ點もあるが、教育上には非常な力がある。長野縣では小學校長が、ブラジルを始め南北米の同胞の活動を視察することを始めた。

蘭領爪哇のスラバヤ迄は、大阪商船で、臺灣比律賓を經由して十四日で到着する。船賃は三等で七十圓である。爪哇に二週間の滯在期間があるから、この間に爪哇全島を充分觀ることは出來るし、スマトラへも一寸位はのぞかれる。南洋郵船でも同じ位である(後章南洋航路參照)。小便旅行で何がわかるか、と冷かすものもあらうが、旅行は豫備の智識が充分であれば二ケ月もあれば澤山、却て一年以上になれば、珍らしいと思ふこともなくなり、凡てが普通で平凡になる。政府も功勞あるものには待遇上の心配をしてくれるが、民族發展地の視察などにも、教員を巡々に派遣するやうにして貰ひ度い。

二

海に親め

三百前年吾々の祖先が、海の勇者となつて、南支那から南洋、メキシコ邊までも押しまわして

居つたのは前に述べた通りであるが、寛永十二年、船は一本の檣以外は禁止され、船底の龍骨は廢せられ、五百石以上の船は燒き棄てられ、新に造ることも禁ぜられてから、海の國であり乍ら海には弱い國民となつた。で、八丈島が鳥も通はぬ程遠方になつたり、佐渡ケ島は牙いと言はれても行かれぬ島になつたりした。海の危險率の方が陸上の危險率に比して遙に少い今日に於てさへ、海と云へば神經的に氣分を惡くすると云ふ國民である。ある日本船が桑港を出るときに暴風雨にあつた。大分船暈をするものが出來た。そこでボーイが「海が暴模樣ですから出帆は明朝になります」と大聲で觸れ回つてあるいたところ、今までの船ゑひの連中は立ちどころに回復した。船は未だ出帆したのではなかつたのだ。嘘のやうであるが事實譚である。

學校の修學旅行などにも、成るべく海を航行することを希望する。近頃は關西の中等學校の修學旅行などで、横濱から神戸迄を南米航路や歐洲航路の船を利用するのを見かけるが、結構なことである。船會社も成るべく便利を與へてこの種の企てを奬勵して貰ひたい。

兎に角、航海は樂しいものだと云ふ思想を涵養したい。

三

外國をお隣りとして

北米で女の靴下が一寸長くなつたとか、短くなつたとかの流行が、直に日本の農家の盆暮れの勘定に影響し、爪哇やキューバの甘蔗の豐凶が、直ぐお勝手元の家計簿に響いて來る。又、着て居る着物の原料が支那や、印度や、北米で、穿いて居るゴム靴ゴム足袋の原料が南洋である。お酒の原料米はラングーンから來る。と云ふ風に今では諸外國が、山村僻邑の生活にまでも切實にピンと響く。

今中等學校の教科に植民科を加へるとか、何んとか云ふことは一寸面倒かも知れないが、説明する教師の智識の程度と氣持ちで、外國と云ふものは唐天竺の遠いところで、遠方から眺めて居るところになつたり、日本から征伐される國になつたりするから、植民的の氣分で教育すると、しないとで非常に違ふ。

要するに地球は人類の住家で、さう臆劫に考へずに、かうすれば行つて生活が出來る。かうやれば仲よく幸福に暮らせる、と云ふ風に手輕に思想を養つて行けると思ふ。昔の淀川を船で下つた時代の名所舊蹟など數へたり、小大名の領地の爭奪などはどつちしても知れた問題だ。將來の我

が民族の發展の爲めに生きた教育を望むと曰ふのである。

四

軍隊が最良の教育所

民族的に剛毅なる精神をうち込むところとしては、軍隊ほど適切の處はない。近頃は軍隊も大に社會化して來て、單に攻城野戰のみならず農業の趣味を涵養したりいろ〳〵やるやうである。が、新開拓地に於て活動するに必要なる智識や訓練を行ふに、最も適切なところは軍隊に如くものはない。軍隊に於て訓練するところの困苦缺乏に堪えること、協同一致の統制ある活動、野營繫道、架橋、炊事、乘馬、銃器の使用から衛生等開拓者には皆必要なる教育であり、訓練である。終局の目的は民族の隆昌と發展にある。唯その手段が一は鋤鍬と算盤とにより、一は銃劍砲彈に倚ると云ふに過ぎない。赳々たる健兒の戰ふ場所は、必ずしも砲烟天に漲る處とのみは限らないのだ。至る處平和の武器によつて功名を樹てるが良い。潑溂たる元氣盛んなる時に、軍隊に於て海外の智識を併せ授くるは最も效果あるものである。

五

婦人の教育

南洋に於て、わが婦人も家業に忙しきものは、健康を保ち潑溂たる元氣がある。却て奥さんとなつて女中や下男を使つて居らるゝ境遇のものは、氣候が單調で、生活が單調で、社交の範圍は極めて狹く、運動すると云ふ事もないので、全く無聊で困るやうになる。そこであそこゝ工合が悪くなり、眼にちらつくものは櫻の花であり芝居であるやうになる。折角夫が南洋の大業を志しても奥さんがそれでは仕方がない。早く南洋を切り上げて、多少位置はわるくとも内地の方がよいと云ふことになる。

いくら下女下男をつかつても、海外に活動をすると云ふ理想抱負があるならば、語學の修業もよし、運動も可なり。又家に居て内助の仕事はいくらでもある筈である。

婦人の海外生活につきての教養訓練の方法がまだ缺けて居ると云ふことになる。

邦人活躍の南洋　終

附　　錄

蘭領東印度への航路

蘭領東印度への航路は、爪哇直航と、新嘉坡經由との二ツある。爪哇直航には、三社の航路がある。南洋郵船會社、大阪商船會社の南洋航路、和蘭汽船會社の Java China Japan Line（爪哇、支那、日本線）の日本航路である。

大阪商船會社

定期毎月一回

使用船	總噸數	船客定員 一等	二等	三等
ばたびや丸	四、三九二噸	一二一人	一八三人	
すらばや丸	四、三九一噸	一二一人	一八四人	

航路（往航）は、横濱より名古屋、大阪、神戸、門司、基隆、マニラ（隔月寄港）、英領北ボルネオのタワオを經て、門司出帆から十四日目にスラバヤに着く。

復航はマカツサ（セレベス島）タワオ、香港、高雄、基隆を經て歸つて來る。復航は基隆より横濱に直航であるから、門司か神戸に上陸の都合のあるものには神戸基隆線に乘繼が出來る。

南洋定期線船客運賃表

	神戸	門司	基隆	マニラ	タワオ	スラバヤ	マカッサ	タワオ	香港	高雄	基隆	門司	神戸
門司	一九五圓												
基隆	六二〇圓	五五一八											
マニラ	一四六〇圓	一三六三八	八一二七										
タワオ	一六五三圓	一五四一	九九三三	四五一五									
スラバヤ	一七七〇〇圓	一六六八〇	一五五五〇	一四五〇	一三三八〇								
マカッサ	――	――	――	――	――	四五一五							
タワオ	――	――	――	――	――	七八二六	三三一一						
香港	――	――	――	――	――	一二〇四五	九三〇〇	七八二六					
高雄	――	――	――	――	――	一五〇五三	一四〇三八	九九三三	四五一五				
基隆	――	――	――	――	――	一五〇五三	一四〇三八	九九三三	五四一八	二四八			
門司	――	――	――	――	――	一七五七一	一六九五六	一五四一	一〇九三六	――	――		
神戸	――	――	――	――	――	一八一七三	一七九五八	一六四五三	一一九三九	――	――	――	
	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等	三一等

備考

○運賃ハ各地トモ圓ヲ以テ單位トス

○復航―神戸、門司、上陸客ハ基隆ニテ基隆神戸航路船ニ轉乘スル事ヲ得

○往復切符、神戸、門司、基隆ヲ發航地トシ一廻航ノ上高雄又ハ基隆ニ歸着スル往復切符ヲ發賣ス運賃及有効期間左ノ如シ

運賃
- 神戸―スラバヤ―基隆 一等二六五圓、三等一〇〇圓
- 門司―スラバヤ―基隆 一等二五五圓、三等一〇〇圓
- 基隆―スラバヤ―基隆 一等二一五圓、三等八〇〇圓

通用期間四箇月間各地ニ上陸シ次船ニ乘繼グコトヲ得

小兒運賃 十二歳未滿半額、四歳未滿四分の一、二歳未滿は一人丈け無賃

但比律賓線は十二才未滿半額、四才未滿一名無賃其他は四分の一額。

食事 一等洋食三等和食

手荷物無賃輸送制限量 一等四十才又は三百五十封度、三等二十才又は百五十封度、此無賃輸送制限量を超過したる時は其超過量に對し一才又は十封度に付五十錢の割。

但一等二百才又は千七百五十封度、三等一百才又は七百五十封度を超過する時は荷物として取扱ふこと。

汽車無賃乘換 香港以遠往來の一等船客は神戸、門司長崎相互間に限り其乘船區域の一部を汽車便によることが出來る。

南洋郵船會社

神戸が基點で就航船が五隻、五千噸級の汽船で、大體大阪商船と大差はない。往航は神戸からマカツサを經てスラバヤへ直通、神戸を出てから十三日目にスラバヤに着く、毎月十八日目位に神戸を出帆する。

運賃も同じである。

Java China Japan Line（爪哇、支那、日本線）

日本航路就航線は一万噸級以下、六七千噸級の立派な船が六隻ある。が乘船の設備のあるのは今のところ二隻だけである。洋食と支那食とある支那食の方が安い。運賃は少し高いが設備がよい。航海日數は横濱迄が十四日。

新嘉坡經由

横濱から新嘉坡迄は、歐洲航路も南米航路もあり、印度航路もある。日本船外國船が斷えず出帆して居るから、便利が良い、又客船としての設備も整ふて居るが、新嘉坡に行く日數が神戸から二週間はかゝり。また運賃もスラバヤに行く以上にかゝり、それからバタビヤ迄百圓もかゝるから爪哇行ならば南洋直通航路をとつた方がよい。しかし、スマトラのメダン地方や、馬來に行くには新嘉坡の航路によらなければならない。

裏南洋メナード航路

セレベス島のメナードへ行くには、日本郵船の裏南洋西廻線がある。これは横濱を發して小笠原島二見、サイパン、ヤップ、パラオ、アンガウルを經てメナードに達する。横濱から二千八百十二浬、十八日でつく。運賃は一等百八十九圓、二等百三十圓、三等が七十二圓である。毎月一

回の便船がある。

蘭領諸島間

スラバヤから蘭領諸島への航路は自由にある。ボルネオの西部とバンデヤルマシンへは新嘉坡の直通航路もある。この航路は和蘭の會社の獨占事業で、その運賃の高いことは驚くの外はない。スラバヤ、マカツサ間四百五十八浬の運賃が一等九十九盾、二等五十九盾、三等三十盾、甲板にゴロ寢の客が十二盾五十仙といふのだ、大阪商船ならばスラバヤからマカツサ迄は、一等四十五圓三等で十五圓であるが。盾に換算しても一等が五十四盾（百二十盾の計算）である。K・P・M會社は現在六十一の航路を有して居るが缺損にならぬ線は少い、去り迚廢する譯にも行かぬので繼續し、幾分儲かる線で補ひをつける位の處であるので世界一高いのだと云ふ。

外國旅券出願樣式

外務省令第四號

外國旅券規則左ノ通改正ス

昭和四年五月二十日

外務大臣　男爵　田中義一

外國旅券規則

第一條　外國ヘ渡航スル者ニ下付スル旅券ハ外務大臣之ヲ發給シ外國ニ於テハ在外公館長ヲシテ之ヲ發給セシム

第二條　旅券ノ下付ヲ請フ者ハ左ノ書類ヲ內國ニ於テハ本籍地又ハ所在地ノ地方廳、關東州ニ於テハ關東廳、外國ニ於テハ在外公館ニ差出スベシ但シ當該官廳ノ認定ニ依リ身許申告書、戶籍謄本又ハ戶籍抄本及保證書ノ添附ヲ省略セシムルコトヲ得

一　旅券下付願書(附錄第一號參照)

二　身許申告書(附錄第二號參照)

三　戶籍謄本又ハ戶籍抄本

四　寫眞二葉(最近ノ撮影ニ係ル手札形半身無臺紙)

五　他ヨリ派遣セラルヽ者ハ其ノ派遣責任者ノ保證書(附錄第三號參照)

六　在外公館長發給ノ呼寄、再渡航等ニ關スル證明書又ハ外國官憲發給ノ入國ニ關スル許可證明書若ハ通知書等ヲ有スル者ハ該書類

七　外國在留者ノ呼寄ニ關スル書信等ヲ有スル者ハ該書信類

八　其ノ他參考ト爲ルベキ書類アル場合ハ該書類

九　右ノ外附錄第四號ニ揭載シタル目的國及渡航目的ニ依リ特ニ必要トスル書類

前項第二號ノ身許申告書中、兵役賞罰及納稅ニ關シテハ內國ニ於テハ市區町村長又ハ警察官署ノ證認ヲ得タル上差出スベシ

第三條　公用ノ爲外國ニ渡航スル者及其ノ同伴スル妻子從者ニ對シテハ所屬長官ヨリ寫眞二葉ヲ添附シ且ツ從者ニ付テハ戶籍謄本又ハ抄本ヲ添附シテ外務大臣ニ公用旅券ノ下付ヲ請求スベシ(附錄第五號參照)

公用ノ爲外國ニ在ル者其ノ所在地ニ妻子又ハ從者ヲ呼寄セントスル場合亦前項ニ準ズ

第四條　移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ノ取扱ニ係ル移民ヨリ差出ス旅券下付願書ニハ移民取扱人之ニ連署スベシ

第五條　內國及關東州ニ於テ旅券ノ下付ヲ受クル者ハ手數料トシテ旅券一部ニ付移民ニ在リテハ五圓非移民ニ在リテハ十圓ニ相當スル收入印紙ヲ領收證ニ貼付シテ之ヲ差出スベシ

在外公館ヨリ下付ヲ受クル旅券ノ手數料ニ關シテハ大正九年外務省令第五條領事官ノ徵收スル

手數料及出張費用ニ關スル規定ニ依ル

第六條　旅券ノ下付ヲ受クル者ハ自ラ其ノ旅券面所定ノ場所ニ署名スベシ

旅券ノ査證ヲ必要トスル國ニ渡航スル者ハ其ノ國ノ定ムル所ニ依リ査證ヲ受クベシ

第七條　旅券ノ下付ヲ受ケタル後其ノ旅券ノ要項ニ變更ヲ生ジタルトキ及其ノ他旅券ノ書替ヲ必要トスル場合ハ事由ヲ具シ內國及關東州ニ於テハ該旅券ヲ下付シタル官廳又外國ニ於テハ在外公館ニ之ガ書替ヲ願出デ又ハ請求スベシ但シ非移民旅券ニ付テハ急速ヲ要スル場合ハ內國ニ於テハ直接外務省ニ之ガ書替ヲ願出ヅルコトヲ得

前項書替下付ノ旅券ニ對シテハ內國及關東州ニ於テハ三圓ニ相當スル收入印紙ヲ領收證ニ貼付シテ之ヲ差出スベシ但シ其ノ書替ヲ要スル原因ガ關係官廳ノ過失ニ因リテ生ジタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

旅券ノ書替ヲ爲シタルトキハ舊旅券ハ之ヲ無效トス

第八條　旅券ノ下付ヲ受ケタル者旅券ノ日附ヨリ六ケ月以內ニ出發セザルトキハ該旅券ハ其ノ效力ヲ失フ

第九條　旅券ノ下付ヲ受ケタル者歸國シタルトキハ該旅券ハ之ヲ無效トス

第十條　用務ノ爲特定ノ地ニ數次往復スル者ニ對シ內國ニ於テハ願出ニ依リ數次往復旅券ヲ下付スルコトヲ得

前項ノ旅券ハ其ノ日附ヨリ三年ヲ經過シタル後初メテ歸國スル迄之ヲ有效トス

第一項ノ特定地ハ外務大臣之ヲ告示ス

數次往復旅券ニ對シテハ二十圓ニ相當スル收入印紙ヲ領收證ニ貼付シテ之ヲ差出スベシ

第十一條　無效又ハ失效ノ旅券ハ直ニ之ヲ該旅券ヲ下付シタル官廳ニ又ハ其ノ他內國ニ於テハ地方廳關東州ニ於テハ關東廳若ハ外國ニ於テハ在外公館ニ返納スベシ

第十二條　無效又ハ失效ノ旅券ヲ自己ノ手許ニ保存セント欲スル者ハ返納ノ際其ノ旨ヲ申出デ消印ヲ得タル上之ガ下付ヲ受クルコトヲ得

第十三條　現ニ有效ナル旅券ト雖モ當該官廳ヨリ命令アルトキハ何時ニテモ之ヲ返納スベシ

第十四條　旅券ヲ紛失シ又ハ燒失シタルトキハ直ニ其ノ旨ヲ第十一條所定ノ官廳ニ屆出ヅベシ紛失旅券ヲ發見シタル場合亦同ジ

第十五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ沒收シ百圓以下ノ罰金若ハ科料又ハ三月以下ノ懲役若ハ拘留ニ處ス

一、事實ニ相違スル記載又ハ申立ヲ爲シ其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幇助シタル者

一、他人名義ノ旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメ其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者及之ヲ幇助シタル者

一、旅券ニ貼付シタル寫眞ヲ取換ヘ該旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメタル者但シ刑法ニ正條アル場合ヲ除ク

一、本令ニ依リ旅券ヲ返納スベキ場合ニ之ヲ返納セズシテ使用シ又ハ事實ヲ僞リテ旅券ヲ紛失シ若ハ燒失シタル旨ヲ屆出デタル者

第十六條　本令ニ於テ地方廳トハ北海道廳及府縣廳ヲ謂ヒ東京府ニ在リテハ移民ニ關スル限リ警視廳ヲ謂フ又在外公館トハ帝國大使館、公使館、總領事館、領事館、總領事館分館、領事館出張所及領事館出張所ヲ謂フ

第十七條　朝鮮、臺灣、樺太及南洋群島ニ於ケル旅券ノ下付ニ關シテハ朝鮮總督、臺灣總督、樺太廳長官及南洋廳長官ノ夫々定ムル所ニ依ル

附　則

第十八條　本令ハ昭和四年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十九條　明治四十年外務省令第一號外國旅券規則ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス本令施行後下付スル旅券ト雖モ本令公布前ニ之ガ下付ヲ出願シタルモノニ對シテハ手數料ハ從前ノ規定ニ依ル

（附錄第一號　甲非移民）

外國旅券下附願（用紙美濃紙形）

一、氏　名　傍ニ片假名ヲ付スベシ「ローマ」字綴ノ一定シ居ル者ハ其ノ綴ヲ記載スベシ

一、本　籍　地　番地ニ至ル迄記載ベシ郡町村字名ニハ片假名ヲ付スベシ

一、所　在　地　番地ニ至ル迄記載スベシ

一、身　分　戸主ト家族トノ別、家族ナルトキハ戸主ノ氏名及戸主トノ續柄ヲ記載スベシ戸主ノ氏名ニハ片假名ヲ付スベシ

一、年　齡　何年何月何日生、滿何年何ケ月

一、職　業　例ヘバ「醫師」「何輸入商」、「何會社取締役」等ト記載スベシ

一、旅行地名　例ヘバ「香港、新嘉坡」、「コロンボ」及「ポートサイド」經由「佛國」ノ如ク經由地及目的國ヲ記載スベシ

一、旅行目的　例ヘバ「視察」「修學」「商用」等

一、旅行理由　旅行セントスル事情ヲ簡明ニ記スベシ

一、身　分　「メートル」法ニ依ル「メートル」法不案内ノ者ハ「何尺何寸何分」ト記載スベシ

一、特　徵　外部ヨリ見ユル身體ノ特徵一箇所。特徵ナキ者ハ「ナシ」ト記載スベシ

一、出　發　港　何　港

一、出發豫定期日　何年何月何日

一、歸國豫定期日　何年何月

一、乘船等級　何　等

一、普通旅券ト數次往復旅券トノ別　外國旅券規則第十條ニ依ル數次往復旅券ヲ希望スル者ハ「數次往復旅券」ト記載シ然ラザル者ハ「普通旅券」ト記載スベシ

右ニ依リ外國旅券御下付相成度別紙身許申告書、戸籍謄本（又ハ戸籍抄本）何書（第二條第一項

第五號乃至第九號ニ該當スル書類）及寫眞二葉添附此段相願候也

年　月　日

氏　名 ㊞

地方長官（關東長官、在外公館長）宛

備考

一、未成年者ガ親又ハ之ニ代ルベキ扶養者ノ呼寄ニ依ルニ非ズシテ單獨ニ渡航スル場合ハ親權者、後見人又ハ戸主ハ之ニ同意ノ旨ヲ附記シテ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

一、妻ガ本邦ニ在ル夫ト離レテ單獨ニ渡航スル場合ハ夫ハ之ニ同意ノ旨ヲ附記シテ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

一、妻子ヲ同伴スル場合ハ氏名、年齡、身長及特徵ヲ夫々人別ニ記載ノ上同一願書ニ出願スル事ヲ得

右ノ場合ニ於テ妻子ヲ夫又ハ親ノ旅券ニ併記セント希望スル者ハ「某ヲ某ノ旅券ニ併記」ト氏名ノ下部ニ記載スル事

（附錄第一號　（乙）移民）

外國渡航許可竝ニ旅券下付願（用紙美濃紙形）

一、氏　名　傍ニ片假名ヲ付スベシ

一、本　籍　地　番地ニ至ル迄記載スベシ。郡町村字名ニハ片假名ヲ付スベシ

一、所　在　地　番地ニ至ル迄記載スベシ。寄留地ヲモ含ム寄留地ノ場合ハ「所在地」ノ下ニ「寄留地ト記入スベシ

一、身　分　戸主ト家族トノ別、家族ナルトキハ戸主ノ氏名及戸主トノ續柄ヲ記載スベシ。戸主ノ氏名ニハ片假名ヲ付スベシ

一、年　齡　何年何月何日生、滿何年何ケ月

一、職　業　例ヘバ「農業」「何小賣業」「何職工」等ト記載スベシ

一、渡航地名　例ヘバ「布哇及北米合衆國經由「メキシコ」國」等ノ如ク經由地及目的國ヲ記載スベシ

一、渡航目的　例ヘバ「農業」「漁業」又ハ「文ノ呼寄」等ト

一、渡航理由　渡航セントスル事情ヲ簡明ニ記載スベシ

一、身　長　「メートル」法ニ依ル「メートル」法不案內ノ者ハ「何尺何寸何分」ト記載スベシ

一、特　徵　外部ヨリ見ユル身體ノ特徵一箇所。特徵ナキモノハ「ナシ」ト記載スベシ

一、出　發　港　何　港

一、出發豫定期日　何年何月何日

一、乘船等級　何　等

右ニ依リ外國渡航許可竝ニ旅券下付相成度別紙身許申告書、戸籍謄本（又ハ戸籍抄本）何書（第二條第一項第五號乃至第九號ニ該當スル書類）及寫眞二葉添附此段相願候也

年　月　日　　氏　　名㊞

地方長官（警視總監）宛

備考

一、移民取扱人ノ取扱ニ係ル移民ナルトキハ移民取扱人ガ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

一、海外移住組合ノ移住地ニ入植スル爲渡航スル者ニ在リテハ同組合理事長ノ保證書ヲ本願書ニ添附スルコト

一、植民地經營者ノ取扱ニ依リ渡航スル者ニ在リテハ該植民地經營者ガ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

一、家族移民ノ場合ハ家族全員ノ氏名、年齡、身長及特徵ヲ夫々人別ニ記載ノ上同一願書ニ出願スルコトヲ得此ノ場合ニハ家長及家長トノ續柄ヲ各自ノ氏名ノ上部ニ記載スルコト

一、家族移民其ノ他妻子ヲ同伴スル場合ニ於テ妻子ヲ夫又ハ親ノ旅券ニ併記セント希望スル者ハ「某ヲ某ノ旅券ニ併記」ト氏名ノ下部ニ記載スルコト

一、未成年者ガ親又ハ之ニ代ルベキ扶養者ノ呼寄ニ依ルニ非ズシテ單獨ニ渡航スル場合ハ親權者、後見人又ハ戶主ハ之ニ同意ノ旨ヲ附記シ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

一、妻ガ本邦ニ在ル夫ト離レテ單獨ニ渡航スル場合ハ夫ハ之ニ同意ノ旨ヲ附記シテ本人ノ名ノ次ニ署名捺印スルコト

（附錄第二號）

身許申告書（用紙美濃紙形）

氏　　名

何年何月何日生

學　業

一、（「何年何月何學校卒業」ト記載スルガ如シ）

一、（或ハ「何年何月ヨリ何年何月迄何所ニ於テ何々研究」ト記載スルガ如シ）

職　業

一、（「何年何月何會社ノ事務員ト爲リ何年何月何支店詰ト爲リ何年何月何支店長ト爲リ今日ニ至ル」ト記載スルガ如シ）

一、（或ハ「何年何月以來農業ニ從事」又ハ「何年何月以來何商ニ從事」ト記載スルガ如シ）

兵　役

一、（「何年何月徵兵檢査ノ結果甲種合格何々兵第何補充兵ト爲ル」又ハ「徵兵適齡前ニ付兵役關係ナシ」ト記載スルガ如シ）

渡　航

一、（「何年何月何府縣ヨリ旅券ノ下付ヲ受ケ何々ノ爲何國ニ渡航何年何月歸國」ト記載スルガ如シ）

賞　罰

一、（「曾テ刑罰ヲ受ケタルコトナシ」ト記載スルガ如シ）

一、（「何年何月何府縣知事ヨリ何々トシテ表彰セラル」ト記載スルガ如シ）

一、（或ハ「何年何月何區裁判所ニ於テ何罪ニ因リ罰金何圓ニ處セラル」ト記載スルガ如シ）

資　産

一、自己所有分

（イ）地所家屋價格　圓

（ロ）商品價額　圓

（ハ）貸金預金債券現金　圓

（ニ）其ノ他動産價格　圓

合　計

一、戸主所有分（本人ガ戸主ナル場合ハ不要）

（記載方前同樣）

納　稅（最近ノ納稅年額ヲ記載ス）

一、自己ノ分

（イ）所得稅　圓

（ロ）其ノ他ノ國稅　圓

（ハ）府縣稅　圓

（ニ）市町村稅　圓

合　計

一、戸主ノ分（本人ガ戸主ナル場合ハ不要）

（記載方前同樣）

右ノ通相違無之候也

年　月　日

氏　名　㊞

（本人自署ノ事）

地方長官（警視總監、關東長官、在外公館長）宛

右兵役、賞罰及納稅ニ關シ認證ス

年　月　日

市區町村長（又ハ警察官署長）　氏　名　㊞

備　考

一、再渡航者ニ在リテハ兵役渡航及賞罰以外ノ事項ハ省略スルコトヲ得

（附錄第三號）

保　證　書（用紙美濃紙形）

氏　　名

何年何月生

右者當會社（銀行商店協會等）ノ事務員（職名ヲ記載スルコト）ニシテ今般何用ノ爲（何支店勤務ノ爲等）何國ニ派遣スルモノニ相違無之同人ノ渡航費及滯在費全部（或ハ渡航費何程滯在費何程）ヲ當方ニ於テ支出シ且同人ノ身上ニ關シテハ一切當方ニ於テ責任ヲ以テ引受可致此段保證候也

年　月　日

所　在　地

何會社（銀行、商店、協會等）

社　長（代表者ノ職名ヲ記載スルコト）氏　　名　㊞

地方長官（關東長官、在外公館長）宛

備　考

追書トシテ派遣責任者ノ業務及資產（法人ナルトキハ其ノ拂込資本金及創立年月）等記載ノコト

附錄第四號ハ南米英國濠洲等ニ渡航者ニ必要ナル書類、附錄第六號ハ公用旅券請求手續ニツキ省略

昭和四年七月五日印刷
昭和四年七月十日發行

邦人活躍の南洋
定價金貳圓五拾錢

著者　宮下琢磨

發行者　東京西巢鴨町宮仲二六四九　岡田榮太郎

印刷者　東京市神田區三崎町三ノ七一　百目木智璉

發行所　東京西巢鴨町宮仲二六四九　岡田日榮堂
電話大塚一五一七番
振替東京六二九五八番

版權所有

印刷合榮共社會式株

岡田日榮堂發行圖書目錄

		定價	送料
門馬直衛著	最新樂典教科書 文部省檢定濟	.95	.08
スタンホード著 門馬直衛譯	作曲法	3.00	.18
ヘンダースン著 門馬直衛譯	オーケストラ講話	2.50	.18
マルケーツ夫人著 門馬直衛譯	歌ひ方十講	2.00	.18
門馬直衛著	ベートーフエン	1.50	.06
同	シユーベルト	1.50	.06
同	シユーマン	2.00	.08
同	樂典	1.20	.08
山口常光著	絃樂器論	2.00	.18
門馬直衛閲	オルガンドリン教則本 第一卷 第二卷	各1.90	.18
門馬直衛著	音樂理論の常識	1.00	.06
同	各國の音樂の特長	1.00	.06
東京音樂協會編	蓄音器の用法	.50	.04
シ・メーソン閲	オルガン速成	.50	.06
門馬直衛著	曲目解説集	2.00	.18
靈絲業同業組合中央會編	支那靈絲業大觀	8.00	.36

556
358

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black